第3回

西の正倉院 みさと文学賞

作品集

「西の正倉院 みさと文学賞」実行委員会・編

第３回「西の正倉院　みさと文学賞」に寄せて

「西の正倉院　みさと文学賞」は、九州宮崎県の北部山間に位置する美郷町に生まれた文学賞である。美郷町は、平成18年、旧３村が合併して誕生した。この美郷町南郷（旧南郷村）に、古代の朝鮮半島に栄え、仏教をはじめとする多くの文化を日本にもたらした王国「百済」の王族が隠れ住んでいたという伝説が残されている。百済の内乱から逃れてきた百済王一家の伝説は、今もなお語り継がれ、現存する百済王一家を祀る神社や古墳、その親子が年に一度対面する「師走祭」等がその伝説を裏付けている。中でもこの師走祭は、かつては統治を異にする藩を跨り、行政の枠を超えて、執り行われ続けられた稀有な祭りである。

そして「小さな村の大きな挑戦」の「平成の大事業」として百済王伝説を象徴し、奈良正倉院の御物と同一品といわれる唐花六花鏡などを展示する『西の正倉院』がつくられた。

これら光源となった「物語資源」を背景につくられたのがこの文学賞であり、いわば新生美郷町の伝統と誇りを担った文学賞であると言っても過言でない。あらためて文学賞創設にご協力とご支援をいただいた企業の皆様、ＭＲＴ宮崎放送、日本放送作家協会に感謝したい。

さて、第３回となったこの文学賞に、今年度１００点の応募があった。海外からも寄せられた。いずれもすばらしい作品であったとのことで応募された方々に深甚なる謝意を表したい。入賞された方々に心からお祝いを申し上げると同時に、選考にあたっていただいた審

査委員長の作家・中村航先生、地域創生プロデューサーの高野誠鮮先生、民俗学者の逵志保先生、関係諸氏に感謝と敬意を表したい。一人でも多くの方々にこれら作品を読んでいただくことを願っている。

令和2年は、新型コロナウイルスの感染ニュースに明け暮れた。本県においてもいよいよ感染が身近になり、約1年が経過した現在でも終息の気配はない。このウイルスの世界的な猛威で私たちの生活は、一変させられた。家庭生活においても社会生活においても大きな変容を求められた。いわゆるソーシャルディスタンスは、単にフィジカルな距離でなく、心と心の距離感まで遠ざけてしまった。いろいろなイベントも中止か延期を余儀なくされ、人が集まることがなくなり、ふれあいも少なくなった。

私たちは、いずれこの非常事態をワクチン接種で克服するだろうが、同時に、将来、地球温暖化による異常気象の影響が、予期せぬ類似の危機をもたらすだろうことを理解しはじめている。

今後、目に見えぬウイルスとの闘いは、経済などあらゆる分野に構造的変革を促すだろうことは想像に難くない。今、緑豊かで自然に恵まれた中山間地域は、人口減少で喘いでいるが、人流の潮目が変わるだろうとの期待感もある。当然、コロナ禍で文学の世界も変化しているにちがいないし、不安と絶望から抜け出す文学に寄せる期待も大きい。この賞と作品集がその一端を担ってくれることを願っている。

宮崎県美郷町

目次

第3回「西の正倉院 みさと文学賞」に寄せて
宮崎県美郷町 2

総評 作家 中村航 6

大賞

「ふるさとの灯（あかり）」宮地佳那子 9

優秀賞（日本放送作家協会賞）

講評 日本放送作家協会理事長 さらだたまこ 26

「daisy」白石慧 29

優秀賞（MRT宮崎放送賞）

講評 宮崎放送 ラジオ・ディレクター 小倉哲 50

「子らは炎に導かれ」寺西輝将 53

佳作

「青いトンネル」花逗成　83
「草煎(くすい)りのユンジェ」杉尾周美　107
「先行きの地図」南理維　133
「星読みの国」帯刀古禄　159
「夕暮れノオト」繁田優菜　193
「Lovely Place」松田紙弥　223
一次審査通過作品リスト　254
お知らせ　255

総評

作家
中村航

三回目の開催となった「みさと文学賞」だが、コロナ禍のなか、小説の書き方講座や、美郷町の紹介をするイベントなど、多くの行事がリモートで行われた。初めての試みで不安なことも多かったが、イベントは盛況に終わり、またリモート選考会においても活発な議論ができた。関係者各位の努力に、たいへん感謝したい。

作品についても、まずは応募作品が過去最高数となり、予選通過作のレベルも高かった。選考委員として三十作品程度を読んだが、どれも小説としての魅力があり、また美郷町の魅力が表現されていた。

そのなかで大賞となった「ふるさとの灯」は、テーマ性に富み、感動的な小説だった。

美郷町の中学三年生である「僕」の学校に、ムスリムの難民であるラジアが転校してくる。母国に迫害され木造船で逃れてきた彼女に、「僕」は禎嘉王の姿を重ねる。苛烈な運命を漂流してきたラジアだが、「僕」をはじめとする同級生や教師との交流を通し、やがて温かな美郷町になじんでいく。期間限定でやってきたラジアにとって、美郷町はふるさとにはならなかったが、時を経て大人になったラジアと「僕」たちは

再会する。さよならの師走祭が、形を変えて、その舞台となる。

短編でありながら大きな物語なのだが、作者は実にリアリティ豊かにこれを描いている。ぜひ多くの方に読んでもらいたい小説で、文句なしの大賞作だった。

佳作となった六作品も、それぞれの切り口で美郷町の魅力を伝え、また小説としての面白みがあった。「先行きの地図」は、大政奉還の後が舞台の歴史小説。延岡藩士が美郷を新たなふるさとにする物語で、重厚感があった。地図を描くという行為が、個人の未来や幸福に繋がっていくのが美しかった。「青いトンネル」は、冒頭のサーフィンのシーンが鮮やかで目を惹かれた。サーフィンもそうだが、鏡と物語の絡ませ方も上手い、爽やかな青春小説だった。「星読みの国」は、壮大で美しく、また儚い物語。ファンタジックであり、ロマンチックな佳品で、涙を誘う。暦を作る、というモチーフは抜群に良かった。「夕暮れノオト」は、エピソードがいちいち面白かった。リアリティもあってぐいぐい読ませ、またタイトルも良かった。「草煎りのユンジェ」は洞窟に住む老人への報告で物語が進む定点小説。構成は単純なのだが、恋愛あり、古代ロマンありで、破綻なく一気に読ませる。「Lovely Place」は中学生のままならない恋愛や友情を描いた、可愛らしく等身大な小説。物語が進むにつれ、主人公の性の問題が明らかになっていく構成が、素晴らしかったと思う。

大賞

「ふるさとの灯（あかり）」

宮地佳那子

「え、あん子が？」

僕は、同じ教室にいるラジアの境遇を同級生から聞いて驚いた。

ラジアは数年前、木造船でアジアの海を漂流していたところ、貨物船に救助され、来日した子だ。当時、大きなニュースになったのを覚えている。毛布をかぶった十数人が貨物船から降りてくる映像。憔悴した男性、顔を隠した女性、大きな瞳をカメラに向ける子どもの映像が蘇ってきた。

母国で迫害を受け、避難してきたラジアたちに、瞬く間に同情が寄せられた。多くの金銭支援も集まった。ただ、日本で、難民認定されるのは狭き門だ。ボランティアや弁護士らの助けで、全員が難民認定の申請をしたが、誰もまだ正式に認められていなかった。ほとんどの人は、不安定な身分ながら、日本で暮らし続けていた。

ラジアは未成年で、救助された当時、名前は明らかにされていなかった。ニュース映像でも目立っていなかった。彼らの現在を追うニュースやドキュメンタリーもあっただろうが、これまで僕はあまり気に留めていなかった。

ラジアについて、特に驚いたのは、他に救助された人たちと違って、家族と一緒でなく、たった一人で来日したことだ。故郷を一人で離れ、生きのびることができるかわからない小船に乗り込んだ若者が、ここ美郷町、そして同級生として同じ教室にいることが信じられなかった。

◆

僕とラジアは中学3年。ラジアに積極的に話すことは何だか照れ臭かった。でも、いつも気になっ

ていた。言葉は大丈夫だろうか、食べ物は大丈夫だろうか、何より孤独ではないだろうか。

ラジアは、来日して数カ月後から、ボランティアから日本語を教わっており、日常会話はすでにあまり不自由なかった。方言に苦労していたものの、同級生も意識してゆっくり話したり、標準語を使ったりしていた。

一方、教科書に記載されている熟語や専門用語、漢字は厄介だった。確かに、読み書きは、平仮名、片仮名だけでも数多く、似たような形が混在するうえ、途方もない数の漢字と、それら一つ一つに備わる複数の読み方も学ばなくてはならない。日本語はものすごい暗記量を必要とする言語だ。また、ラジアの給食は豚肉や、アルコールを使った調味料を使用しない特別メニューで、カレーが多いようだった。

そして、ラジアは、頭にきれいなスカーフを巻きつけていて、赤だったり、青だったり、2色だったり、数パターンがあった。そのスカーフをヒジャブということや、以前は黒ばかりしていて、外出時は顔まで覆っていたことは、後から本人に教えてもらった。

というのは、6月の席替えで、僕はラジアの隣になったのだ。ラジアを遠目から気にして、力になりたいと思っていたのが、くじ引きの神様に通じたようだ。実際、それから、ラジアとよく話をするようになった。

◆

ラジアは美郷町に来る前まで、群馬県の中規模の市にいたという。ムスリム同士の「困った時は

お互いさま」という助け合いの精神が強いコミュニティは、過酷な状況を経て日本にやってきたラジアを温かく迎え入れた。ラジアは郷里が近い、ある家族の家に身を寄せていた。イスラムの戒律を守り、平穏に暮らしていたが、だんだんと日本に興味を持ち、そのコミュニティ以外で生活したくなったという。また、群馬の冬の寒さも身に堪え、温暖な地にあこがれていたそうだ。

難民認定を受けていない人の、個人的な希望を汲むことは特例だったのではないだろうか。ラジアの望みを聞いた関係者の機動力が功を奏し、1年間、美郷町の夫婦二人の家庭でホームステイをすることになった。美郷町に来たのは、双方の行政関係者が懇意だったことが強く影響したらしい。

ラジアは、もちろん宮崎に縁はなかったが、宮崎空港に降り立った瞬間、高く揺れるヤシの木と、空の色を気に入ったという。

「空の色は、日本でも違う?」

「全然違う。宮崎は青くてきれい」

ラジアは笑った。僕はラジアの鋭い観察力と好奇心に驚いた。孤独で、不幸で、何かしてあげたいと思っていたが、単なるお節介なのかもしれない。

ただ、あまりに厳しい境遇を聞き、返事に詰まることが度々あった。ラジアの強さと観察力は、生き残るために、研ぎ澄まされた結果なのだろう。

◆

木造船に乗り込んだのは、ラジア自身の意思だったという。

なぜそんな危険を冒したのか。実は、乗り込む前に、ラジアは無人島に、数十人の同胞と、隔離されていたのだった。

無人島に押しやられたのも、やはり脱出と漂流が原因だった。ラジアは、迫害を逃れて身を寄せていた隣国の難民キャンプで、ビニールシートと竹でできたシェルターに親戚と住んでいた。親戚は冷たく、ラジアは家事の多くを押し付けられた。ラジアを早く結婚させ、食い扶持を減らそうともしていた。知らないだいぶ年上の人との結婚話が進んでいるのを察したラジアは、アジアのもっと豊かで自由な国を目指し、船で脱出する計画を隣人家族から聞いた。他の乗船者もいるという。ラジアは、それに密かに加わったのだ。

不運なことに、ラジアたちは2カ月以上、土を踏めなかった。目指していた国と思われる岸にようやく着いたところ、わずかな食料と水を与えられて、また海に追い返されたのだった。それが3回も繰り返され、結果的に海上で2カ月も留め置かれたという。

目的の国は、数十人の、飢えて、疲れた漂流者を受け入れる、最低限の寛大さを持つ国ではなかった。仕方なく出発地に近い陸に戻ってきた。そして、脱出を試みた報いとでも言うべきか、「危ない感染症にかかっているかもしれない」という理不尽な口実で、監獄のような雰囲気の、無機質な建造物しかない小さな島に押しやられたのだ。船の同乗者の他には、警察と軍だけ。行動も制限された。

おまけに、嵐がくると、丸ごと沈んでしまいそうな心許ない島だった。ラジアたちは毎日毎日、

「ここから早く出られますように」と祈った。
同年代の女性たちと話すと、ラジアは少し気持ちが落ち着いた。でも、この生活が、明日、明後日、いつまで続くかわからないことを考えると、気持ちは沈んでいった。
そしてある時、ラジアは、ここでも、あの隣人家族が脱出する計画を立てているのを知った。ラジアは、不可能だと思い、最初は聞き耳を立てていただけだったが、やがて話に加わるようになった。しかし、脱出の計画を話していることが警察か軍に知られたら、さらに監視が厳しくなりかねない。そうなれば、本当にこのまま、沈みそうな島で、何年も暮らさないといけないかもしれない。
「だから、脱出の話をする時は歌うという言葉を使った。『どこで歌う?』とか。たまに、本当に故郷の歌を歌った」
ラジアは厳しい表情で話していたが、この時、少しだけ、口元が緩んだ。
最大の問題は船の用意だった。家族は、ある警官に交渉していたのだった。お金のない家族は、配給されたわずかな食料を警官に横流ししていたのは知っている。その他に、どのようなやりとりがあったかはわからない。しかし、ある夜、10人程度がなんとか乗れそうな木造船が用意されていた。
船も小さく、家族ではないラジアを同乗させるか、その家族は最後まで悩んでいたようだったが、身寄りのない少女を不憫に思い、同乗を受け入れた。そして、小さな木造船は、暗闇を漕ぎ出したのだ。
「その時も、モンスーンがひどかった。船はいつ沈むかわからなかった。でも、いつ沈むかわからない島でずっと暮らすより、良いと思った」

あまりのラジアの強さに僕は言葉もなく、ただ何度も頷いた。
その後、日本行きの貨物船に助けられたのは幸運としか言いようがない。
なんとか内湾を出て、どこか知らない国の、知らない人の救助を待った。転覆を免れながら、昼と夜を何度か繰り返した。水と食料も着実に減った。家族の一人がラジアを乗せたことを後悔するような発言を始めた。数回、遠くに船を見かけたが、近づいてくる船はなく、失望が広がっていった。
ラジアは、難民キャンプで親戚から受けた冷淡な対応を思い出すようになった。一人、夜、小声で歌って気を落ち着けた。
そして1週間近くたった時、暗闇が広がりつつあるなか、貨物船が近づいてきた。そして、突然、まぶしいほどにラジアたちを照らし出した。
当初、貨物船は警戒して、何語か分からない言葉をスピーカーで叫んで、距離を保っていた。しかし、子どもや女性たちに気づいたのだろう。近づき、次々とラジアたちを救助したのだった。
救助されたラジアたちは衰弱し切っていたが、水とパンを受け取り、幸い全員、回復した。貨物船の乗組員たちは、救助した男性の一人に身振り手振りを交えて話しかけながら、頻繁に電話をかけていた。
「また、追い出されるのか。海に投げ出されるかもしれない」
ラジアは恐れたが、結局、そのまま貨物船は目的地に行くことになったようだ。それが日本だった。
ラジアたちを救助し、日本に向かった貨物船の関係者は、その間、日本政府を交えて多くの交渉

と説得を重ねたはずだ。
「助けてくれた船の人たちはとても優しかった」
同じムスリムの乗組員もいたという。ラジアは、その乗組員が、笑って親指を立てた日、久しぶりに安心して、深く寝入った。
そして、ラジアは日本に来た。不安はあったが、命は助かった。
ただラジアには、身分を証明するものがなかった。というか、彼女は生まれてからずっと自分自身を証明する物を持っていなかった。戸籍がなかった。国籍がなかった。当然、パスポートも作れなかったし、正規の学校にも入学できなかった。故郷では一度も学校に行ったことはなかった。
実はラジアは、母語の読み書きもできないのだった。日本語が、彼女が習う初めての読み書きだったのだ。
身分証はなくても、ラジアたちが迫害を受けて逃れて来たことは、間もなく、理解された。しかしもう一つ問題があった。ラジアは正確な生年月日がわからなかったのだ。だから何となく申告したのが、日本で正式に登録されたのだった。実際は僕より、もう少し年が上なのかも、下なのかもしれない。

◆

ラジアから日々、衝撃的な話を聞いて、僕は授業に集中できなかった。下校中も自転車を漕ぐリズムに合わせるように、何とか話を消化しようとしていた。ある日の帰り、自転車を降りて、久し

ぶりに神門神社に立ち寄った。なぜか寄りたくなったのだ。当たり前のようになじんできた神社だが、まつられている百済の王も、命を懸けて日本に来たはずだと思い出した。

神門神社には、７００年代、百済から逃れて来た禎嘉王がまつられている。

どんな気持ちで漂流したんだろう。嵐で誰も投げ出されなかっただろうか。船に乗った全員が無事だったのだろうか。すぐに上陸できたのだろうか。僕の中の問いの主語は、禎嘉王とラジアが絶えず入れ替わった。ただ当時、ラジアたちと違って、禎嘉王だけでなく、多くの百済の人びとが逃れてきたのだったら、地域への影響は大きかったはずだ。当初は、彼らは食料を分けてもらったり、住む場所をあてがってもらったり、生活を助けてもらう立場だったかもしれない。しかし、生活に適応し、さらに、先進的な知識と技術をもたらし、尊敬を集めたと伝えられている。

そして今、僕はその人びとの遺伝子のいくらかを受け継いでいるのだろう。必死で生きるために渡ってきた先祖、そしてその人びとを受け入れたこの土地の先祖のことを考えると、国は関係なく、すべての先人たちが、自分につながっていると思えた。ラジアと僕の先祖もどこかでつながっているはずだ。

自転車を漕ぎながら、頭の中は幾世紀も前の先祖たちにさかのぼり、その後、ラジアの理不尽な状況への怒りと悲しみに戻っていった。

◆

学校生活では、僕の心配はやはり取り越し苦労だったようだ。ラジアは特に女子の友人は多くで

きた。

担任の小畑先生は、美郷町の隣町の出身だ。外国人と接すること自体があまりなかった先生は戸惑いもあったが、放課後、日本語の読み書きを教える間、ラジアと親しくなっていった。ラジアは、日本が自分たちを迫害した人たちと同じ仏教の国だと聞いて警戒していたが優しいこと、日常生活に宗教があまり関わっていないこと、政府の批判を自由に言えることに驚いたこと、宮崎のマンゴーが好きだが、高すぎることなど、あらゆることを話し、打ち解けていった。

小畑先生は、僕たちに、宗教や日本語文法の課題を出すようになった。日本語文法なんて普段考えないから、とても難しい。なぜ、自己紹介で「私は美郷町に住んでいます」と言うが、「私が美郷町に住んでいます」と言うと、違和感があるかという難問にも取り組んだ。多くの議論の後、述語の方に伝えたいことがある時は「は」で、主格に伝えたいことがある時は「が」ということで落ち着いた。

イスラム教については、僕たちの知識は、テロのイメージや、禁酒、断食、豚を食べない、女性が抑圧されているなど、断片的な情報の寄せ集め程度だった。でも、宗派、思想、生活様式も多種多様であることがわかった。ラジアの存在もあり、遠く感じていたイスラム教が、身近に思えてきた。

◆

秋も深まり、ラジアも同級生とさらに打ち解けるにつれ、直接、僕と話すことは少なくなった。黒い大きな瞳を少し細くして笑いかけられた男子の複数は、ラジアに恋心を灯した。小畑先生の教

育効果もあったのだろう。差別的な言動は皆無だった。
ただ、ラジアは美郷町には期間限定の滞在だ。同級生がつぶやいた。
「まちっとで、ラジアは帰るっちゃね」
僕は複雑な気持ちだった。もちろん残念な気持ちが大きかった。でも、もう一つ気になった。ラジアにとって、帰る場所とはどこだろうか。直接的には群馬だろう。でも本当は母国の故郷だ。ただ、すっかり変わってしまった故郷。彼女はそれでも帰りたいかもしれない。でも、故郷はいま、帰りたくても帰れない場所だ。百済から逃れて来た人々も、帰れない故郷を何度、思い浮かべたのだろうか。

◆

卒業後の進路も決まりつつあった。今日から師走祭りだ。つんと引き締まった空気が、祭りに向けてみんなを鼓舞しているかのようだった。寒さは厳しいが、全身の感覚が研ぎ澄まされ、毎年、大好きな季節だ。
その日、教室でラジアと少し話した時、なぜか元気がなさそうだった。僕は師走祭りについてわずかな知識を披露した。年に1度の禎嘉王と息子の福智王の再会、息子が迷わないように、迎え火が神門神社への道しるべとなっていることなど、すでに知っているかもしれないことも、かまわず説明した。
ラジアは「面白い」と言ったものの、とりわけ興味を示している感じではなかった。好奇心が強

いラジアにしては珍しかった。
夕刻、闇のなか、人の環が大きくなる。櫓に炎がつき、人々の表情が浮き上がる。帰省者や観光客と思われる人も多く見られた。
炎に照らされて、ラジアを見つけた僕は、その表情に近寄りがたい雰囲気を感じて、どきりとした。身体を縮こませているうえ、目を大きく見開き、口を堅く閉じていた。取材にきていた地元メディアがラジアに感想を聞こうとしていたが、ラジアはそれには答えず、去って行った。

◆

その後、ラジアは、群馬の高校に進学することになった。学校生活も、ホームステイ先の夫婦の畑仕事の手伝いも楽しんでいたようだったし、県内の高校への進学も考えていたようだったから、僕はがっかりした。もっとも、がっかりしたのは僕だけではなかったはずだが。
ラジアが美郷町を離れる前日は、ちょうど卒業式でもあった。ラジアは教室で挨拶をした。
「皆さん、本当にありがとうございました。本当に楽しい1年でした」
4月の当初はうつむき加減だったラジアは、今は、堂々と正面を向いていた。小畑先生はさっそく涙がでそうになっていた。
ただ、ラジアはこう続けた。
「美郷町は私の居場所ではありませんでした」
ショックだったが、その通りなのだ。でもやはり、断言されるとつらかった。

そして、ラジアは静かに、でも決意を固めたように、話し始めた。
それはラジアが故郷を離れた時の話だった。ラジアの村は、ある夏の日、焼き払われた。その襲撃の日、水汲みのため、家から離れていたラジアは、襲撃者に見つからず、身を隠すことができた。ただ、銃撃の音、叫び声、煙と何もかもが焼ける匂いからは、離れていても逃げることができなかった。
暴挙と煙が収まった数日後、家族の無事を願って村に戻ってきたラジアは、ほとんど灰になってしまった我が家と、そこで重なるように倒れていた両親ときょうだいを見つけた。
生き残った人づてに聞くと、ラジアの家族は、軍人のような人に家の中に追しこまれた後、家ごと火を付けられたらしかった。
ラジアが話している間、教室は静まり返っていた。僕は、迫害当時の状況は聞いていなかったし、自分から聞くこともしなかった。だけど、ここまで辛い体験をしていたとは思わなかった。
「その時から火が怖くなりました」
師走祭りの迎え火を、ラジアは恐れたのだ。迫害の記憶が、目から、鼻から、耳から蘇り、襲ってくることを。実際、ラジアは、あの師走祭りの日、すぐに家に戻ったのだった。
そして、その夜、泣き続けた。
「多分、美郷町にいると、これから、あの時の光景を、いつも思い出してしまうと思います」
師走祭りを、地域の大切な伝統で、父と息子の再会、日本と朝鮮半島の絆といった、肯定的な文脈でしかとらえてこなかった僕は衝撃を受け、思わずうつむいた。ラジアは、家族と、故郷と、炎

と、そして死を、切り離して考えることは、生涯できないかもしれない。
「でも、美郷町の皆さんが大好きです。美郷町の皆さん『は』ではなく『が』です」
彼女のその一言で、少し、教室の空気が緩んだようだった。小畑先生も涙目にうなずいた。

◆

僕は、高校を経て、県内の大学に進学した。ラジアとは、たまに連絡をとっていた。大きなニュースは、高校在学中、ラジアがとうとう難民認定されたのだ。他に連絡をとっていた同級生の話も合わせると、その後、奨学金を得て群馬県内の専門学校に通って、調理師免許を得たそうだ。ハラールに対応したレストランの開業を思い描いているという。
ラジアが美郷町を離れた後も、町内には応援者が多かった。そんなラジアが、美郷町を再訪することになった。約5年ぶりだ。
在京テレビ局のドキュメンタリー企画の一環らしい。その設定は、町の風物詩、師走祭りに合わせた訪問だった。
取材の一環とはいえ、再訪は、多くの人にとってもちろん大歓迎だ。ただ師走祭りというタイミングが不可解だった。あの炎。僕たちにとっては「ようこそ」の炎だが、ラジアにとっては、故郷からの追放と、家族との別れの記憶が直結する炎だ。記者は知っているのだろうか。ラジアは、記者に自分の思いを話さなかったのだろうか。
いずれにせよ、ラジアは元気に帰ってきて、以前のホームステイ先に滞在することになった。5

年前の同級生も多く集まった。誰でも参加できる、にぎやかな夕食が始まった。ただ、アルコールは無しだ。

ラジアは台所に立ち、美郷町の食材を使いながら、故郷の味を取り入れた料理を振舞ってくれた。カレーのイメージが先行していたが、豊かな色彩の大皿メニューと、独特のスパイスの香りで、スプーンの動きも、会話も止まらなかった。

その後、数日間、僕は、ラジアに何となく後ろめたい気持ちを感じつつ、師走祭りの準備を手伝っていた。ラジアも神社やその周辺に顔を出し、出店の準備を見て、たまに手伝っていた。僕は「大丈夫？」と聞いた。ラジアは何が大丈夫か聞かれたのかを察したのか、「うん、大丈夫」と笑顔で返してくれた。

◆

師走祭りの初日、ラジアは緊張した面持ちで、神門神社にやってきた。もちろん記者も一緒だった。記者のほうが楽しんで、興奮しているようだった。

夕刻、いつもの師走祭りと違う雰囲気が漂ってきた。役員の男性たちがひっきりなしに小声で、伝言ゲームのように小走りで近付いて話している。僕はその様子を見守った。

その夜、ラジア、そして人々の目に映ったのは、予想外の師走祭りだった。あの大きな炎がないのだ。正確にいうと、櫓はあるものの、火が灯されないのだ。その代わり、柔らかな光を放つかがり火を、多くの人が神社内外で灯していた。

祭りの目玉ともいえる迎え火がない。異例の光景に、記者も最初は状況がわからないようだった。だが、僕たちはほっとした。

実は、僕たち同級生は、関係者方々に頼み込んで、ラジアの事情を説明し、「今年だけは」と、櫓に火を灯さないようお願いしたのだった。直前まで交渉は続いていた。準備も万端だった。関係者からは当然、反対意見も多くでたが、最終的に「ラジアのためなら」と合意が得られたのだ。そして、代わりに、小さなかがり火や笑顔で、住民たちは福智王とラジアを迎え入れた。僕もかがり火を手に、びっくりするラジアに「お帰り」と笑いかけた。

事情を知ったラジアはその場で泣いた。中学生の時の、夜通し流した涙とは、違う涙だったはずだ。

◆

僕たちのお節介は成功したが、実はラジアは、ある思いがあって、あえてメディアの取材を受諾し、この時期に、美郷町に帰ってきたのだった。

ラジアは美郷町でレストランを開くことを考えていたのだ。それほど、美郷町での1年間はラジアにとって心地が良く、温かかった。だからこそ、5年前は耐えられなかった師走祭りを、もう1度経験して、自分の気持ちに揺るぎがないか確かめたかったのだという。

僕たちの試みでラジアの挑戦は中止となったが、美郷町に住み、レストランを開く決意は、逆に強く固まったという。

ラジアは数日後、群馬に戻る前に、僕たちに言った。「もう自分の心を試さなくても大丈夫。す

ぐに戻ります」

◆

言葉通り、4月にラジアは戻ってきた。初めて宮崎空港に降り立った時と同じ時期だ。ヤシの木と、青空も同じだ。

すでに、レストランの名は決まっていた。「ふるさとの灯（あかり）」だ。ホームステイ先の畑の野菜をはじめ、美郷町の豊かな農産物を使って、旬のメニューを提供する。ラジアの故郷の味も盛り込む。ハラール認証を受け、ムスリムも安心して食べられるようにする。そして一番に、地域の人々がくつろげ、交流できる、明るく温かな場所を目指すという。

もしかしたら、美郷町はラジアが長く過ごす場所になるかもしれない。ラジアが故郷に帰ることができる日がいつになるか、わからない。故郷に戻れる状況になったとしても、ラジアは日本で生きることを選ぶかもしれない。少なくとも、故郷に戻るか、日本で暮らすか、選択できる日が、1日でも早く来てほしい。どちらの選択をするにしても、美郷町が、いつまでも、ラジアにとって安心できる場所であってほしい。

来年はさすがに、いつもの師走祭りに戻るはずだ。壮観な迎え火が夜空を照らすだろう。その時ラジアは、小さな灯を自分の内部に灯し、愛し、愛された故郷の家族との再会を果たせますように。

優秀賞（日本放送作家協会賞）講評

日本放送作家協会理事長
さらだたまこ

みさと文学賞における「日本放送作家協会賞」は、最終選考に残った作品の中から、さまざまなメディア展開の可能性を後押しする賞として位置づけられています。放送作家協会は会員が七百名をゆうに超える組織ですので、受賞作を原作に映像化・舞台化、あるいは漫画原作として脚色したいと名乗り出る脚本家もいれば、誰もが考えつかなかったあっと驚くコンテンツとして企画を練り上げる放送作家もいるであろうとアイデアも飛び交い、我らプロ作家の食指を動かす作品に候補作が絞られました。

放送作家協会は、半世紀近くラジオドラマやテレビドラマの脚本コンクールを主催しています。決して下読みで篩（ふるい）にかけず、一次審査の段階から第一線で活躍する脚本家が審査し、丹念に受賞作に相応しい作品を取りこぼしなく選ぶことを実践してきましたが、今回のみさと文学賞でも二十数名の会員作家が、ペアを組んで審査に臨み、最終審査に残したい作品を絞り込んできました。

結果、日本放送作家協会賞候補作は、冒頭のサーフィンの描写が魅力であり、鏡店

を巡る親子関係にドラマが描かれた「青いトンネル」（佳作）や、師走祭の炎の意味づけや主人公の心の成長を描いた「子らは炎に導かれ」（ＭＲＴ宮崎放送賞）、切り口の新しさ、テーマ性の高さ、メッセージ性の強さで「ふるさとの灯」（大賞）、そして「daisy」の４作に絞られました。

最終的に「daisy」が日本放送作家協会賞となったのは、端的に言えば、その言葉は一切表れませんが、〝身土不二〟という仏教思想が、描かれた人物の行動の根っこに存在するという深みが脚本家魂を揺さぶる点にあったからで、このことは一次審査の講評から、最終審査までずっとこの作品を推す根拠となっていました。美郷町の場が持つ神秘性と相まってどんなメディア展開が実現するか、アフターコロナ時代に共感を呼ぶドラマの主題としても、私たち脚本家の腕の見せ処でもあります。

候補作からは漏れましたが、美郷町の観光資源を啓発するコンテンツとして推したい作品も、審査員からいくつも挙げられ、改めて美郷町に眠る物語資源の豊かさを再認識することができました。第４回も、度肝を抜く面白い作品と出会えることを期待しています。

優秀賞（日本放送作家協会賞）

「daisy」　白石慧

僕の住むアパートから最寄りの駅までは徒歩十三分。喫茶店「デイジー」から駅までは徒歩五分だから、アパートからデイジーまでは徒歩八分ということになる。僕は家を出て八分歩き、花屋の中のエレベーターで四階に移動し、喫茶店デイジーに入った。毎週水曜日と木曜日は外回りの日で会社には出社せず事務作業などを喫茶店でこなす。新卒社員だった二年前は先輩に連れられ営業先の近くのファミレスに行ったりと、他にも色んなカフェや喫茶店を行き来したが、新卒のＯＪＴ期間が終わって一人でこなすようになってからは結局家で済ますか、家から駅へ向かう道中にあるこの喫茶店デイジーで作業することがほとんどになった。店に入るとホールの三杉さんがいつもの席に案内してくれた。店に入って右にある四人組がけの机が四つ並んだ窓に面している奥側。僕がここで事務作業をするのは二年前からずっとのことだ。

「鮫嶋くんはアイスコーヒーとシーザーサラダでいい？」

三杉さんはだらだらこちらに向かいながら、既に伝票に注文を書き付けている。お願いしますと言うと「はーい」と厨房に注文を伝えに戻っていった。僕はノートパソコンを開いてメールチェックを始める。目を通し終わる頃にコーヒーが運び込まれ、コーヒーを飲みながら内務営業担当に伝える今日の段取りとスケジュールを考える。内務営業担当とは電話でのやりとりになるためメモにまとめておくのだが、それが終わった頃にシーザーサラダが運ばれる。意識したことは無いがこれもいつものことだった。スマホを置いてシーザーサラダを食べながら頭の中で考えを巡らす。それは仕事のことであったり、将来のことであったり、しばらく会っていない実家の犬の事だったりす

るが、大抵はいつも邪魔が入る。しかし今日は邪魔を入れてくる当人がいないようなので穏やかな時間が続く。これはいつものことではなかった。だがたまには良いと思う。シーザーサラダを食べ終え、残りのコーヒーを飲みながら煙草を吸う。窓からは隣の建物と、建物同士の間から垣間見える歩道しか見えないが、その狭い視界の歩道にも所狭しと人が行きかう。うんざりするような光景だが、同時に僕もまた社会の一員なのだと身が引き締まる。溶け込み、やり過ごし、社会貢献のため働く。それが僕ら一般人がこなす義務であると僕は考えていた。故郷から遠く離れたここで僕は今日も仕事をするのだ。厨房で作業するマスターに「ごちそうさまでした」と声をかけ、レジ横の小さな鏡でリップを塗り直していた三杉さんに会計を支払った。三杉さんにも「ごちそうさまでした」と声をかけ店を出ようとした時

「ねぇ、鮫嶋くん。そういえばミナちゃんから何か聞いたりしてない？」

三杉さんは塗り終えたリップをしまい少しだけ真剣な表情になっていた。

「いえ、心当たりはないですけど、奈須さんがどうかしたんですか？」

三杉さんの言うミナちゃん、奈須美波はこの店で働いているウェイトレスのことで、僕がこの店に通い始めた二年前には既にここで働いていた。出会った当時、僕は新卒社員で奈須さんは専門学生だった。

「ミナちゃん、先週の木曜日からお店に出勤してないのよ」

他の客にも聞いているのだろう。言い慣れたような口ぶり。何より一週間近く前のことだ。少し

諦めたような表情で三杉さんは続けた。
「ミナちゃん、いきなりシフトを空けるような子じゃなかったから。何かあったんじゃないかって心配で」
「連絡はしてみたんですか？」
その日の一件目のクライアントとの約束の時間が差し迫っていたので、少しぶっきらぼうになってしまった。
「それが…携帯電話を店に置きっぱなしなのよあの子」

新入社員の頃と比べれば随分と慣れてきた仕事を淡々とこなし、電車を乗り継いでは次の営業先へと向かう。電車に乗っている間も気は休まることなく、次の営業先の情報を頭に入れながらプレゼンのおおまかな内容を練る。ひとえに営業と言っても建築資材というものはあまりに幅が広く、クライアント一つ一つによって扱う商品やその用途が全く異なる。なので各クライアント毎の提案書を事務作業の時間を取ってやるには一日が二十四時間では全く足りず、こうして移動時間を駆使して営業内容を練ることが大抵であった。運転の時間など取っていられないため、我社では車で営業を行う営業マンは少数で大多数は電車とタクシーを利用する。最初は要領よくこなせずに参ったが、人間やり続ければ慣れるもので残業もそれなりで抑えれるまでにはなっていた。考え事をする暇もなくすぎていく時間だが、今日は朝の三杉さんの話が気にかかっていた。話を聞いた時、僕は

正直さしたる心配もしていなかった。なんというか、奈須さんは少し不思議な人だった。シフトを空けることこそ無かったが、奈須さんは店が忙しい時間でも休憩を取って朝ごはんを食べるような人だったし、何事においても世の中の常識に囚われないような感じがした。そんな印象を持っていたから、奈須さんはしばらくしたら戻ってくるであろうと思っていた。しかし今朝の三杉さんの話の中に不可解なことがあった。それは奈須さんのスマホが店にあったことだ。木曜日の出勤でそのまま忘れていったのなら自然かもしれない。そもそも取りに来ないということが不自然であるが、何より僕は次の日の金曜日に奈須さんと連絡を取っていたのだ。なんなら僕は彼女が最後に出勤した木曜日、その次の日の金曜日に奈須さんに会っていた。

「八時に代官山駅でどうでしょうか」

「了解です」

金曜日は毎週のことだが、土日が正念場である住宅販売の班が忙しく社内を駆け回っていた。一方僕ら建築資材の班の仕事は土日が休みということもあり、各所の営業の見通し利益をまとめながら各々が休みに入っていった。僕はというと明日から名古屋の営業所での研修があり、休みの内に出来ない来週の営業の算段をある程度決めておかなければならなかった。しかし、約束もあったのでキリのいいところで切り上げて七時過ぎには会社を出た。僕はその足で代官山駅へと繰り出し、奈須さんとの待ち合わせ場所に向かった。営業の癖で待ち合わせ時間には必ず十分前には着いてし

まうが、奈須さんは必ず僕より先にいる。僕が来たことに気づくと奈須さんは振り返り僕に向けて手を振った。

「相変わらず早いね」

彼女は稽古終わりなのか右手には大きなバッグを持っていた。白いニットにベージュの薄手のコートを羽織っていて170センチ程の高い身長と相まってとても綺麗だと思った。

「鮫嶋さんもいつも早いですよ」

「じゃあお互い様か」

奈須さんはそうですそうですと頷いた。

「お腹空いたし早く行きましょ」

彼女は大きいバッグを背負い直して歩き出す。「それ持つよ」と言っても「だめです！」の一点張りで渡さない。これもいつものことだった。彼女に追いついて横に並んで歩く。向かい合って見る奈須さんも綺麗だが、横に並んで見る彼女の凹凸がはっきりした顔もこれまた乙なものだと僕は密かに思っている。

前菜で出てきたゴイクンを二人でつまみながら酒を飲む。ゴイクンというのはベトナム風の生春巻きのことで、僕が飲むマナオサワーの〝マナオ〟とはタイのライムの事だ。僕らもそれをさっき知った。

「奈須さん、何か良いことでもあったでしょ？」
「なんで分かるのー！」
彼女は果実酒を片手に大袈裟に驚いた。こんなに上機嫌に酔っている奈須さんも中々無いので誰にでもすぐに分かりそうだ。上着を脱いだ奈須さんが着ている緩い白ニットより白かった顔がすっかり赤みがかっている。
「実はね、やっと大きい役を貰えたんです。凄いでしょ！」
エッヘンと言わんばかりの表情で彼女は笑う。文字にしたらビックリマークが五個でも足りないかもしれないくらいの勢いだ。
「そりゃ凄いね。めでたいなぁ」
僕のナシゴレンと彼女のガパオライスが運ばれてくる。〝ガパオ〟はホーリーバジルのことで、大抵の店にはこれが入っていなかったが、彼女に運ばれてきたガパオライスにはしっかりとホーリーバジルが入っていた。後で一口貰おうなどと考える。
「ねぇー！　役を貰うのってすごい事だよ。〝めでたいなぁ〟じゃないですよ鮫嶋さん！」
彼女は僕にそう言いつつも運ばれてきた料理を見ながらワァ！　と声に出して目を輝かせていた。表情がとても忙しい人だなぁとつい笑ってしまう。「美味しいですねぇ」と奈須さんはすっかりご飯に夢中だった。こんなに食事を美味しそうに食べる人も中々いないと思う。
「鮫嶋さんのもちょっと下さいよ！」

聞き終わる前にもう手が伸びてきていた。
「俺ももーらい」
彼女が頼むご飯の方がいつも美味しく感じた。彼女の食の嗅覚が鋭いんだなぁと思っていたが、それはきっと彼女が美味しそうに食べるからなんだろうな。僕はこの後彼女がいなくなることなどつゆ知らず、そんなことを考えていた。

その日はそれからたわいもない話をしながら駅まで歩いて解散した。その日を境に、僕は名古屋に出張に行き、彼女は姿を消した。三杉さんの話だと、僕と会った後どこかのタイミングで店に戻ってスマホを置いていったということになる。あの時彼女は何を思い、何を考えていたのだろう。僕がもっと彼女の頑張りを褒めるべきだったのだろうか。僕は奈須さんがよく分からなかったが、きっと戻ってくるだろうと、さした心配もなくそう思っていた。そんなことよりも僕には仕事がまだまだ山積みで、奈須さんのことを考えている暇など無かった。

翌日も次の週もその次の週も彼女がデイジーに出勤してくることは無かった。レジ横に置かれた奈須さんのスマホにはうっすらホコリが溜まり始め、那須さんがいない店が当たり前のように回り始めていた。今週から奈須さんの穴を埋めるためにホールに入った前田くんは真面目で好青年だったが、肩ががっしりしていて髪の色も明るくて、何となくあまり好きにはなれない。前田くん以外

のみんなが奈須さんのことを心配していたが、その気持ちも徐々に薄れていくのを感じていた。先週は奈須さんが所属する劇団の女性が奈須さんの行方を聞きにデイジーへ来ていたが、彼女自身も奈須さんからは何も聞いておらず最後の手がかりとしてデイジーを訪れたようだったので、いよいよ東京に奈須さんの行方を知る人はおそらくもういないのだろう。実家に帰ったのではないかという意見もあったが、デイジーの従業員や劇団の人も含め彼女がどこで生まれたのか誰も知らなかった。冬は徐々に深まりデイジーにはヒーターが入り始め、制服も冬仕様へと変わった。僕の仕事も年末へ向けて忙しくなり始めていたが、正直僕は全く身が入らなかった。移りゆく季節の中、僕はまだアイスコーヒーを頼んでいるし、冬物のスーツはクリーニングに出したままだった。デイジーに来ても、華金でも、僕は一人でご飯を食べているし、なにも変わらず毎日社会貢献に努めている。なにもかも何か足らなかった。孤独だと思っていた日常が本当の孤独になってしまった。窓の外を眺めても忙しなく歩く人ばかりで、誰も僕のことなど見ていない。僕が来たのを見計らって休憩をとるふざけた従業員もいなかった。孤独だと思う。東京に来てから、僕は自分のことをずっと孤独だと思っていたけれど、今が一番、本当の孤独がやってきたと思う。

デイジーでの朝食を後にして、気づいたら僕は家にいた。十時から建築コンサルタントとの会議があった。昼前には付き合いがある物流倉庫に顔を出さなければならない。家に帰ってきて、僕は黙々とキャリーバッグに冬服を詰め込んだ。九州といえど今の季節は冷えるだろうと睨んでの事だ。

一応半袖も入れておこう。午後からは三十分刻みでクライアントの要望を聞きに行く予定があった。ただでさえ忙しい季節だ。そのくらいのスパンでこなさないと仕事にならない。歯ブラシは向こうにあるだろうか。お気に入りのハンドタオルは一枚持っていくことにした。草加健康センターのラッコが描かれている。落ち着いたら奈須さんと行こう。もう建築コンサルタントとの会議が始まる時間だ。僕は残った冬服の中からパーカーに着替えて、パンパンに膨らんだキャリーケースのチャックを閉める。ワークバックから薬とか充電コードを入れたポーチを取りだしリュックに入れて、帽子を被る。思えばこの帽子は奈須さんが誕生日にくれたものだった。仕事の約束の時間が過ぎ、スマホが何度も鳴っている。僕は、涙が止まらなかった。仕事なんかどうでもよかった。なんで奈須さんは、なんでいなくなったんだ。そして僕はこんなに時間が経つまで行動に移さなかったのだろうと後悔が止まらなかった。行動に移さないのならば、なぜ奈須さんの故郷を喫茶店の同僚や探しに来た劇団の人に伝えなかったのだろう。僕は奈須さんがどこの出身かを知っていた。僕だけが彼女の故郷を知っていたのだ。東京にある手がかりはこれだけだった。本当は、頭の隅でずっと考え続けていた。失踪してからではない。この二年間、奈須さんと出会ってから僕はずっと奈須さんのことばかり考えていた。孤独がなんだ仕事がなんだ、そんなのは、そんなのは建前だ。奈須さんが好きで、奈須さんと過ごす東京が心地良かった。僕は奈須美波がどうしようもなく大好きだった。行かなければならない。ずっと思っていた。奈須さんに会いたい。それは二年の間、思い続けている。行こう。僕は家を出て、走って駅へ向かい、電車に乗り込む。船ではないけれど、これは大い

なる船出だった。電車の中で大熱を出したと各クライアントと会社にメールを出し、仕事の相棒である内務の営業担当に大長文の反省文を提出した。僕が休んだ倍の日数を僕が多くカバーするという条件で彼が請け負える仕事を請け負ってくれた。ありがとう。本当にありがとう。孤独だと思っていた僕も、人の支えがあってこうして冒険へと繰り出せる。ありがとう、奈須さんは必ず僕が見つけるぞ。遠くなる街を横目に僕は胸に誓ったのであった。

羽田空港まで一時間かかったというのに、羽田空港から宮崎空港までは一時間半で着いてしまった。奈須さんを探しに行こうと決意してから3時間で宮崎に着いてしまうとは…船出とは随分大袈裟に表現してしまったかもしれない。飛行機とは素晴らしい文明の利器であるとあらためて感じた。ここからも車という素晴らしい利器を使い、奈須さんの故郷である美郷町へと向かう。宮崎空港を出てすぐ、羽田へ向かう途中に手配していたレンタカーに乗り込み美郷町へと車を走らす。窓を開けると宮崎といえど風が冷たかった。パーカーを着ておいて良かった。思えば九州へと来るのはこれが初めてであまり勝手が分からないところが不安ではあるが、僕にも一応九州の血が流れているのでどうにかなるだろう。父方の祖父母が種子島の出身だった。若い時に島を出てそれからはずっと静岡に住んでいるので、僕に然り、父も種子島には行ったこともない。いつかにそんな話を奈須さんにしたのがきっかけで、僕は彼女の故郷を知ることができた。

「へー、種子島かぁ！」
奈須さんは眉をクイッと上げて、コーヒーに砂糖を入れる。
「意外と私たち、ルーツが近いんですね」
僕の朝食に合わせて休憩を取る奈須さんは今日も山盛りの生クリームを盛ったパンケーキを食べていた。
「ということは、奈須さんの地元は種子島から近いってこと？」
「まぁ、そういうことですね」
「へぇ！　種子島から近いってことは鹿児島とかか」
「ううん、宮崎。宮崎の美郷町ってところ」
宮崎かぁと思う。奈須さんはあまり方言こそ出ないが時々語尾が上がることがあった。宮崎の方言なのか。あれは凄く可愛い。
「もしかしたら、ご先祖様たちが会ってるかもしれないですよ」
「それはどうだろうね」
僕は手元のカップをくいっとやってコーヒーを飲み終えた。その日は仕事が休みだったので少し一息つく。
「私ね、自分のルーツについてよく考えるんです」
その日は珍しく真面目な顔をして彼女は言った。

「その人が産まれた時点で、あるべき場所っていうのは往々にある程度決まっているように思うんですよ」
「ほう」
少し考えて、僕は続ける
「人は生まれ育った故郷に住むのが正しいということ？」
奈須さんは「んー」と少し悩んでから言う。
「そうじゃない人もいるけれど、その土地で脈々と生活をし続けてきた人達はその環境に適応するような遺伝子になっていくように思うし、その環境に慣れるように育つのだから一番暮らすのに適するのは故郷になるんじゃないかなって思うんです」
「なるほどな。じゃあ奈須さん自身はそういう環境だったと」
「そう。だから私は私のままじゃ故郷を離れる大義名分が無いんです。何より私は故郷を愛しているし。でも、他の世界を知りたいと思った。だから何かを演じ続けて、辛うじて何とかここにいると思うんです」
そんな話を前にも彼女から聞いたことがあった。彼女は〝演じる〟という行為を一種のトランスのように捉えている節がある。彼女はそこに身を置くことでここにいるべきではない自分を正当化しているようだった。
「奈須さんはそれを正しくないことだと考えているの？」

「うーん、どうだろう。上京してからはあんまり考えないようにしてます」
彼女は最後にニコッと笑って席を立った。僕の空いた皿と奈須さんの皿を持ってバイトに戻っていく。僕は彼女と同じ環境に身を置いているわけではないから彼女の気持ちが全て分かるわけもなかった。だけれど、適応する場所とやりたいことに挑戦できる場所の相違が起きたとして、やりたいことを優先するということがなんら間違っているとは思わない。思わないけれど僕の言葉で彼女の考えを変えることは許されないように感じた。彼女自身が悩み、選ぶ選択肢が正しいと僕は思った。

東九州自動車道を降りて日向市からは国道をまっすぐに走っていく。なるべく早くに進みたかったので寄るだけ寄った川南パーキングエリアで買った合衆国バーガーをやっと食べる。久しぶりの運転ということもあって高速道路は緊張で食べることができなかったが、国道で信号もちらほらあるので食べ進める。バンズがパンではなくライスで作られており、焼きおにぎりみたいでこれが意外と美味しい。窓の外に目をやるとすぐ横に耳川が流れており、僕は上流へと遡っていく。もうすぐ奈須さんに会えるはずだった。根拠は無いけれど僕はそう確信していたし、高揚は増すばかりだった。彼女に会えたらなんて言おうか。今まで、僕が彼女に言えることなんか何も無いように思っていた。だけれど、僕は伝えに来たように思う。何かを、彼女に伝えなきゃならない。美郷町はもうすぐそこだった。

締めて五時間超。僕はついに美郷町へとやってきた。のどかで自然豊かな美郷町。だが思ったよりもしっかり町という感じだった。美郷町といっても山あいや川に沿って集落がいくつかあるみたいだ。僕が来たのは西郷という地域。山あいにしては平坦な土地で穏やかだ。高台に登ると街を一望出来る。こうして訪れて、実際に街を見てみると少し奈須さんの言っていたことが理解出来る。部外者の僕ですらこの景色に「帰ってきたなぁ」という親近感すら覚える。しっかりと人の手が入っている畑に山に川、人の営みがある田舎風景というものは、意外と今の時代においては少ないように思う。ここには人が繋いできた命がある。若輩ながらも資材を通じて林業を見てきた僕には確かにそう感じた。

その後も西郷地区を歩き回ったが奈須さんの手がかりは見つからなかった。その日は耳川を少し下って西郷の温泉に浸かり、西郷地区の民宿に泊まることにした。九州といえど服を脱げばもうかなり寒く、温泉に浸かるとどっと疲れが押し寄せるのを感じた。体だけは休ませ頭は働かせる。勢いでここまで来てしまったけれど、手がかりは何も無いし、奈須さんのここにいるのかも分からない。奈須さんは何か言っていなかっただろうか。ずどーんと疲れが押し寄せている体は動かず、頭を働かせたままぽわぽわと意識の炎が消えていくのを感じていた。

「ねぇ、ねぇってば」

聞き慣れた声だった。随分と落ち着く声なのでこのまま眠りについてしまいたい。
「ねぇ！　今ちょっと起けたよね？　鮫嶋さん！　はよ起きてってば！」
ぱっと目が覚めるとそこは喫茶店デイジー。髭を生やしているのに何故か髭メガネをかけた浮かれているマスターがトランプマジックをしていた。
「マスターすごいんだよ。三杉さんが何度も見破ろうとしているんだけど、何回見ても分からないんですよ！」
声の主は奈須さんだった。何だ奈須さんか…と一息ついて机のビールを飲む。そうだ、喫茶店デイジーの三十周年のイベントに来ていたんだ。隣を見ると頬を赤らめて表情が緩い奈須さん。普段は顔が白くて端正なだけにお酒を飲むと別人みたいに顔が変わってしまう。ふわふわした頭で「いいぞ！」と静かに思う。
「起けたと思ったらまたボーッとしてどうしたんですか？」
語尾のアクセントがちょいちょいおかしくなっているがおそらく本人は気づいていないようだった。
「何でもないよ、ちょっと眠いだけ」
中心ではマスターのマジックを見破ろうと常連と三杉さんが目を見開いてマスターの手元を見つめていたが、そのタネはマスターの後ろにあった。僕と奈須さんがいる位置からは丸見えで二人でつい笑ってしまうと、それに気づいたマスターがこちらにウインクをしてきた。
「墓場まで持っていきましょう」

内緒話みたいにくすくす笑いながら奈須さんは言う。
「ああ、そうだね。ありゃ何年やっても見破られないぞ」
僕らは三杉さん達に悟られないようにまた前を向き直す。奈須さんは暖炉の炎をじっと見つめていた。
「火は落ち着くよね」
残り少ないビールをちびちびやりながら僕は言う。火を見ていると更にウトウトしてきてしまう。
「私の地元は、迎え火っていって冬になると町中火だらけになるんです」
奈須さんは思い出し笑いをするよう懐かしそうに言った。
「町中って…それは大丈夫な燃え方なの？」
「大丈夫ですよ！　子供の頃は怖かったけれど、子供がお父さんに会いに行くっていう素敵なお祭りなんですよ」
「へー、それは素敵な…」
みんながいて奈須さんがいて、そんな楽しい空間で暖かくてウトウトしてしまった。そうだ、この先が覚えていないなぁ。あの後はどうしたんだろう。しっかりと帰れたんだっけか。
目を開けるとそこは温泉の脱衣場だった。裸のままベンチに横たわり体に何枚かバスタオルが掛けられている。

「あんた大丈夫かい」
声のする方には大柄な男、僕よりも十歳は歳上だろうか。
「ここの温泉はのぼせやすいんだから注意しないとな」
「すみません、ありがとうございます」
僕はゆっくりと体を起こして軽く頭を下げた。
「観光の方かい？　何の目当てでここに来たんだ？」
「仕事で来たんです。建材の仕事で」
咄嗟に嘘をついたのは、観光で浮かれて温泉でのぼせたと思われるのが少し嫌だったからだ。
「そうかい、そりゃご苦労なこったな」
男は寡黙、といった感じで場を去ろうとした。
「あ、あの。火、火を使うお祭りってご存じですか？」
「そりゃあ、師走祭りじゃねえかな」
丸太のような太い腕を組んで男は続ける。
「木城町から美郷町の南郷に百済の王子様が父親に会いに来るんだよ」
奈須さんが言っていたのはそれだ。
「ありがとうございます。何から何までお世話になって」
「いいんだよ。のぼせたくらいで嫌いにならないで、また美郷町に遊びに来てくれよな」

そう言って男は脱衣場から出ていってしまった。またって。仕事で来たって言ったのにな。

二日目は朝から車を走らせて美郷町の南郷地区へと来た。さらに山あいといった感じだが、西郷地区に比べより昔の建物などが増えたような印象だ。昨日に引き続き街を散策しつつ奈須さんの手がかりを探し回った。

西の正倉院に百済の館。どうやらここには本当に朝鮮半島の王族がいたらしいが、僕は王族よりも奈須さんがいることの方が重要だった。奈須という名前の家を探し回り、ここにいるのではと直感で回り回ったりしたが一向に手がかりはなかった。

すっかり日が暮れ、一日が終わる頃、最後に神門神社を訪ねた。ここは師走祭りの主役である百済の王様が祀られている神社だった。帝が神門…そんなことを考えながら石段を登るとどこからか空気が変わった。特段大きな建物ではないが厳かな雰囲気だ。手をゆすぎ拝殿へと踏み入れるとザワザワと森が動くような風が吹く。

「奈須さんと会えますように」

お参りを済まし、振り返るとほんのり懐かしい匂いがした。どうしてなのか。奈須さん…と直感で思う。走って周りを見てみてもパラパラと人がお参りにきているだけだった。ザワザワと動く森の音を聞きながらも、奈須さんを探した。それっぽい影を見つけて僕は走った。奈須さん、奈須さん。気持ちが溢れていった。僕はそれが奈須さんだと確信していた。やっぱり南郷にいたんだ！　美郷

町に帰っていた！　石段へと向かう奈須さんの後ろ姿を追いかけたが、石段まできて見失ってしまった。

奈須さんは、僕に気づいて逃げたのだろうか。僕は南郷温泉で宿を取り、温泉には浸からずに体だけ洗い、早々に布団に入っていた。僕は何も考えていなかったのかもしれない。僕に連絡がない以上、僕にも会いたくないということかもしれない。自惚れだった。何かを抱えて姿を消したであろう奈須さんが、今更僕と会いたいなんて思うのだろうか。考えが浅かったと思う。もう帰ろう。すごく疲れてしまった。会って彼女に嫌われるのすら怖い。もしかしたらこのまま帰ればちゃっかり奈須さんが戻ってきていて、いつもの日常が戻っているのかもしれない。そうに違いなかった。どちらにしても僕の杞憂だったに過ぎない。余計なお世話だったのだ。もう寝よう。早く帰って、またあの日常を。

長い夢を見た。そこには奈須さんがいて、長く話した気がした。本当に色んなことを話したように思う。朝の四時。気づけば僕は車を走らせて小高い丘に来ていた。何の気もなく僕はここにいた。あえて理由を探すならば、せっかく美郷町まで来たのだから、最後に観光の名所であるこの丘から南郷を眺めていこうか。その程度の動機だった。霧の中を運転、そして歩いてきたが丘を登っていくといつの間にか霧は晴れていく。雲から頭を出した山々が連なり、橙に染まった空がそれらを照らす。幻想的だ。ここに来てよかったと思う。心の底から僕はそう思った。頂上に辿り着くと六角

形の東屋があった。百花亭と書かれた赤い建物、あそこから見る景色はどんなものだろう。
懐かしい香りがする。もうこの香りは、すっかり懐かしいものになっていた。スラッとしたシルエットに凹凸がはっきりした顔立ち。先客は確かに僕の知っている人物だった。森が動く。雲が進み出す。僕は彼女がここにいることを知っていた。分からないけれど。そのために来たのだと、今は確信している。奈須さん。最後に僕は何を話そうか。奈須さん。僕は君にこれから何を言ってあげられるかな。奈須さん、奈須さん、まだ話したいことがたくさんある。だって、僕は君が。

優秀賞（ＭＲＴ宮崎放送賞）講評

宮崎放送　ラジオ・ディレクター
小倉哲

ラジオドラマの面白さは、リスナーと一緒に作品を創り上げるというところにあります。映像がないので当たり前のことですが、番組が制作されただけでは形を成していません。ラジオから聞こえてくるセリフや効果音をたよりに、リスナーが作中世界のイメージを膨らませていくことで作品が完成するのです。そんな受け手側の積極的な関わりがあるだけに、作中の登場人物たちに感情移入しやすいことがラジオドラマの魅力です。ラジオの前で目を閉じて耳を澄ますうちにドラマの世界に入り込み、主人公と一緒になって喜んだり、悲しんだりする。

そんな感情移入できる作品にするために、制作者は細部に気を配ります。演者のちょっとした息遣いに絶妙なタイミングの音楽。ラジオドラマには一度聴いただけではわからないような細かなこだわりが詰まっています。なかでも私たちがもっとも大切にしていることは、「葛藤と成長」をしっかりと描くということ。主人公が日常を離れることによって、抱いていたわだかまりや内面の葛藤を乗り越え、また新たな日

常を切り拓いていく。まさしくラジオドラマが「ドラマ」であるための根幹です。過去2回の「西の正倉院 みさと文学賞」受賞作品のラジオドラマ化では、原作の持つ「葛藤と成長」の物語にフォーカスを絞って脚色・演出するよう心を砕きました。

今回の宮崎放送賞も、登場人物の「葛藤と成長」が魅力的に描かれているかという基準で選考されています。「西の正倉院 みさと文学賞」は回を重ねるうちに応募作品も増え、それにともなって筆力の高い作品がたくさん集まっています。候補となった作品はどれも読みごたえのある物語ばかりで、一つに絞るのは大変に難しいことでした。

受賞作となった「子らは炎に導かれ」は、旧友たちとの触れ合いによって、疎ましい記憶しかない郷里へのわだかまりが解けていくという私小説風の物語。師走祭りの迎え火を見つめながら亡き父に想いを馳せるシーンをクライマックスに、主人公の葛藤が溶解していく心理描写に胸を衝かれます。人間味にあふれる同級生たちや宮崎の街並みがディテール豊かに描かれていて、ラジオドラマとして描いてみたいと思わせる作品でした。聴く人のひとりひとりが、主人公と気持ちをひとつにしながら宮崎の地を旅する。そんな素晴らしいラジオドラマになるといまから確信しています。

優秀賞（ＭＲＴ宮崎放送賞）

「子らは炎に導かれ」

寺西輝将

山が、燃えている。
炎は天までのぼり、夜空も、燃えている。
炎の中から、白装束姿の亡者たちが列をなし
門をくぐりゆっくりと出てくる。
彼らは私の前を通り過ぎ、篝火の灯る空へとのぼっていった。

七月。
一週間の宮崎滞在初日の夜、私は宮崎市内の繁華街でタカシを待っていた。
半年前の一月、私は中学三年の冬まで過ごした宮崎へ三十数年ぶりに帰った。
東京に戻り宮崎での滞在記をSNSに書いてから数日後、小・中学生時代の同級生タカシからSNSでの友達申請が届く。タカシとは数回メールのやりとりをし、七月にまた宮崎へ行く事を伝えると「宮崎に来たら、一緒に夕飯でも食おう」と返信が来たのだ。
小学生時代の彼の顔を思い出しながら待っていると、繁華街の人混みからタカシが現れた。足を引きずりながら歩く彼は、予約してあるという串カツ屋に入り、慣れた様子で注文する。
小・中学生時代、タカシは細身で目立たない子だったが、私の目の前にいるのは金髪を後ろに束ねた、プロレスラーの高山善廣のような大男。カタギの勤め人には見えない。
こいつ……仕事しているのか？

タカシは、交通事故に遭ったことを話し始めた。足を引きずって歩いているのは、退院したばかりでリハビリ中のためだと。
そうか。事故に遭って、金に困っているのか。やっぱり、俺に会おうと言ってきた理由は、金の無心か……
串カツを食べ終わると、タカシはレジを素通りして先に店を出て行く。
奢らせるなら「悪ぃ、ここは、頼む」ぐらい言えよ、と思いながら女将に会計を頼むと
「さっきタカシさんから頂きましたよ」
「え？　あ、あぁ、そうでしたか……」
バツの悪い思いをしながらコソコソと店を出ると、外で待っていたタカシが私に訊いた。
「明後日の夜、小中学校の同級生が集まって飲み会をしようと思うちょっとやけど、テラちゃん、まだ宮崎におるよね。久しぶりに、みんなと会わん？」
断る理由もなく、私は同級生たちと会うことにした。

二日後、タカシたちの飲み会に現れた私を、宮崎の同級生たちは歓迎してくれた。
「テラは、また宮崎に住むと？」
小学生の頃によく一緒に遊んだシュウが、芋焼酎の水割りを片手に眠そうな目をしながら私に訊く。
「まだそこまで考えていないけど」

「久しぶりに宮崎に来て、どうね？　やっぱり宮崎はいい所じゃろ。東京より、ずっといいじゃろ。また宮崎に住んだらいいが」
「うん、そうだねぇ」
私は、酔ったシュウをいなすようにして答えた。

宮崎に住んでいた少年時代、私は、宮崎のことが大嫌いだった。
私が小学校に入ったばかりの頃、父は若い女性とくっつき母と別れた。母は、自分を捨て好き勝手に生き養育費もまともに払わない父を恨み、その恨みを彼の遺伝子を受け継ぐ私によくぶつけた。私のダメなところを見つけるたびに
「お前のそんなところは……あの人にそっくりじゃが！」
と怒鳴りながら私に激しく折檻する。理不尽に思える折檻の中、私は、人というものは愚かなものので子どもというものは惨めなものだと思った。
私にとって宮崎という地は、家庭も、学校も、街全体も、全てが不合理と間抜けさと閉塞感に満ちている、そんな場所だった。
私が中学校に入ると、母が苦労して開いた会社も安定してきた。以前はよく父への憎しみをぶつけながら私を殴っていた母も、その頃には別人のように穏やかになってゆく。
中学三年の冬、母は急に

「東京に引っ越そうと思うちょとやけど、どうね？」
と私に訊いた。
「うん、行こう」
数週間後、中学最後の冬休みが始まるとすぐに私たち家族は東京へと引っ越す。
東京の街は、私にとって宮崎よりも遥かに心地良かった。
進学した都立高校の校風も、街も、何もかも先進的で垢抜け便利な東京。そんな東京の街を、私はすぐに好きになる。
やがて私は宮崎のことも、宮崎の人たちのことも、忘れていった。

タカシたちの飲み会は盛り上がり、一次会の居酒屋を出ると中学時代の同級生が営んでいるバーになだれ込む。今は実業家のジュンイチが日本酒を注文しながら私の横に座った。
「テラ、何で急に宮崎に帰ってきたと？」
「え？　まぁ……ちょっと帰ってみたくなって……」
私は曖昧にしか答えられなかった。
「あぁ、そうね」
ジュンイチはそれ以上訊くこともなく、出された日本酒を飲みながら皆と「あいつはあれからどうなった」の話を始める。皆は噂話で大いに盛り上がり、午前零時を回った頃、会は終わった。

同級生たちはバーを出ると口々に
「テラ、また宮崎に帰ってこいよ！」
と言いながら、タクシーに乗って帰っていった。

二十代半ばを過ぎると宮崎を思い出すこともほとんどなくなっていったが、四十代半ば頃になってから、なぜか宮崎のことが夢に出てくるようになってきた。
その夢は宮崎で生活していた日々にいつも覚えていた閉塞感に満ち、目覚めた後も一日中、憂鬱で暗い気持ちにさせる。
今頃になって何故、宮崎の夢を……
理由は全くわからないが、日を重ねるごとに、宮崎の憂鬱な夢を見る頻度は高くなってゆく。
自分の誕生月である一月、私は宮崎に一度帰ってみることにした。
今の宮崎を見れば、これ以上宮崎のことが気にならなくなり、俺を憂鬱にさせる宮崎の夢も見なくなるだろう。
そう思ったのだ。
私は、宮崎の思い出を捨てるために宮崎へやって来た。
三十数年ぶりに宮崎の街を歩くと、閉塞感に満ちた思い出の中に隠れた、楽しかった事、優しかった人々、良き友人たちのことなどを思い出した。

ここは、そんなに悪いところではなかったのかもしれない。
半年後の七月、また宮崎に来よう。
私はそう決めて東京に戻った。
ＳＮＳでタカシから友達申請が送られてきたのは、そんな一月宮崎滞在の様子を投稿した、すぐ後だった。

七月の宮崎滞在中、タカシは私に宮崎の同級生と再会する機会を多く与え、同級生以外の人々とも引合わせてくれた。一月の宮崎滞在時は連絡を取れる人など誰もいなかった宮崎に知り合いが一気に増え、一週間の七月宮崎滞在は終わる。
その後も、宮崎が夢に出てくることはあった。
しかし宮崎の夢は、以前のように薄暗く憂鬱な夢ではなく、柔らかい陽の差す日向のような明るさと穏やかさを伴った夢となっていた。

宮崎の夢を見始めた頃、思い出すようになった光景がある。私がまだ幼かった頃に父と二人で見たものだ。

山が、燃えている。
炎は天までのぼり、夜空も、燃えている。

炎の中から、白装束姿の亡者たちが列をなし
門をくぐりゆっくりと出てくる。
彼らは私の前を通り過ぎ、篝火の灯る空へとのぼっていった。
その光景を目にした場所を一月の宮崎滞在時からずっと探していたのだが、見つけることはできなかった。
あまりにも現実離れした光景だから、あれは夢や映画で見たものかもしれない。
それでも私は探し続けた。
そして十一月の半ば、私はまた、宮崎にやってきた。

「何っすか、それ。きっと臨死体験っすよ」
宮崎市街地にある美郷町特産品カフェの店長に燃える山から亡者が出てくる光景の話をすると、店長は笑いながら言う。
十一月宮崎滞在の二日目の、もうすぐ店が閉まる時間。客は私一人だった。
「いやいや、俺、死にそうになった事なんてねーし」
「テラさん、うっかりして自分が死んだことに気がついていなかったんじゃないっすか？　実はテラさんはもう死んでいて、ほら、こうやって私と話をしているのも、死ぬ時に見る走馬灯の一部かも」
と気味の悪い事を客である私に向かって言う店長の、こんなところが私は好きなのだ。

「シャレはともかく……テラさん、もしかすると、これかもしれませんよ」
店長はノートパソコンを私の前で開いて何やら検索し、私に画像を見せた。
あ……
それは、祭りの画像だった。
幻影として消えかけていた記憶が、現実とつながった。

翌晩。
「テラ、明日どうすっとね？」
七月宮崎滞在中にタカシたちとの飲み会で再会したジュンイチから着信があった。
実業家の彼は今、セミリタイアしている。
「美郷町に行ってみようかと思って」
「美郷町？　そらまた、えらい山ん中に行くっちゃね」
「まぁ、いろいろあって」
「遠いやろ、あそこは。交通の便も悪いが。俺が車で連れてっちゃる」
「いや、いいよ。悪いから。それに、今回は一人で行きたい」
彼の声はしばらく途切れ、その後に彼の発した言葉は、有無も言わさぬほど強くなっていた。
「いや、俺が連れて行く。何時に美郷町に着けばいいと？　昼ね。じゃったら明日の朝十時、そっ

ちのホテルのロビーで待っちょる。いいね、明日十時にロビーで。それじゃ」
ジュンイチからの通信はそれで切れたが、その後すぐ、今度はタカシから着信があった。
タカシにジュンイチとの話をすると、タカシは大笑いしながら
「あいつは、一度言い出したらきかん。おとなしく連れて行ってもらえばいいちゃが」
と言った。

翌朝。
ジュンイチは、彼の愛車ボルボに私を乗せ高速に乗る。
「なんだか、悪いね」
「いいとよ。それよりも、美郷町のどこに行くとね？」
「神門神社」
「そう……よっしゃ」
ジュンイチはカーオーディオをいじり生ギターの曲をかける。
「お前、タカシんこと、怪しい奴と思っちょったやろ」
「え？　そんなことは……いや、実は、ちょっとだけ」
「やっぱりそうね！」
二人は大笑いし、私はタカシが宮崎で私にしてくれたことを話す。

「タカシはどうしてここまでしてくれるのかね。誰にでもそうなの、彼は？」
「いや……お前も知っちょる通り、あいつは冷めたところのある奴じゃからね」
タカシに「情に厚い」という雰囲気はない。彼のものの見方・考え方はむしろ、かなり冷めている。
「だよねぇ。何で、俺みたいな奴に……」
「似ちょっとよ」
「は？」
「お前と、あいつは、似ちょっとよ」
似ている？
タカシと私は、雰囲気も、生き方も、まったく似ていない。
「似てねぇよ。全然違うって」
私は、ジュンイチがシャレで言ったのかと思い笑いながら言ったが、彼は真顔になっている。
「お前、タカシのオヤジさんの事、知っちょる？」
「え？」
タカシは自分のことをあまり話さない。
彼について私が知っているのは、腕利きの美容師でロックバンドをやっている、だから髪型や服装も普通の人より派手、子ども三人を大切にしている愛妻家のパパ、ということぐらいだ。それらも本人からではなく、ジュンイチから聞いた。

「あいつのオヤジさんはやり手の商売人やった。けど、愛人を作ってよ、ほとんど家に帰らんかった。その愛人の間に息子ができて、あいつのかぁちゃんはいつもそっちの家族と揉めちょった。あいつの家庭は、いつもむちゃくちゃやった」

ジュンイチは、話しながらボルボを加速させる。

「じゃからあいつは、人っちいうもん対して冷めちょっと。そんなあいつが今、人一倍子煩悩で、かみさん思いなのは、そのせいよ。子どもには自分みたいな思いをさせたくないっちゃろうね」

やはり私は、タカシのことを、何も知らなかったのだ。

「お前も、宮崎におった頃はオヤジさんのことで、家ん中が大変やったっちゃろ？　タカシから聞いちょる。そんなところが、自分と似ちょるて思うたっちゃろうね」

ジュンイチは、高速道路の案内板を一瞬、ちらりと見た。

「それと」

ジュンイチは、続ける。

「お前は外面の愛想はいいけど、人に対して冷めちょるよね。オヤジさんが外で女を作って、家ん中がむちゃくちゃになって、家族っちゅうもんをまったく信用せんで生きてきたやろ。じゃから、自分が子どもん頃に育った場所を憎んで、いつも人を信用できんで、冷めた目で見る。そんなところも、タカシには、他人と思えんかったっちゃろうね」

返す言葉がなかった。

ジュンイチも、しばらくそれ以上話をしてこなかった。
カーオーディオからは生ギターの曲が流れ続けていた。

美郷町に入ると、ジュンイチは川沿いの和菓子屋で栗きんとんと栗おはぎを、山奥のピザ屋でピザとジェラートを私にご馳走した。しかも、往復の高速料金もガソリン代も自分がもつと言う。私が払おうとしても

「いらん、今日は俺が奢る」

と言い、頑として譲らない。

「今日は全部、俺が払う。じゃけど、この次。この次、俺と会った時、お前が俺に奢ってくれんね。これは、男と男の約束やから。次、お前にご馳走してもらう日を楽しみにしちょるよ」

普通なら「ヤクザの押し貸しじゃねぇか」と思うところだ。しかし、彼にそんな約束をさせられたことが、妙に嬉しかった。

神門神社に到着したのは昼過ぎだった。私とジュンイチはしばらく、神門神社の境内とその周辺を歩いて回る。

二日前の晩、美郷町特産品カフェの店長がパソコンで見せてくれた画像は、「師走祭り」の画像だった。

神門神社にて行われるその祭りでは、初日の夜に広大な田畑の中で十メートルにもなる迎え火が三十基ほど焚かれる。
その画像が、父と二人で見たあの、燃える山の記憶と、ぴったり重なった。
これだ……これだったのか……
私は、確かめたいと思った。父と二人で見たあの燃える山は、この祭りのものだと。
しかし、神門神社とその周辺をいくら見て回っても、確かめることはできなかった。

宮崎市内へ戻る車中、話はタカシの事になる。
「タカシもジュンイチも、同級生との付き合いが今でも続いているって、いいよねぇ」
「いや……お前が宮崎に来るまで、タカシとはほとんど連絡をとっちょらんかったよ。あいつから最後に連絡が来たのは、十年前、コウイチが病気で亡くなった時やったかね。じゃから、七月にあいつから着信があった時、また誰か死んだかと思った」
「えっ？！」
「お前は知らんかったやろうけど、あいつは、お前が宮崎に来るからっちゅうて、急にえらい勢いで皆に連絡を回しちょった。ほとんど連絡が取れなくなっちょった奴の連絡先も、みんなに訊いて回っちょった」
私はてっきり、タカシは普段から皆とよく会っていると思っていた。七月宮崎滞在時も、ちょう

ど皆との飲み会があり、たまたま宮崎に来ていた私もついでに呼んだのだろう、ぐらいにしか思っていなかった。

違ったのだ。

私の知らないところで、私のために、ほとんど連絡をとっていなかった皆を無理して集めてくれていたのだ。

そして私は一月まで、タカシのような人がいる宮崎の思い出を捨てようとしていた。

涙が出てきた。私は普段、ほとんど泣かない。映画などを見て感動することはあっても、泣くことはほとんどない。しかしこの時、私の目からはとめどなく涙が流れていた。自分でも、どうして泣いているのか、よくわからない。

「な、何ね！？　どうしたと？　俺、そんなひどい事言っちょらんやろ？」

「わからん。なんか、泣けてきたとよ」

何故だろう、この時の私の言葉は、宮崎弁になっていた。中学三年の冬に宮崎を出て以来、何十年も話すこともなく、また話す必要もなく、もう話すことはできないと思っていた宮崎弁に、この時だけは、戻っていた。

車が高速に入りしばらくすると、私を気遣い黙っていたジュンイチがまた話しかけてきた。

「ところでよ」

「ん？」
「お前、今日はなんで急にあそこへ行こうと思ったと？」
私は、父と見た燃える山の光景があの神門神社でのものだと確かめに来たのだ、と話す。
「はぁ？　何ね！　そんな事やったと？！」
ジュンイチは急に笑い出した。「そんな事」という言葉にはカチンときたが、豪快に笑う彼を見ていたら、腹も立たなくなってきた。
「お前はほんっと、おもしろい奴じゃ」
翌日、私は東京に帰った。

師走祭りは毎年一月下旬あたりに金・土・日の三日間行われる。今回は一月十八日から三日間。迎え火が焚かれるのは初日の一月十八日。それは奇しくも私の誕生日だった。
宮崎に行く一週間前、私が宮崎滞在の日程をタカシに伝えると、彼は師走祭り初日には私を車で神門神社まで連れていくと約束してくれた。
「俺の子ども三人も一緒に連れて行きたいっちゃけど、いい？」
断る理由などない。神門神社への道中は賑やかになるなと思った。

一月十六日、師走祭り初日の二日前。

この日はジュンイチのボルボで綾町に連れて行ってもらい、夕方近く、ジュンイチお気に入りのラーメン屋に入った。ジュンイチは私より先に食べ終わると

「このラーメン、お前が奢ってくれん？」

と言った。

ジュンイチの分も払い店を出ると、彼は、車のエンジンを掛けて待っている。

「お前が俺に奢ってくれるっちゅう、あの約束、これでもう果たしたね。ありがとう、美味しかったよ」

えっ？！

美郷町で奢ってもらった金額に対してだけでも、ゼロが一つ足りない。さらに、私のために、美郷町でも、そして今日も、半日以上潰してくれた事を考えると、全然足りない。

「いや、これはこれ、あれはあれで」

「いいと。これで、いいとよ」

彼は「言い出したらきかない男」のまま、私をホテルまで送り、帰っていった。

私は、父のことを嫌いではなかった。

しかし、好きでもなかった。

父に対する関心がほとんど無かったのだ。

子どもにかなり甘い人で私を叱ったことは一度もなかったが、私が幼い頃に若い女性と男女の関

係をもち家から出ていった父は、私にとって、どうでもいい人になっていく。
父はその若い女性と再婚し、そちらにも子どもをつくり、私が二十五歳の時に亡くなった。
私が父の葬儀のために宮崎へ行くことはなかった。
遠いところで好き勝手に生きた男が、一人死んだ。
そんな事のために自分の時間を奪われるのはバカバカしいと思っただけだ。
その後、父の記憶は、私の中から消えていった。
そして、宮崎の思い出も、一緒に消えていった。

二日後の一月十八日、師走祭り初日。
タカシの運転で行く神門神社までの道中は、彼の子ども三人も一緒だ。
「一昨日、ジュンイチと会ったよ」
「そう。元気やった？　まぁ、あいつはいつも元気やろうけどね」
「相変わらずだったよ。あ、実は十一月の滞在で彼にだいぶ奢ってもらって、次は俺が彼に奢る約束をさせられていたんだけどね。あいつ、一昨日俺にラーメン一杯奢らせて、これでチャラって言ったよ。約束をさせられた時は『これは男と男の約束やから』って、えらくこの約束にこだわっていたのに。何なんだろうねぇ、あいつは」
私が笑いながら言うと、タカシは少し黙ってから答えた。

「実は、十一月にテラちゃんが美郷町へ行くってあいつに言った後すぐ、あいつ、俺んところに電話してきたっちゃが」
「えっ？！」
「あいつ、えらく興奮しちょってよ。テラちゃんが死ぬかもしれんって言っちょった」
はぁぁ？！
な、何でそうなる？！　意味がわからない。
タカシは、ジュンイチのモノマネを入れながら続ける。
「『テラは、美郷町の山ん中に行って、一人で死ぬ気じゃが！』って。『あいつは時々、えらく思いつめたような顔をしちょる。あいつが宮崎に帰ってきたとは、故郷に死に場所を求めてやが。じゃから、俺が、美郷町まで一緒についていく！　あいつは死なせん！』って」
タカシは大笑いしながらさらに続ける。
「俺は『いやいや、そんなわけないやろ。テラちゃんは大丈夫やから』って言ったっちゃけどね。ほら、あいつは『言い出したらきかん男』やろ。『いいや、俺があいつを助ける！』って、えらく意気込んじょった。で、『テラには、俺から電話があったこと言わんで』って釘を刺されちょったから、今まで黙っちょったけど……もう、いいやね」
ジュンイチの奴……
「で、テラちゃんとあいつが神門神社に行った後、あいつからまた電話があってよ。そしたら今度

は『何ね！　あいつ、オヤジさんとの思い出の場所を探しちょっただけやったが！　心配して損した』って、怒りながら笑っちょった」

ジュンイチはあの日、私のことを心配して、一緒に行ってくれたのだ。

「あいつ、美郷町でテラちゃんにいろいろ奢って、『次はお前が奢れ』って、約束させたやろ。あれはね、テラちゃんにあ約束をさせちょけば、テラちゃんは義理堅そうやから、その約束を果たす時まで一人で死なんやろと、そう思ったとよ」

「何やってんだよ、あいつ……馬鹿だなぁ」

私は笑いながらそう言ったが、目からは涙が出てきた。

「そんなわけ、ねえじゃん。ほんっとバカだよなぁ、あいつ」

ジュンイチのバカげた思い込みを笑おうとすればするほど、涙が止まらなくなってきた。

後部座席で騒いでいた三人の子どもたちが、泣いている私に気がついて静かになった。末っ子の男の子が小声で

「テラおじちゃん、泣いちょっと？」

と訊く。しっかり者の長男がタカシに

「お父さん……」

と言った。

「いいと。大人には、急に泣きたくなる時もあるとよ」

タカシはそう言いながら、カーオーディオのボリュームを上げた。

はるか昔。

百済の禎嘉王がその子・福智王に王位を譲った三年後、百済国内に大乱が起き、王族は日本へ逃れた。

途中、彼らは海で嵐に遭い父子は離れ離れとなる。父・禎嘉王たちは日向市の金ケ浜に漂着し美郷町南郷の神門に宮居を定め、子・福智王たちは宮崎県高鍋町の蚊口浦に漂着し木城町比木に宮居を定めた。

後に、父子は神門で再会を果たす。

師走祭りは、その父子再会を再現し、祝う祭りだ。

百済王伝説が史実なのかどうかは、よくわからない。しかし、美郷町の人々が、離れ離れになった父子が再会を果たす物語を大切にし、その再会の喜びを毎年祭りとして再現しているというのは、事実だ。

私たちが師走祭りの駐車場に到着した時、すでに迎え火は焚かれ始め、駐車場は満車に近い状態となっていた。

並ぶ屋台が賑わう様は、祭りでよく見る風景だ。しかし、この祭りは、他の祭りではあまり感じ

ない優しさに包まれているように思える。
五穀豊穣・無病息災など自分たちの幸せを願うだけではなく、遥か昔の父子の再会を喜ぶという、幸せへの共感が、この祭りにはある。
この地で脈々と受け継がれているそんな心が、土地の人々と、祭りを見に来た人々を、父子再会を喜ぶ優しさと燃え盛る迎え火で浄化している。
私には、そう感じられた。

迎え火はいつの間にか大きくなっていた。
いくつもの大きな紅蓮の炎が空へ向かって揺らぐ。立ちこめる煙は煌々とした炎に照らされながら一つになり、空を覆ってゆく。
山が、燃えているようだった。
幼い頃、父と二人で目にしたのは、やはり、この光景だ。
櫓が燃え盛り、炎の中で竹がパチン、パチンと爆ぜ歓喜の声が響く中、笛太鼓の音が幽かに聞こえてきた。橙色の煙の奥に、薄っすらと紺色ののぼり旗が見えてきた。
旗は次第にくっきりと炎に照らし出されてゆく。その後を、火の粉を分けるようにして大幣を振る神主を先頭に、白装束の一行が続く。
あぁ、これも、あの時の光景だ……煙を分け炎に頬を照らされながらゆっくりと歩む白装束の一

行が、幼かった私には、燃える山から現れた亡者の列に見えたのだろう。
その光景は、父子の再会を喜ぶ優しさと、そんな喜びを祭りとして受け継いでいる地元の人々の誇りに満ちていた。
もし、私に子どもができたら……この年齢で独り身の私が今から子どもをもつのは無理だろうが……もし、私に子どもができたら、その子に、この光景を見せたいと思った。
その子は、いつか私の元から離れていくかもしれない。私を憎み、自分の育った故郷を憎み、自分の過去を忌み嫌うようになるかもしれない。
それでも、この光景を目にした子の心の奥底には、迎え火の炎の記憶と共に、父子の再会を喜ぶこの祭りに満ちる優しさが消えることなく残り続けるだろう。
たとえ私がこの世から消えて無くなっても、その子は迎え火の記憶に導かれ、いつか再びこの地で、迎え火の炎とこの祭りを包む神聖な優しさに清められ、その子の憎しみも、悲しみも、罪も、煉獄のようなこの炎に焼かれ、夜空に消える。
そして魂は安らかなものとなり、故郷に迎えられる。
この祭りを包んでいるのと同じ、故郷の人々の優しさに包まれながら。
ずいぶん勝手な思い込みに満ちた信仰だ。しかし、私にはそう思えるのだ。
父は、今の私と同じことを思い、幼かった私に、この祭りを見せたのではないだろうか。
そして私は今、迎え火の記憶に導かれるようにして、ここにいる。

あれほど嫌い、憎んでいた少年時代の思い出を受け入れ、故郷を愛せるようになり、今、故郷で、タカシやジュンイチたちの優しさに包まれている。

子・福智王の一行は鳥居をくぐり、父・禎嘉王の祀られる神門神社へ上っていった。タカシの子どもたちの興味はやはり燃え盛る炎にあるようで、末っ子は夜空へと舞い上がる火の粉を指差し「ほら、すごい、すごい！」と叫びながらはしゃぎ、彼の姉は焼かれた竹が爆ぜる音に驚きながら笑っている。しっかり者の長男はそんな二人を見守りつつ炎を眺めていた。

「テラちゃん」

タカシが福智王一行を見送りながら、私に声をかけた。

頬を炎に照らされる彼の顔は、いつものクールな彼の顔とは違っていた。

「ジュンイチから聞いちょるやろうけど、俺のオヤジは、ほとんど家に帰ってこん人やった。じゃから、オヤジと過ごした記憶は、ほとんど無いとよ。オヤジと一緒にどこかへ行った記憶なんて無かったと。じゃけど、テラちゃんがこの祭りの話を俺にした時、思い出したとよ」

珍しく自分の事を話し始めたタカシは少し下を向いた。その時の顔は影になり、私には、よく見えなかった。

「俺、小さい頃、オヤジと、この祭りに来ちょった」

再び顔を上げ、また話し始めた彼の顔には、何もかも受け入れるような微笑みがあった。

私の父も、タカシの父も、そしてタカシも、私がこの祭りを見て思ったのと同じことを思い、自分の子にこの祭りを見せたいと思ったのかもしれない。

「この祭りの思い出が、オヤジと一緒に出かけた、たった一つの思い出やった。今まで、忘れちょった……ちゅうよりも、思い出さんようにしちょったとかもしれん。でも今、はっきり思い出した……いいとよ。もう、いいとよ……」

もう、いいとよ……宮崎弁の「もう、いいんだ」を、自分に言い聞かせるように繰り返す彼の顔には、許しと安らぎに満ちた笑みが浮かんでいた。

「オヤジとこの祭りに来たことを思い出せて、うちの子たちに見せることができて、本当に良かった。これも、テラちゃんがいたからやね。やっぱりテラちゃんに会えて、良かった」

タカシは照れくさそうに言った。

「テラちゃん、ありがとう」

迎え火の炎は、すでに小さくなり始めていた。

空へ昇る煙も、火の粉も、次第に小さくなってゆく。

やがて、すべては夜空に消えていくのだろう。

……タカシ、ありがとう……

あれから私は、多い時には月に一回のペースで宮崎に帰っている。
そして私は、長い間忘れていた、忘れようとしていた、宮崎で過ごした少年時代の思い出を取り戻している。
そんな思い出の中に、宮崎の中学時代の同級生、あっくんの事がある。
勉強にも、スポーツにも、そして絵画や音楽にも秀で、文学にも造詣が深かった彼は何故か私のことを気に入り、仲良くしてくれた。
中学三年の冬に家族と東京に引っ越してから大学に入るまで、私はあっくんと年賀状などのやり取りをしていた。
高校三年の大学受験でしくじり浪人決定となった私は、あっくんに、自分のモヤモヤした思いをただぶちまけただけの手紙を送りつける。今考えると迷惑な手紙だが、その手紙に対して、彼は丁寧な返事をくれた。
その返事には、最後にこう書かれていた。
「君の文には、なぜか惹きつけられる。君の書くものには、人を惹きつける力があると思う。君は、書き続けたほうがいい。何でもいいから、書き続けたほうがいい」
文系科目が苦手で理系へ進んだ私の書く文に、そんな力があるのだろうか？
浪人決定となった私を励ますために、そんな事を書いてくれたのだろう。
そう思いつつも、彼の言葉がどこかで気になっていたのだろう。私は工業系の大学に入った後、

文芸の会に参加し、下手な小説や随筆をチマチマと書いていた。
しかし大学院に進学すると研究などで忙しくなり、文芸作品を書くことはなくなってしまった。
宮崎で過ごした少年時代を忘れていくとともに、あっくんの言葉も忘れ、あっくんという友人がいたことさえも忘れ、私が随筆や小説などを書くこともなくなっていったのだが。
宮崎へ帰るようになってから、私は、あっくんのこと、そして、あっくんの、あの言葉を思い出した。
「君は、書き続けたほうがいい」

こうして私は今、この宮崎の物語を書いている。
私の書く文に「人を惹きつける力がある」のかどうかは、わからない。やはり、あっくんの言葉は単なる慰め・励ましだったのかもしれない。
それでも私は、彼の言葉を思い出し、数十年ぶりに書く文芸作品として今、こうやって、この宮崎の物語を書いている。
「この飛行機は、間もなく着陸態勢に入ります」
機内にCAの声が流れた。もうすぐ宮崎空港に到着する。この話を書いているノートパソコンも閉じて、着陸に備えなくてはいけない。
そろそろ日が沈む時間だ。宮崎に到着したらすぐ、タカシやジュンイチたちと合流し、一緒に夕食をとることになっている。最近、宮崎に行く時にはいつもそうだ。

タカシは相変わらず宮崎へ来る私をこれでもかという程もてなし、宮崎のいろいろな人々と引き合わせてくれる。

ジュンイチも相変わらず「言い出したらきかない男」で、有無を言わさぬ強引さで私をいろいろなところへ連れて行ってくれる。

彼らのあまりの世話焼きぶりを煩わしく思う時もあるけれど、宮崎へ行くと、やはり、彼らに甘えてしまう。

窓から見える雲が、夕日に赤く染められている。

この光景は、師走祭りで見た、炎に染まる赤い煙を思い出させる。

私の乗った飛行機は高度を下げ、もうすぐ、燃え上がる炎を包む煙のようなこの雲を抜ける。

そして私は、父の眠る宮崎の地へ、安らかな魂とともに帰ってゆく。

佳作

「青いトンネル」

花逗成

波にもまれている間はどちらが上か下かも分からなくなる。無駄な抵抗をせず、流れに躰を任せて待つ。水面に上がるために自力が必要となるのは、明かりを感じられたときだ。

この夏、青いトンネルの出口に射した明かりは、用意されていたものなのか、それとも、特別な誰かが与えてくれたものなのか。

「やっぱり金ヶ浜の波は最高ですね」

「すっかり東京ん人になって」

地元サーファーの先輩にからかわれた。見慣れた顔たちと挨拶を交わす。景色と同じく変わらない温度で。昨夜の友人の結婚式で会った同級生も何人か海に入っていた。

透きとおる水の表面に、陽光を反射して咲く光の花が無数にきらめく。サーフボードにまたがり、波待ちをしながら水平線を見るのが好きだ。余計なものを排除して自分と対話できる。静寂な時間と躍動の波が交互に押し寄せ、そのはざまに漂うことで生きている喜びを感じる。

明暗をつくりながら大きなうねりが近づいてきた。サーフボードの上にうつ伏せになり、パドルをしながら最初に崩れそうなポジションへと移動する。

「GO！　GO！」

良い波を捕まえろ、と仲間にはやし立てられた。

タイミングを合わせ、手を水面に入れて交互に漕ぐ。サーフボードが水の勢いと同化し走り出す

のを感じる。波が崩れる寸前に、両腕を伸ばし前足を引き寄せ、手を離してテイクオフする。勢いよく斜面を滑り降りていく。ボトムで深いターンをしてトップに上り、切り立つ波にサーフボードを当てる。腰をひねり、後ろ足を蹴るとボードの先は再び下方へと向かう。そのときだった。こちらに向かってパドルしてくる男が目の前にいた。ぶつかるのを避けるために、ボードの上から躰を捨てた。崩れた波の中で、洗濯機の衣類のようにもまれた。なにかとぶつかる衝撃を受けた。彼の躰か、サーフボードか。水面から顔を出し、男を探す。少し先に見つけた。

「大丈夫?」

と訊くと、男は笑顔を返してうなずいた。お互い怪我もなく、サーフボードも破損していなかった。長髪に持ち合わせた色白の顔は、初心者の証と考え、彼と距離をおいた。年間通してやっているサーファーなら、顔は日焼けしている。どこかから来たのかは知らないが、この波のコンディションは、経験者でないと危ない。こういった己知らずの素人が海に入っていると、トラブルが起きることがしばしばある。

日向の海は日本一のサーフポイントだと、外から訪れるサーファーによって知った。小さな頃から見てきて、ここでしか波乗りをしたことのないおれにとっては当たり前の風景だったから、以上も以下も知らなかった。今では世界のサーフィン大会も行われ、海外の選手も訪れる。

二時間ほど堪能して砂浜に上がって沖を見ると、急な勾配の稜線を持ったうねりが今にも崩れそうだった。一人のサーファーがパドルをして乗ろうとしている。

「いい波」ふと声が漏れた。
男は急斜面で立ち上がって滑り出した。彼を覆うように波が崩れだした。引力に逆らい波の先端は落ちることを拒み、宙に曲線を作りながら前へと飛んでいく。そして「チューブ」といわれる波のトンネルが出来上がる。そのチューブが男を飲み込む、いや、自ら入って行く。左へと規則的に崩れていく波のカーテンに男の姿が消えた。数秒後、男はチューブから出てきた。見事なライディングを終えた男は、おれがぶつかった男だった。

我が家の海上鏡店は、鏡師の父が亡くなってからはガラスやサッシも取り扱いながら細々と営業をしている。
「いい波やったか」
職人のトシさんが、タオルで顔を拭きながら声をかけてきた。久しぶりに再会したが、昔と変わらずの筋肉質の大きな体躯をしている。父と子供の頃からの友人で、店を立ち上げてから一緒に仕事をしている。
高校三年の春に母ひとり子ひとりになってからは、父のように相談に乗ってもらった。「大学へ行け」という父の意思に逆らい、地元に残ろうとしていたおれに助言した。
「親父さんの最初で最後ん願いを聞いてやれて」
行ってはみたものの、その期待にも応えられず、成果はなにも上げぬまま、生ぬるい波間を漂っ

ているだけだ。大学三年の夏になっても、就職活動もせず、進路を考えてはみるものの、行動に移せずくすぶっているのだ。光の出口が見えぬまま、青春という名のうす暗いトンネルを、方向も定まらぬまま歩いている。

「おつかれさんじゃった」

トシさんが店を出ていくのを見送るように母が奥から出てきた。

「トシさん、おつかれさま。あら、力哉（りきや）、おかえり」

ピンクのエプロンをつけた母は、元気な息子の躰を見て嬉しがった。昨日帰宅したときは二人とも仕事で居なかったし、おれも夜中に戻ったから初めてのご対面だ。

作業場を通るときにいくつも並べられてある鏡を見て「ぶよぶよ」と自分に向かい、ため息を吐いた。子供の頃、鏡が嫌いだった。未熟児で生まれたからか、病弱で痩せっぽちだった体型にコンプレックスを持っていた。小学校でつけられたあだ名は「マッチ棒」だ。

ところが、サーフィンが全てを変えてくれた。小学校六年のときに少しの距離ではあるが引っ越しをして、海の近くに住むことになった。家の前の金ヶ浜で見た、波の魔術師に心を奪われた。

運動なんかしなかった、というよりさせてもらえなかったおれが、何度も「やりたい」とせがむので、父がサーフボードを買ってくれた。もともと日向で育った父はサーフィンができた。高校卒業後、京都に働きに行ってからはやっていなかったらしく、今思うとそんなに上手くはなかった。それでもおれが一人で波乗りできるまでは、いつも付き合って教えてくれた。上手くいかなくても、「や

り続けろ」と励ましてくれた。初めてサーフボードの上に立ったときは、両手を上げて大喜びしてくれたのを覚えている。

「どう、大学は」とか「就職は決まったの」などと母は訊かない。息子の顔を見れば察知できるのだろう。

母はもともと東京のお嬢さんで、父とは京都で出会い、駆け落ち同然でこの地に来た。それもあってか、東京には、おれの知る限り行っていない。だから東京の話はしない。その割にはおれと話すときは標準語を使う。

「どう、海上鏡店は」とおれは訊いた。

夕食を食べ終え、チーズまんじゅうを出されたときに電話がかかってきた。母に「あとで」と五本の指を開いて、サンダルをつっかけた。鏡を横目に見ながら店先に出て、歩きながら話した。海辺の風が気持ちいい。

「ごめん、夜にかけようと思っていたんだ」

愛美（まなみ）と付き合いはじめて一年を迎えようとしている。同い年の二十一歳で在日コリアンである。彼女の両親は日本人のおれと付き合うことに反対しているらしく、愛美はそれを気にしている。彼女は、おれの住んでいるアパートの並びにある実家の焼肉屋で手伝いをしている。よく昼飯を食いに行ったことで知り合った。

「お店継がなくていいって、お母さん本当にいったの？」
「ああ。もう畳もうとも考えているらしい」
「リキはどう思っているの？」
砂浜の方から怒声が聞こえてきた。足を進めると、人の群がりが見えた。
「愛美、またあとでかける」
数人が輪になって誰かに蹴りを入れている。おれは走りながら叫んだ。
「おい、何やっちょっちゃねー！」
少年たちは散っていった。近寄ると、サーフボードのケースを寝袋の代わりにして丸まっている男がいた。おれは声をかけた。
「大丈夫？」
笑顔の彼は、波にもまれてぶつかった、最高のチューブライドを決めた男だった。

「『フクチ』ってどんな漢字かしら」
「幸福の福に、土地の地です」
彼は長い髪をバスタオルでくるみ、頭の上に団子にして載っけている。風呂上りに熱いうどんを食べさせる母はどうかと思うが、彼は嬉しそうに食べている。
「福智王かと思ったわ」

「フクチオウ？」
おれはビールを飲みながら訊いた。
「力哉は本当に地元愛がないわね。百済王伝説よ」
幼い頃に父親が話してくれた記憶がうっすらと蘇る。母の説明を真剣にフクチは聞いている。話はこうだ。
朝鮮半島の古代国家である百済から王族が日本に亡命するために海に出た。二艘の船は嵐に遭い今の宮崎県に漂着する。禎嘉王は金ヶ浜に、息子の福智王は蚊口浜に。のちに追討軍と合戦になり二人とも死する。父は神門神社、息子は比木神社に祀られたという。神門神社で奈良正倉院の御物と同一の銅鏡が見つかったことから、伝説の信憑性は高く、今なお語り継がれている。
「力哉も私におんぶされて『師走祭り』に行ったのよ。そしたら火を怖がって泣いちゃって」
フクチはおれの顔を見て楽しそうに笑う。
「一年に一回、親子の再会。福智王の御神体を担いで『上りまし』するの」
「のぼりまし？」
今回はしっかり理解しようと思った。
「木城町の比木神社から美郷町の神門神社まで歩くのよ。父親に会いに」
「父親に……結構距離あるんじゃないの」
「九十キロよ」

「歩きで？」
「昔はそうだったんだって。九泊十日だったけど、最近は車を使って二泊三日」
たしかに地元のことだが、サーフィン以外のことは興味を持たなかった。でも、これからのことを考えるようになったからか、今は素直に、千年も続く伝統に敬意を感じる。
「河原で拾った二個の石を、石塚に投げる儀式もあってね、『せーの』っていって、お父さんと一緒に投げたのよ」
母の瞳の潤いが輝いた。おれは立ち上がり、台所の冷蔵庫からおかわりの缶ビールを取り出した。黙って聞いているフクチにも渡した。
「三日目の『下りまし』のときには、へぐろで顔を塗り合うのよ」
「へぐろ？」
「墨よ」
「なんのために？」
「涙を隠すの。別れの悲しみを見せないために」
そういえば父親が黒い顔をして帰ってきたのを見たことがあった。
「そして、また会いましょうって意味を込めて『オサラバー』って叫ぶのよ」
もの静かなフクチは同じ二十一歳だが、よく見せる笑顔からは年上に感じる寛容さを感じた。
布団に入り電気を消すとフクチがいった。

「どうして助けてくれたんだい」
少し考えて、答えた。
「ここの海が、好きだから」

建て付けが悪いふすまの閉まる音が聞こえて目を覚ました。隣の布団はきれいに畳まれている。白みがかった空をカーテンの隙間から感じた。
躰を起こし、窓を開けた。下を見ると、フクチがリュックを背負って道を歩いている。サーフボードは持っていないから、海に行くのではない。気になったので、着替えて外へ出て追いかけた。
どこに行くのかと訊くと「神門神社」と答えた。歩いたら半日位かかるのは、行ったことがないおれも知っていた。店の軽トラを出した。
地図を開こうとしたら、
「僕、分かるから」
とフクチがいい、おれはアクセルを踏んだ。
彼の指示で赤岩川の手前でハンドルを切って国道三二七号を走り、奥日向路を進んだ。耳川沿いを走行し四四六号を走る。初めて見る風景が新鮮で、お互い言葉を発せず、車は西へと進んでいく。青々とした樹々が流れ、川沿いの風がひんやりして気持ちいい。
まっすぐ前を見ているフクチに訊いた。

「前にも来たことあるのか」
彼は笑顔で頷くだけだ。なにか訳があるのだろうけど、それ以上は訊かない方がいいと判断した。
神門神社に着き、駐車場に車を停め、敷地に入る。人はおらず、静謐の中を小鳥達の挨拶が飛び交っている。鳥居の前で頭を下げるフクチの真似をしてついて行く。階段を登っていき、途中の手水所でも真似をする。
登りきった正面に、古めかしい本殿が鎮座していた。自分が愛美と初詣に行った東京の神社とはまったく異なるものだった。
フクチより一歩下がって同じように、二回頭を下げ、二回手を叩いた。
「ここで待っていて」
フクチは本殿の横へ消えていった。少し本殿の中を覗いたり、境内を歩いたりして見物した。帰ってこないフクチに興味が湧き、本殿の横を進んでみた。すると、裏手のところでフクチは後ろ向きでかがみ込んでいた。
「来ると思ったよ」
振り向いたフクチは真剣な顔つきだった。手招きされたので、近寄った。見せられたものは鏡だった。
「昨日のお礼に教えるよ。誰にもいわない……」といってから笑顔になって「よね」と訊かれたから、フクチの目をしっかりと見て、ゆっくり頷いた。それは男の約束以上に重々しさを感じた。
「この銅鏡は我が一族しか知らない」

「ドウキョウ？　イチゾク？」と聞きたかったが、飲み込んでフクチの鋭く見開いた瞳を見ていた。
「誰かが訪れては磨いている。輝きを失わないように」
「なんのために」とおれの問いが分かっているように言葉を続けた。
「自分自身を知りたくなったときに顔を映してみるといい。答えを教えてくれる」
　彼は銅鏡を白い布に包んだ。
「この隠し戸は身内しか開けることができないからね。それを君に教える」
「いいのか」
「僕を助けてくれたお礼さ」
　木の細工で開閉できるようになっていて、「一度しか教えないよ」といわれたのでしっかりと見て記憶した。そして、白い包みは仕舞われた。
「自分でやってごらんよ」
　そういわれて、開けてみることにした。細い木を上にあげながら下の木を横に引くといったパズルのような工程をいくつか行い、開けることができた。
「どんなもんだい」
　自慢の顔で振り向いたら、フクチがいなかった。彼の名前を呼びながら辺りを探した。本殿の正面にまわっても姿はなかった。車に戻っても居なかった。しばらく待ったがとうとう彼は戻ってこなかった。

彼は福地王なのではないか。そんな馬鹿げたことを思いついた。もちろん、八世紀中頃に蚊口浜に漂着した福智王ではない。しかし、その末裔なのではないかとは考えられるではないか。追悼軍との戦いで死去したというが、事実かどうか分からない。そもそも「百済王伝説」というように、「伝説」なのだから。しかし、だからこそ、本当に存在していて子孫が生き延びたということだって考えられる。

帰る車を運転しながら、あれやこれやと、昨日初めてフクチを見たときからのことを思い出し、考えあぐねた。

家に帰ると、軽トラを使用したことで母に怒られた。

「力哉、罰としてわたしの代わりにいってらっしゃい」

しょうがなく仕事に行くことになった。

トシさんは優しく笑って、「間に合うてよかったちゃ」と小声でいい、軽トラに鏡を載せ始めた。

「母さん、フクチから連絡あった?」

彼のサーフボードは作業場の隅に、まだ立てかけられていた。ボードケースは鮮やかなエメラルドグリーンを主とする五色が綺麗だ。母は首を振ってからいった。

「その色合い、丹青(たんちょん)ね。韓国の芸術よ」

やはりフクチは朝鮮半島出身なのか。頭の中で「福智王伝説」が膨らんでいく。

「よし、行くちゃ」
軽トラの助手席に乗ると、トシさんは煙草に火を付けた。
「じゃあ、今日はよろしゅう。若旦那」
「よしてよ、トシさん」
この仕事は嫌いではない。鏡を見ることに抵抗がなくなってからは、よく手伝いをしたものだ。現場を終えて帰路に向かった。トシさんと長い時間を二人きりになるのは初めてだった。タバコを挟んだ指は太くて皺が多い。
「遊びも仕事も謙ちゃんに教えてもろうた」
トシさんの話からすると、父とは幼い頃から相当仲が良かったようだ。
「京都ん老舗鏡店に就職して、毎日残業もして頑張ったげなちゃ。でも、謙ちゃん、給料も上がらず、あとから入ってくる奴らにどんどん抜かれていって、悔しかったんやろうな」
「仕事ができなかったから?」
「やったら鏡屋を自分で始めんやろう」
父はほとんど過去のことを話さなかったし、おれも興味がなかった。
「大学行かんかったかぃちゃ」
「それだけで?」
「やかぃ、力哉には絶対大学行かする、って昔かれえっちょった。行っちょきゃなんとかなるって。

おれはそうは思わんけどなぁ。大学行ってん遊んでばっかりん奴だってぎょうさんいるやろう。まあ、中学しか出ちょらんおれがいってん説得力ねえか」
トシさんは高笑いした。おれは胸が締めつけられた。
地元でトシさんを知らない人はいない。やくざにスカウトされても断った人だ。それがなぜうちの父の仕事を手伝っているのかは分からない。
「卒業したらどんげするん？」
トシさんを安心させるいい言葉が浮かばないでいた。
「いい海や。おれはこん街が好きや」
トシさんの横顔の後ろに紺碧の金ヶ浜が広がっていた。
店に戻り作業場に入ると、フクチの丹青のサーフボードが消えていた。
まだ日が暮れるまでに時間があったので、着替えて海に向かった。昨日の波よりは良くなかったが、大勢のサーファーが浮かんでいた。あの中にフクチはいるのだろうと水に足を入れ、パドルアウトした。
しかしフクチはいなかった。周りの知り合いに聞いても、彼らしき姿を見たものはいなかった。
「また会えるわよ」
母は台所で手を動かしながら答えた。久しぶりに甘いカレーを食べられる。
「彼、福智王の子孫だわ」

どきっとした。神門神社の秘密は話していない。しかし、母は自信を持っていった。
「どうしてそう思うのさ」
「うちの名字、ウナカミって変わっているでしょ」
そんなこと考えていなかったけど、東京では珍しいっていわれていた。
「海上の祖先って百済王って話があるのよ」
「なにそれ。作り話？」
「お父さんと出会った頃に聞いたの。『新撰姓氏録』っていう古代氏族の系譜書に書いてあるって」
「海上家は由緒ある家なの？」
「さあ。いい家系と思って欲しかったんじゃないかしら。結婚するのに」
「なんだよ、でたらめか」
「分からないわよ。百済王伝説だって真意は藪の中なんだから」
おれは笑った顔を作りながらも、福智王の末裔を信じる気持ちが固まった。
「決定的証拠もあるのよ」
「証拠？」
「彼の名前聞いた？」
「フクチでしょ」
「下の名前よ」

そういえば聞いていなかった。
「サダヨシだって」
「いつ聞いたの？」
「今日、あなたたちが仕事に行っているときよ」
「フクチ、帰って来たの？」
力が抜けて居間に入り、畳の上に寝転んだ。
「証拠、分かったの？」
すっかり忘れていた。
「なにがどう証拠なのさ」
「サダヨシ。禎嘉王の『禎嘉』ってサダヨシって読めるのよ」
おれは興奮して問う。
「漢字を聞いたの？」
「聞いてないけど、きっとそうだわ」
「そうだわ、って……」
「フクチだって、土地の『地』じゃなくて福智王の『智』よ。ばれないように嘘ついたんだわ、きっと」
おれは確信した。
「なんてね。どう、私の『福智王伝説』は？」

そういって、母は楽しそうにカレーの味見をしている。
おれは二階の自分の部屋で横になり、スマホで「百済王伝説」のことを調べ始めた。
海は荒れていた。風と共に水しぶきが飛び、視界を遮る。オールを漕いで先の明かりを目指すがなかなか進まない。父さんの船が離れていく。方向修正するも、流れでその距離は広がっていく。声を出そうにも風と雨で口が開かない。このままだと完全に父さんと別れてしまう。振り絞って叫んだ。
「父さーん！」
天井から吊り下がった蛍光灯の常夜灯がオレンジ色に光っていた。いつの間にか眠っていた。
将来のことを真剣に考えた。東京での三年間はなにを生み出したのか、なにを掴んだのか、なんのために呼吸をしているのか。答えは、なにも無かった。いや、一つだけ、大きなものがある。かけがえのないパートナーがいるのだった。その大切な人をどう守っていくのか。
スマホに愛美の着信履歴があった。
「自分自身を知りたくなったときに顔を映してみるといい。答えを教えてくれる」
フクチの言葉が幾度も頭の中を回旋した。
カレーライスは変わらぬ甘さだった。無言で食べたことを、満足しているのだと母は勘違いしていた。
翌朝、現場がないことを確認して軽トラを借りた。一度走った道だから迷うことなく車を走らせ

ることができた。
神門神社に着いた。何人かが参拝をしているので、人が引くのを待った。誰もいなくなったのを確認して、こっそりと本殿の裏へと回る。手順を思い出しながら秘密の戸を開けた。白い布の包みをそっと取り出す。腿の上に置き、汚さないように布をめくっていく。
昨日はよく見なかったが、黄金色に輝く本体にはデザインが施されていた。真ん中に摘めるような突起物があり、その周りに四つの花弁を持つ花が六つ浮き彫りされている。本体を触らないように裏返した。
鏡を覗き込む。
そこには、父の顔が映っていた。自分の顔だが、父の顔とそっくりだと気づいた。
おれは決意した。
興奮を覚ますために、途中で河原に降りた。玉石の上に腰掛け、川の流れを眺めた。先日母が話した師走祭りの儀式を思い出す。平たい同じくらいの石を二つ手にした。
車に戻ろうと川に背を向けたときだ。「オサラバー」と聞こえた。振り返る。川の先に林があり、その奥からフクチが見ている気がした。彼に向かって大声を出した。
「オサラバー」
青々とした木立に反響する。いつかまた会えると信じ、右手を振りながら何度も叫んだ。
「オサラバー！」

左手で持った石の上に、湿った黒い斑点がいくつもできた。

作業場ではトシさんが「いいことあったな」というような顔つきでおれを迎えた。

母は居間で洗濯物を畳んでいた。

「おかえり」

「ただいま」

おれは二階に上がって、海パンとTシャツに着替えて、すぐさま一階に降りた。

「今日は波いいの？」

「どうだっていいんだ」

母は手元を見ながら首を傾げた。

「おれ、鏡師になる」

母はぽかんとしていた。

サーフボードを手に取り作業場を抜けるときに、トシさんと目が合った。

「いってらっしゃい」

トシさんは満足そうな笑顔だったから、おれも負けない笑顔で応えた。

「いってきまーす」

遥か沖からうねりが押し寄せていた。それは雄大で、おれを迎えているようだった。

「なにこれ？」
愛美は驚いている。お土産といって渡されたのが石だから、無理もない。
「神門神社の近くの河原の石だよ。これを石塚に投げるんだって」
「その師走祭りで？」
「そう。その儀式は朝鮮半島の古い風習にもあるんだって。助けあった百済と日本のつながりがあるらしいよ」
「それで持ってきてくれたの？」
「来年の『師走祭り』は行けそうにないから、行けるときまで持っておいて」
もう一つおれは石をバッグから出した。
「これはおれの分。本当は一人二個なんだけど、まだ半人前のおれたちは二人で一人分」
愛美はうつむき、おれに躰を寄せてきた。彼女の背中が折れるくらい強く、抱きしめた。

父が鏡師として仕事をしていたことが、誇りに思えるようになった。
鏡のこと、インテリアのことを調べ始めた。行きついたのは「インテリアコーディネーター」の資格だった。幅広い住空間の知識を持ち新たなサービスを提供できることが、海上鏡店の存続の道だと考えた。資格取得までに半年の勉強期間が必要とある。物理的には大学卒業までに取得は可能

ということだ。
通信教育の費用のためにアルバイトを一つ増やした。愛美の焼肉屋である。ちょうど人手が足りないと聞いていたから、敵の懐に入る、これこそ信頼を得るための最善だと思った。おれの母とは違って、愛美にはご両親といつでも会ってもらいたいと思う。
本人に鏡師の女房になってくれとはまだいっていない。資格を取るまでは自分の胸に仕舞っておく。しかし、最近、愛美は海上鏡店のことをよく訊いてくる。
急に毎日が忙しくなった。愛美とデートもしていない。焼肉店で仕事の会話をするうちに、韓国語も少しずつ話せるようになってきた。同時に愛美のお父さんとお母さんとも、距離が縮まっていっている気がする。

鏡が無かった頃、その役割を果たしていたのが水たまりだという。人間が初めて自分の顔を見たときにどんな気持ちだったのだろう。自分を映し出し、自分に語りかける、もう一人の自分。
青いトンネルの出口はもうすぐだ。
明かりを見せてくれたのは父だろうか。それとも、もっと昔の誰かなのだろうか。鏡に自分を映して。

佳作

「草煎（くすい）りのユンジェ」

杉尾周美

今にも降り出しそうな空模様だが、ダイゴの洞窟に着くまで何とかもつだろう。
田代には私たち家族の住む上野ムラや隣の八幡ムラなど、いくつかのムラがあるが、母方の祖父であるダイゴはその中でも結構名の通った猟師だったらしい。しかし、ちょうど私が生まれた頃、猟師仲間の不注意が原因で事故に遭い、彼の目は外の世界をぼんやりとした輪郭でしか捉えることができなくなってしまった。心身ともに深い傷を負ったせいで、彼はムラを出て、狩り小屋だった洞窟にたった一人で住むようになった。
以来十数年間、私たちは交代で彼の食べ物を洞窟まで届けるようになった。届ける時間は概ね決まっているが、目の不自由なダイゴをびっくりさせないために、私たちは洞窟に至る坂道のかなり手前から声をかけながら近づくことにしている。
「ダイゴ爺、おはよう」
肩から斜め掛けした麻袋から赤米の餅と青菜の塩漬け、そして野イチゴを台の上に並べた。
「やあ、ハル、おはよう。昼前には降り始めるだろうな」
「そうね、何だか生温かい風も吹いてきたわね」
「今年は雨が多そうだから、粟や米の実入りもよいはずじゃ」
ダイゴの予想はめったに外れることがない。彼はもともと五感の鋭い男だったが、目が不自由になってからというもの、彼の聴覚、臭覚、触覚はさらに研ぎ澄まされていったという。風の匂いや空気の湿り具合などおびただしい情報を彼なりに整理して記憶する。それをもとに長期に渡る天気

の予想や、その年の収穫高に至るまでぴたりと言い当てることできるのだ。彼の予知能力に敬意を払ってムラ人は彼をダイゴ博士と呼ぶようになった。その噂は田代じゅうに広がり、上野以外のムラ人も相談に来るようになった。彼らの相談事一つ一つに耳を傾けることで、ダイゴのところには田代一帯の情報が集まるようになり、予測の的中率をさらに上げることになった。

一方、ムラ人はいつとはなしにダイゴに食べ物を交代で届けるようになった。おかげで私はずいぶん楽になった。

しかし、よいことばかりではない。確か五年前の夏のことだ。私が洞窟を訪ねると、親指大の熊蜂が洞窟の壁に絡みついた蔓に止まっていた。前日の夕方にダイゴが気づかないうちに熊蜂が迷い込んだのだ。やがて洞窟の周囲に陽が差すようになれば、勝手に出ていくだろうが、その前に何かの拍子にダイゴの体が熊蜂に当たってしまえば最悪の事態を招きかねない。わずかに残された視覚を頼りに山にたった一人で暮らすこととは、そうした危険と隣り合わせの生活なのだと痛感した。私は思わずダイゴに、一緒にムラで暮らしてほしいと頼んだ。

彼はしばらく黙っていたが、やがて低い声で話し出した。もし家族と一緒に暮せば、きっと家族は安心するだろう。しかし、安心や安全を引き換えに、自分の聴覚や臭覚や触覚が鈍り、今までのような正確な予測ができなくなってしまうのが一番辛い。猟師として野山を駆け巡ることを諦めた自分が、人々からダイゴ博士と呼ばれて頼りにされていることはこの上ない生きがいなのだ。家族やムラの者に面倒をかけるが、どうか自分の願いを支えてほしい。彼は懸命に訴えた。

それ以来、私は食べ物を届けるときは、できるだけムラや山の様子など見て来たことを詳しく伝えるようにしている。

「ところでね、今度、兄貴たちが八幡ムラの百済人（くだらびと）から新しい稲の育て方を教えてもらうそうよ」

昨年の冬、突然、隣りの八幡ムラに八人の百済人がやってきた。仲間からお殿様と呼ばれている男が百済の王族の一人だとか。百済という国が滅び、追われる身となったお殿様は、家来を七人連れて逃げて来たらしい。この出来事は田代であっという間に広がった。当初、八幡ムラでは上へ下への大騒ぎだったが、少しずつ落ちつき、今では八人が一軒の家で共同生活をしているという。

「八幡ムラの連中が百済人からいろいろなことを教わっているという話を、幾度か耳にしたことがあるぞ」

「はじめの頃は、言葉も通じなくてお互いとても困ったらしいわ。でも何とかなるものなのね、彼らは米作りの方法をあれこれ教えてもらったらしくて、八幡ムラはこれまでにない豊作だったらしいわ。その噂を聞いて、今は上野ムラにも教えに来てほしいって、百済人に頼み込んだらしいのよ」

「ああ、お前の兄貴は農作業をするためだけに生まれて来たような男だからなぁ」

「ええ、春になるのを待ちかねて、籾数の多い黒米を植えたのだけれど、よほどでき具合が気になるのか日の出から日没まで田んぼに出ているわ。嫁さんのヨシもそんな兄貴をずっと手伝っているよ。あれは似たもの夫婦だわね」

「そりゃよかった。そのヨシという嫁はお前の友達なんだろう？」

「そうよ、親友よ。兄貴も嫁さんにいいところを見せたいのよ。だから八幡ムラまで出向いていって、新しい米作りを教わろうとしているのよ」
兄の新たな挑戦を話して聞かせると、ダイゴはほんのわずか眉を寄せた。が次の瞬間、満足そうに微笑むとこう言った。
「若いうちは何でも経験することが大事だ。ヨシという伴侶も心強いことだ。ところで、ハルや、お前の猟の方はどうだ」
話題が私のことに振られた。私はムラに住んではいるものの、罠猟のために一日中、野山を駆け回っている。
「まあまあよ。でも、罠を見回るだけでも半日、場合によっては一日費やしてしまうことだってあるんだから」
「仕掛けすぎなんじゃないか」
「そんなことないわよ。今度うまく仕留めたら燻してダイゴ爺にも持ってくるわよ」
「ああ、楽しみにしているよ」
「じゃあ、また、明日」
「ああ、ありがとう」
洞窟の脇道から山に入り、昨日仕掛けたくくり罠と落とし穴の見回りをしなければならない。獲物がかかったときの喜びには計り知れないものがある。しかし正直なところ、この見回りに行くと

きの緊張感の方がたまらなく好きだから私は罠猟を止められないのだ。

十日ほど経った。

「ダイゴ爺、おはよう。今日は粟餅と枇杷よ」

私はホウノキの葉に包まれた粟の蒸し餅と枇杷を台の上に置いた。

「雨なのにすまんのう。ありがとう。ところでタロたちの米作りはどんな具合かな。百済の連中に教わっているのだろう？」

「それがすごく変わっているのよ。今までは籾を田んぼに蒔いていたでしょ。でも、百済人は、まず、籾を狭いところで苗になるまで大事に育てるのよ。その後、田んぼに苗を植えていくの。そうすれば八幡ムラみたいに秋には多くの籾がつくのだそうよ。もしうまくいけばしっかり蓄えられるはずよ」

「そうか、タロもヨシも喜んでいるじゃろ」

「ええ、ヨシが一番喜んでいるのよ。好きな人と力を合わせて米作りをするんだもの、女の幸せを絵に描いたようなものだわ」

「あれ、柄にもなくハル、お前、やきもちを焼いているのかね」

「ふふ、そんなはずないでしょ」

「そうだ、ハルはハルだよな。ところで猟の成果はどうだったのかな」

「ええ、昨日も一匹もかからなかった」
「そうか。しかし諦めるなよ。猟は忍耐が大切だ。だが、何より大事なのは、罠にかかった獲物にとどめを刺すときじゃ。イノシシでも、ウサギでも、相手は死にもの狂いで逃げようとしている。仕留めるときは互いの命をやり取りする瞬間だと心得て臨むのじゃ」
「ええ」
「くれぐれも慎重にな」
「分かってるって。じゃ、またね」
　これ以上洞窟に長居すれば、彼の説教が延々と続きそうな勢いだ。私はダイゴ爺の洞窟を小走りで出ると、一つ目の罠に向かった。
　昨夜から降り続いた雨が、明け方にパタリと止んだ。今日こそ大物がかかっているような予感がするのだ。罠の中にほんの少し残った人間の匂いも、この雨で完全に洗い流されているはずだ。ほんの少し警戒心を解いた奴らの足取りをまたぎ棒が罠へといざなう。次の瞬間、三本の脚で暴れまわるイノシシを想像するだけで、口元が緩んでくる。

　二週間が経った。
「ダイゴ爺、ハルだよ。いつもの粟餅を置いておくね」
「おお、おお、怪我は治ったのか」

「ええ、もう大丈夫。今回は治りがすごくはやかったのよ」
「そうかい、それは何よりだ。ハルは若いからな」
「ううん、若さだけじゃないわ、百済人のおかげでいい薬草を使ったのよ」
「いい薬草？」
「ええ、百済人の家来の中に草煎（くすい）りのユンジェと呼ばれている若い男がいるのよ。その彼がね、薬草に詳しくってさ」
「そうかい、それはよかった」
「彼って面白いのよ。いろんな薬草を持っているけど、それだけじゃないの。そこらへんに生えている草木の根や葉や実なんかを使って病気や怪我を治してくれるのよ」
「そんな家来が一人でもいれば、万が一、お殿様が怪我や病気になっても安心だ。だから百済を離れるときに、そのユンジェとかいう若者を連れてきたのだな」
「そうなのよ。彼が言うには、そうした薬草に関するいろんなことは、神農本草経（じんのうほんぞうきょう）という本に書かれているらしいのよ。でも、彼はもともと身分の高い家柄ではなかったから字が読めないの。それで身の回りの草木を片っ端から試して、みんなの病気や怪我を治してきたのよ」
「それはすごいな」
「自分の体を使ってあれこれと試しているのがすごいでしょ」
「ああ。ところでハル、お前は彼についてやけに詳しいね」

「うふふ」
「まあ、何はともあれハルが元気になってくれたんだ。爺はそれだけで十分だよ」
「ありがとう。さあ、私、行くわね」
「今日もこれから罠を仕掛けに行くのか」
「二週間も休んでしまっていたんだから行くのが当然よ」
「じゃあ、気をつけて行っておいで」
「ダイゴ爺も気をつけてね。雨上がりで足元がぬかるんでいるからね」
「わかった。ありがとう」
私は振り返りもせずに洞窟を後にした。というのも、今のこの浮き浮きした気分を自分でもどうすることもできないのだ。ついしゃべり過ぎて、勘の鋭いダイゴには図星をつかれてしまったではないか。思わず頬が赤くなるのが自分でもわかった。
実のところ、もしユンジェがいなければ私の怪我は今頃どうなっていたかは分からない。あの日は、前日に仕掛けた罠のことが気懸りで、つい足元が疎かになっていた。私は岩場で足を滑らして山道を転げ落ち、肘や膝、そして腰の辺りからも血を流しながら、何とかムラまで歩いて帰り着いたのだった。
しかし、困ったことに翌日から膝が大きく腫れてしまい、立つことも歩くこともできなくなった。両親はとても心配したが、治す手立ては何も思い浮かばなかった。ただタロは兄として何とかして

やらなくてはと悩んだ末、仲間に私の怪我を話したのだそうだ。その中に八幡ムラの若者がいて、自分のムラに住む百済人が人の病気や怪我をこれまでも随分治して評判になっているという話をした。そう、その百済人というのがユンジェだった。兄はさっそくその若者を介して、ユンジェに私の怪我を診てほしいと頼み込んだのだ。

彼は嫌な顔ひとつせず、すぐさま私の足を診にやってきた。そして兄に採ってこさせたツワの葉を火であぶり、細かく刻んで腫れた膝に貼りつけ、上から大きな葉で覆った。翌朝早くに再び我が家を訪ねてくれたが、手には草の根を一束携えていた。それはムラの者がゴブリョウと呼んでいるもので、土手などでよく見かける草だった。しかしユンジェに言わせれば根の部分は葛根という名で、これを煎じて飲めば、体が温まり大量の汗をかいて熱を下げることができるのだという。それまで何となく体全体が熱っぽかったのだが、これを飲んだおかげで熱が下がり体力も回復した。

その後もユンジェは治療のために頻繁に訪れた。怪我のせいで猟に出ることもままならない私を退屈させないようにと、百済のことや薬草の効能など語って聞かせてくれた。その中で一番面白かったのが、八人の百済人が田代へ流れ着くまでの冒険物語だった。

ふと気がつくと私がいつも仕掛ける罠の場所を通り過ぎていた。罠の見回り中に、他のことを考えて、罠を通り過ぎるなどといったことなどこれまで一度もなかった。「彼についてやけに詳しいね」と言いながらにやりと笑ったダイゴの顔が目に浮かび、思わず苦笑した。

十日後の朝。
「ダイゴ爺、とうきび餅を持ってきたよ。今日はいい天気だね」
「ああ、ハル、蒸し暑くなってきたね。怪我はよくなったのかね」
「ええ、すっかり。本当にユンジェのお陰よ」
「そうだね。で、ユンジェはどんな男なんだい」
「そうね、彼は兄貴みたいには体が大きくないのよ。私と同じくらいかな」
「男としては少し小さい気もするが大丈夫なのかね」
「彼はもともと薬師になりたかったらしいけど、そのためには偉いお坊様の下でたくさん勉強をして、神農本草経という難しい本を読まなければいけないのだって」
「薬師になるまで時間がかかってしまうな。ユンジェは身分が高いわけではないのだろ」
「ええ、そうなの。それに彼は偉くなるよりも、怪我や病気で苦しんでいる人を一人でも多く治したいと思っているの。だから身近にある草木から薬草を探し出したり、煎じたりする方法を見つけようとしているのよ」
「今どきの若者にしちゃ珍しいね」
「ええ、ちょっと変わってるのよ。他の男たちは一つの田んぼからいかに多くの籾を実らせるか、やっきになっているからね。兄貴だってそのうちの一人よ。この間は仲間と集まって、馬に田んぼを耕させるなんて話を本気で話していたよ。うちじゃあ山羊やら馬やら、その世話だけでも大変よ」

「そうだろうなあ」
「それに比べてユンジェは物静かよ、何をさせてもね。彼の相手は草木の根っこや実や葉っぱでしょう。それを乾燥させたり、煎ったりして薬をつくるんだもの。仲間たちから草煎りのユンジェって呼ばれていたんだって」
「ハル、お前は勝気だから、ユンジェではちょっと物足りないのではないかい」
「そんなことはないわよ。ユンジェはムラの誰も知らないことを知っているわ。それに私の怪我を治してくれたのは彼しかいないもの」
「そうだな。いい連れ合いなんだろうね」
「まあ、連れ合いだなんて。ユンジェが聞いたらびっくりするわよ。内緒にしておいてね。じゃあ、また来るわ」
「ああ、気をつけてな」
何だかダイゴ爺と話していると、ついユンジェのことに話題が集中してしまって、いらないことまでしゃべってしまいそうだ。ここはさっさと退散して本業の罠の見回りに取りかかるとしよう。
見回りの時は、猟に集中しなければいけない。他のこと、特にユンジェのことを考えて、これ以上罠を通り過ぎてしまったり、足を滑らせて転んだりしては猟師の名折れだ。昨日は仕掛けが甘かったのか、空弾きの状態で逃げられてしまった。周りにイノシシらしき足跡が残っていたが、改めてウジを探すことから始めなければならない。

ふと見上げると、薄紫色の桐の花房が風に揺れていた。

額から流れる汗を拭きながら洞窟へやってきた。

「爺、ハルだよ」

「ああ、ハルか。このところ暑い日が続くなあ」

「暑いね……」

「どうした、いつもの元気はどうしたんだ」

「うん、昨日、嫌な噂を耳にしたんだ」

「嫌な噂？」

「ええ、ムラの田んぼの稲が妙な病気に罹ったのよ。根っこが腐っちまうって今まで見たこともない病気だから、百済人が田んぼに毒でも撒いたんじゃないかって言うんだ」

「ああ、その噂なら昨日の夕方、お前の兄貴から聞いたよ。あいつもかなり参っている様子で、わしのところに相談に来たんだ」

「そう、兄貴も相談に来たのね。ムラのみんなは百済人が上野ムラを乗っ取ろうとしているんじゃないかって噂をするようになったのよ」

「ムラの連中、特に若い奴らにとっては、今まで見たこともない稲の病気がこれからもどんどん広がりはしないかと不安なのじゃろう。春先から一生懸命育ててきたんじゃ。その苦労を考えると苛

立つのも分かる。しかし、そのイライラのせいで心にゆとりがなくなって、たとえ小さなことでも諍いになってお互いがぎすぎすしてしまうのは困ったもんじゃ」
「そうなの。兄貴も悩んでいたわ」
「お前とユンジェがいい雰囲気だってことはムラで知らぬ者はいない。だから百済の人を上野ムラの連中が疑うなんてことになれば、お前がムラ人と百済人との板挟みになると心配していたぞ。分かるだろう」
「ええ。で、兄貴はどうなの。百済人を疑っているの」
「百済人は、育てた苗を田んぼに植える方法を教えてくれた。この方法なら籾を直接田んぼに蒔く方法よりきっと多くの籾ができるだろう。去年の八幡ムラでは成功したけれど、うちのムラではどうなるか今のところ誰も保証できない。秋になって実った穂を自分の目で確かめたとき、本当のことが分かるだろうっていうのがタロの考えだ」
「兄貴にしてはやけに分別臭いのね」
「そうだ。今回、百済人から新しい方法を教えてもらったのだからね。ちょっとやそっとのことで手の平を返すような真似はできないよ。だからといって、ムラの連中の不安をないがしろにすることもできないのじゃ。へたをすれば、上野ムラと八幡ムラの関係もおかしくなってしまうからなぁ。若いのに苦しい立場に立たされて可哀想じゃ」
「ああ……。ここは兄貴の言う通り、稲を見守るしか方法はないわね。じゃあ、爺、これから山を

見回ってくるわ」
「そうしなさい。山に入るときは人里のことなんか考えちゃいけないぞ。どこに危険が潜んでいるか分からないからな」
「わかった。じゃあ」
ダイゴ爺は私にはいつも子ども扱いなんだ。それに比べて兄貴に対しては一目おいている。確かに今回の件に関していえば兄貴の判断は正しい。兄貴もヨシといういい伴侶を迎えて、まさに脂がのっているという感じだ。それにユンジェと私のことも気にかけてくれているなんて、何だかくすぐったい気分だ。いやいや、山に入ったら雑念は禁物だ。
坂道を下ってムラに帰る途中、私は足元にヘビジャクシがひょっこり生えているのに気がついた。これまで何度もこの辺りを通っているのにどうして気づかなかったのだろう。便所の毒消しに使うとよいのだとユンジェが教えてくれたことを思い出し、一束摘んで持っていた麻袋に差し込んだ。
秋になった。青紫色の花びらをしたツユクサがそこかしこに咲いている。
「ダイゴ爺、栗餅とあけびを持ってきたよ」
「ありがとう。朝夕が随分涼しくなってきたな。ハルも罠の見回りが楽になってきただろう」
「ええ、ムラの田んぼの籾もずっしり実が詰まって、深く垂れているのよ。今までにない豊作よ」
「そうかい、やっぱり百済人から教わった方法がうまくいったんだね」

「そうみたい。夏には少し根っこの病気も出たけれど、あれ以上広がることはなかったわ」
「百済の人とムラの若者たちの努力のお陰だな」
「そうなの。病気が出たときは、お互いぎくしゃくして、一時はどうなるのか悩んだこともあったけど」
「そうだったな。タロも喜んでるだろう」
「ええ、たぶん一段落したら、爺に顔を見せに行くと言ってたわ」
「そうか。わしからも褒めてやりたいからな。是非来るように伝えてくれ」
「分かったわ」
「じゃあ、私はもう行くわね。冬までに何とかウサギを仕留めたいのよ」
「そうだな。気をつけてな」
特に薄茶色の毛をしたウサギは産毛がたくさん生えていて、肌触りもよくて引き取り手が多い。毛皮の処理は手間がかかるけれども、それだけの値打ちはある。罠猟をする者にとって、秋口は特に忙しい時期なのだ。
山の中腹辺りまで登ると、ふいに木立が切れ、その間からムラ全体を見下ろすことができる。私はよくここでひと休みしながら、罠の道具を整えたり、汗を拭ったりするのだけれど、ふとユンジェのことが頭をよぎった。このところ、気がつけばいつもユンジェのことばかり考えているような気がする。それというのも、やれ滋養に効くだの、蚊やりに効くだの、いろいろな薬草を手に携えて以前はしょっちゅう会いに来てくれていた。それがこの秋口からぱったり姿を見せなくなったから

だ。初めのうちは天候や仕事のせいだと自分に言いきかせていたものの、とうとうこのひと月、一度もやって来なかった。これにはさすがの私も、彼の心変わりを疑わずにはいられなくなった。

十日が過ぎた。

「ダイゴ爺、今日はキノコの雑炊を持ってきたよ。冷めないうちに食べてよね」

「ああ、ありがとう。朝夕涼しくなってきたから温かいものはありがたい。ところで、最近ユンジェのことをちっとも話さないけど、彼は元気なのかい」

「たぶん、元気だと思うよ」

「なんじゃ、会っておらんのか。けんかでもしたのか」

「けんかはしてないけれど、ユンジェがちっとも来てくれないのよ」

「気のせいじゃないのか」

「はっきりとは分からないけど、何だか他に好きな人ができたのかもしれない」

「好きな人って？」

「さあ……分からない。でも、ユンジェに怪我や病気を治してもらっている人はたくさんいるわ。その中には若い女もいるはずよ」

「そうだな。人間誰でも弱っているときに助けてもらったら好意を抱くのは当然だ。だがユンジェがどう思っているかは、お前には分からないだろう」

「私みたいに野山を駆け回っているような女より、おしとやかな女の方がやっぱり好きなんだよ」
「ハル、こればかりは焦っても仕方のないことだ。もう二十年以上前のことだが、こんな目になってしまったとき、わしは三年間この洞窟に引きこもっていたんだ。お前の母親が心配して、赤ん坊だったお前を負ぶって身の回りの世話をしにきてくれた。本当に恥ずかしいことだが、その頃のわしは、自分の娘に甘えていたんじゃ。そのうちに、このままではだめだと、頭ではわかっているのだけれど、なかなか上手く立ち直ることができないんだ」
「でも、今はちゃんとムラのみんなからも信頼されているじゃないの」
「あるとき、自分にできて、ムラの人にできないことは何かを考えた。何日も考えた末に自分は田代の空気の色や流れを見ることができるということに気づいたのじゃ。それからだなあ、わしが天候や災害について少しずつ予測するようになったのは。お前がちょうど五つになった頃のことだよ」
「ダイゴ博士って言われるくらい、爺は何でも知っているし、どんなときも冷静だから、そんなに苦しんでいた頃があったなんて……」
「なんのなんの、人生にはいろんなことが起きるものじゃ。その度に人は苦しんだり、悲しんだりするけれど、決して苦労したことは無駄にはならないんだ。分かるね」
「うん。私、とにかく待つわ」
「それがいい」
「私、もう行くね」

「見回りじゃな。気をつけてお行き」
歩き始めた私の目の端に、薄桃色のオモイデグサがため息をついたように咲いているのが見えた。

三日後のことだ。
どうしてもダイゴに話したかった。それというのもヨシから衝撃的な事実を聞かされたからだ。彼女の話では、タロと連れ立って八幡ムラの百済人の家に行ったときに、ユンジェと若い女が一緒に話し込んでいるのを二度も見たという。私が命がけで罠猟をしているときに、二人は逢引を繰り返していたのだ。
それまで黙って聞いていたダイゴが口を開いた。
「百済人の家には、女も一緒に住んでいたのか」
「ええ、百済から一緒にお殿様に仕えてきた仲間の一人よ。賄を担当している女で、ユンジェより少し年上」
「その女が恋人だという証拠はないじゃろ」
「よく考えたら、女だてらに罠猟なんかをやっている私を好きになるはずがないわよね。ただの物珍しさでこの私をつまみ食いした、それだけのことだったのだわ」
ダイゴは一瞬私の勢いに気おされたようだったが、唾を飲み込むとこう言った。
「思えば人の縁とは不思議なものじゃのう。百済人のお殿様は王族なのだから国を追われたとして

も仕方がない。しかし、残りの七人の家来たちにしてみれば、この田代まで流れ着いたのは成り行きに過ぎなかったはずだ。それなのに彼らは田代の人々にいろいろなことを教えてくれた。それだけに夏に稲の病気が出たときは、それが百済人の仕業ではないかと疑われて苦しかっただろう。人間というのは災難が続くと、ついそれをよその連中のせいにしてしまう。残念なことじゃ」

ダイゴはゆっくりとした足取りで洞窟の奥へと移動し、敷物の上に腰を下ろすと手招きした。私は彼の横に体をぴたりと寄せて座った。

「あのときは、わしも初めて聞く稲の病気だったから、全くお手上げだったのじゃ。ただ、ただ、祈るしかなかったんだ。百済人がえらかったのは、自分たちが疑われたとき、じっと耐えたことじゃ。彼らは田代から立ち去ることもできたはずだが、そうしなかった。時を待って、自分たちの誠意を稲に証明させたんだ」

私は次から次へと流れ落ちる涙をどうすることもできず、ただダイゴの体温を感じていた。

「いいよ、何も言うな。そうだ、ムラの者が昨日届けてくれた柿があるからお食べ。わしは喉が渇いたから湯を頂くよ」

小ぶりだけれど真っ赤に熟した果実をかじった。甘味がじんわりと広がっていく中で、わずかに塩味が混じり、口の中で果肉は奇妙な味に変わっていった。私が咀嚼する音と、ダイゴが啜る音とが洞窟の中を流れ、そして止んだ。

「ハル、今日は山へ行くのは止めておけ」

ダイゴがぽつりと言った。
「わかった。ムラに戻るよ」
私は顔にかかった髪を後ろで束ね直し、立ち上がった。

ひと月が経った。
「ダイゴ爺、ハルだよ」
黄金色に咲き揃ったツワの花々に、まるで取り囲まれるように座ったダイゴが焚火をつついていた。
「おや、ハル、元気になったみたいだね、声が弾んでいるよ」
「うん」
「どうしたんだ？　何かあったのか」
「爺に会わせたい人を連れて来たの」
「会わせたい人？」
「手で触ってあげてちょうだい」
「どなたかな」
恐る恐る差し出されたダイゴの手が、跪いたユンジェの頬にそっと触れた。
「ユンジェさん？」
「まあ、驚いたわ。どうしてユンジェだと分かったの？」

「ハルが会わせたい人って、ユンジェさん以外にいないだろ、あははは。はじめまして、ダイゴです」
「ダイゴ博士、はじめまして。ユンジェです、よろしくお願いします」
握り合った二人の手を私の手がさらに包み込んだ。
「ユンジェがね、さっき、私のところに迎えに来てくれたの。そのことを真っ先に、ダイゴ爺に知らせたくて一緒に来たのよ」
「やぁ、よく来てくれた。わしもうれしいよ。じゃが、なぜ……」
「そうよね、爺を心配させてしまったわね。ちゃんと説明をするわ。ユンジェは夏の終わりに百済人の家を出て私と暮らしたい、とお殿様にお願いしてくれていたの。だけど、薬草の知識は百済人にとって宝だから、仲間にきちんと伝授してからでないと二人の結婚は認めないというのがお殿様の答えだったの。だから、一刻も早く薬草のことをすべて伝授するためにユンジェは百済人の家にこもりっきりになってしまったの。伝授する相手が百済のあの女だったのよ。そう、わたしがユンジェの新しい恋人だと勘違いした人」
「ははは、あのときは嫉妬に狂っていたぞ」
ダイゴが愉快そうに言うと、ユンジェは額の辺りをぽりぽり掻きむしりながら答えた。
「ええ、僕が間違っていました。ハルには最初からちゃんと話をしておくべきでした」
「ユンジェが謝ることじゃないわ」
あまりに恐縮している様子を見かねて助け船を出したが、ダイゴは急に真顔になってこう言った。

「いや、きちんと相手に説明をしないと分からないぞ」
「その通りです。私は百済の仲間に薬草の見分け方や保存の仕方、そして処方の方法まで、全部口写しで伝えなければなりませんでした。それには時間が必要でした。やっと伝えることができたので、今度は愛宕山の麓にハルと二人で住む家の準備に取り掛かったのです」
「一人で?」
「はい、一人で。だって夫が妻のために家を準備するのは当たり前でしょう」
「ああ、ユンジェ。君は百済のお殿様に仕えているから、そんな風に思うのだね。しかし考えてごらん、二人が住む家は二人で相談し、力を合わせて準備する方がいいんじゃないか」
「ああ……。お、おっしゃる通りです」
「しかしなぜ、愛宕山の麓がいいのかね」
「ムラに集まって暮らす方が確かに安全です。しかし、私は薬草を採ったり乾かしたりするためには、麓の方が都合がよいのです。それにハルだって猟を続ける限り麓の方が便利だと思います。そして、時折、私たちが持ってきた薬草や獲物と、ムラでできた米や畑の作物を交換するのがいい、そう思うのです。百済人と田代の人たち、そして私たち、それぞれが緩やかにつながっていることが、みんなにとってもよいことになるのだと思います」
「ほぉ、しっかりしておるな、若いのに。さすが百済から来られたお人だけあるなぁ」
「私はお殿様に連れられて百済の地を離れましたが、国を追われることは、それはそれは辛いこと

です。しかし、与えられた場所で自分たちの知恵や経験を活かして、豊かな実りを見届けることができれば、それが一番の慰めになるのです。これからは二人で力を合わせてここで生きていきます」
「これからもハルをよろしく頼むよ。それからハルにはできるだけちゃんと話してやってくれ。賢い子なんだから」
「ダイゴ爺、もう、ユンジェを責めるのはやめて」
「おやまあ、甘いな。喉元過ぎればなんとやらじゃな。あははは」
「ふふふ、まだ、言ってる。さあ、ユンジェ、帰りましょう。私、今から罠を見回りたいんだけど……」
「ハル、せっかくユンジェさんが一緒なんだから、今日くらいは一緒にムラに帰って、これからのことをいろいろ話し合いなさい。幸せにな」
「爺、ありがとう」
私は節くれだったダイゴの手を両手で握りしめた。

佳作

「先行きの地図」

南理維

城を見やって、岩木新太郎は溜息をついた。

「こん先、どうすっと」

慶応三年（一八六七）の大政奉還から、世の移り変わりは覚悟していたつもりだった。

しかし、これほど早く藩がなくなり、藩士である己も御払い箱になるとは。

――役目には人一倍励んだつもりじゃったが。

延岡藩内藤家中で、小姓としての己の評判は決して悪くなかったと思う。数え二十四、家禄十石の軽輩であっても、剣の腕は人後に落ちなかったし、朋輩や上役ともうまくやっていた。このまま年月を重ねていけば、下士なりにそこそこの出世も望めただろう。

が、御一新で藩も役も無くなってしまったのだから、どうしようもない。当然、禄は貰えない上、屋敷の召し上げまで決まってしまった。

これからどうやって生きていくか、いくら考えても溜息しかでてこない。

片割れ月に照らされた夜道を歩き、組屋敷に戻ると、いつものように家の明かりが目に入った。

「おかえりなさいまし」

迎えに出てきたのは儀助という、父の代から仕えている老僕だ。

腰の大小を渡すと、すぐに夕餉の支度を、と言って、儀助は奥へ入った。その後ろ姿はまた一段と小さくなったような気がする。

変わったのは姿形だけではない。このところ物忘れが増え、時折とんちんかんなことも口走るようになった。

――年のせいばかりではあるまい。

新太郎の父が若くして病没してから、儀助は母と幼い新太郎を懸命に支えてきた。年とともに、少しは楽をさせてやりたいと思っていたが、三年前に母が病で倒れると、薬代を工面するために他に一人いた女中にも暇を出さざるを得なくなった。以来、儀助は水仕事から母の看病まで一切合切を引き受け、獅子奮迅の働きをしてくれた。

異変に気付いたのは、去年、母を看取ってからだ。

――苦労をかけたのだ。だから……。

屋敷を召し上げられるからといって、後は知らん、と放り出せるわけがない。儀助は己にとって単なる下僕ではなく、主従の境を超えた恩人なのだ。生涯、面倒を見るつもりでいる。そのことも併せて伝えようと、夕餉の後、膳を片付けにきた儀助に、屋敷召し上げの旨を告げた。

さぞ動揺するかと思いきや、

「では、てまえはお暇を頂き、故郷へ帰ります」

こともなげに儀助は言った。

「故郷って……」

「神門です」

儀助が神門村の出だということは知っていた。が、それはもう何十年も前の話だ。
「待て、わしはこいから二人で暮らす家を借り、小商いでも始めるつもりじゃっとよ」
小商いは咄嗟に出た言葉だが、口にしてみると、その手もあり、という気がしてきた。
「小商い？　新太郎さまが？」
儀助は腑に落ちないという顔をした。
確かに、算術が苦手で口下手な己に商いの才覚があるとは思えない。が、そのあたりは、後々考えてもいいことだ。
「ともかく、わしにとって、儀助は親も同然、孝養のひとつもせんことにゃ、気が済まんが」
思いの丈を吐露すると、老いた瞳にじんわり涙が浮かんだ。気持ちは通じた、そう思えた。
が、三日後――。儀助は忽然と姿を消した。
隣人の話では、明け方、新太郎が目を覚ます前に、風呂敷包みひとつを抱えて出て行ったという。
儀助のいなくなった家はいつにもまして、きっちりと片付けられていた。おそらく儀助は、新太郎から屋敷召し上げの話を聞くなり、出て行くと決めたのだろう。
それにしても、あまりに唐突な別れ方ではないか。奉公がもう嫌になったのか、それとも若い主の足手まといになってはいけない、とでも思ったのか、あれこれ考えてみたが、本当のところはわからない。悶々としているうちにも月日は過ぎ、屋敷明け渡しの日が近づいてきた。
とりあえず、次の暮らしを始めるための支度金を作ろうと、屋敷に商人を呼び、家財や古着など

売れる物はすべて、できるだけ高値で売ろうと試みたが、逆に二束三文で買い叩かれてしまった。
やむなく家伝の大小を手放し、ようやくまとまった金を手にすることができた。これで城下に家を借り、小商いを始めることもできるだろう。
――が、その前に。
儀助のことがどうしても気にかかる。
まずは餞別を渡し、わずかでも報謝の意を示さぬことには、新しい暮らしなど始められるわけがない。
屋敷を明け渡したその日、新太郎は神門村に向かった。

秋の野道をまずは南に歩き続けた。
これだけ長い道のりを一人歩くのは初めてな上に、また、手にしている地図がひどい代物だった。描いてあるのは神門村の内のみ、それも神社と山、川、あとは栗の木程度で、村に行き着くまでの目印らしきものは一切、記されていない。
案の定、何度も道に迷い、大して進まないうちに秋の短い陽は落ちてしまった。たまたま道を尋ねに寄った百姓家が一夜の宿を与えてくれなかったら、歩き続ける気力を失くしていただろう。
翌日は早朝から、百姓に教えてもらった方角に歩いたが、濃い霧に覆われた山道は細く険しく、進めば進むほど人家もまばらになっていった。こんな寂しい道を儀助はどんな思いで踏みしめていったのだろう。途中、難渋しなかっただろうか。何十年も主家に忠実に仕えた上、何ひとつ受け取ら

ずに去っていった儀助を思うたびに胸が痛んだ。
早く会いたい。会って、息災であることを確かめたい。その一念で歩度を速めていくと、ほどなく目の前の景色が開けた。
神門村に着いたのだ。
あとは儀助の家を見つけるだけだが、道を聞こうにも村人が全く見当たらない。どうしたものか、と辺りを眺めまわしていると、古木に覆われた杜が目に入った。
――こいが、かの神門神社か。
鳥居の先の石段を見上げつつ、新太郎は儀助が昔、話していたことを思い起こした。
今から千年以上も前、戦に敗れ、国を追われた百済の人々がこの日向の地に流れ着いた。その中には国王父子もいたが、海路を舟で逃げる途中、嵐に襲われ、父と子は別々の浜に漂着し、離れて暮らすことになった。
――確か、父王のほうがここ辺で暮らして、こん神社はその父王を祀っちょる、と。
古い記憶を手繰り寄せていると、ふいに前方に人の影が見えた。
「もし」
振り返ったのは、身なりからして神官と思しき老人だった。
「ちと尋ねる。こん辺りに儀助ちゅう者がおろう。家までの道を教えてもらえんじゃろかい」
「儀助？」

神社内での位はわからないが、神官らしき人は怪訝な色を浮かべた。
「こん村の出の者で、ついこの間、何十年かぶりに帰ってきたち思うが。それがしは、岩木新太郎と申す」
「新太郎？」
今度は驚いたように目を瞠る。
「儀助の奉公先の主じゃった」
「ああ、そんげなこつなら、ああ」
何を考えているのかよくわからないが、すでに陽は暮れかけている。
「暗れなる前に着きたい」
「儀助ん家なら、川に沿って上って行きなるがいい」
「何か目印はあっと？」
「特に……。強いて言えば、家の近くに、栗の木が何本かあっとね」
「かたじけない」
礼もそこそこに辞すと、新太郎は先を急いだ。道はさらに険しくなり、すぐに人家も見あたらなくなった。
うっすらと出ていた下弦の月もいつしか叢雲にかき消され、みるみるうちに辺りは漆黒の闇に包まれた。また道に迷ったらかなわん、と思って歩いていると、後ろのほうで獣の鳴き声がした。近

くに野犬の群れでもいるのか。咄嗟に右手が左の腰に動いたが、今は抜く刀がない。
無我夢中で駆け出すと、足に何かが噛みついた。
「いてっ」
とっさに払った手にも、無数の棘のようなものが刺さった。振り払ったときに飛んだ軽いものはその後、まったく動かない。生き物ではないような気がして、そろそろと近づいて見ると、栗のいがだった。
――栗の木がある……。儀助の家は近い。
あたりを見渡すと、前方にかすかな明かりが目に入った。
――あん家じゃっ。
「儀助―っ」
たまらず走りながら叫ぶと、戸が開き、小さな影が現れた。
「儀助、儀助っ」
「よう来なった」
さして驚くこともなく、儀助はいつものように新太郎を迎え入れてくれた。
「儀助、わしは、わしは……」
「大丈夫、大丈夫」
その場にへたりこんだ新太郎の背を、骨と皮だけの手が優しく撫でた。

翌朝、目を覚ますと、儀助はすでに家の前の畑を耕していた。
昨夜、新太郎が差し出した餞別金を、儀助は受け取らなかった。
「ここじゃ、金は要りませんかい」
確かに、畑もあれば、山と川の幸にも恵まれている。食い物に困ることはないだろう。
――じゃけんど、こん家はひどか。
何十年も人が住んでいなかった家は、土壁が剥げ落ち、床もあちこち軋んでいる。
――そうじゃ、持ってきた金を村の大工に渡して、なんとかしてもらおう。
その考えを儀助に打ち明けると、また瞳に涙を浮かべて喜んでみせたが、その涙も乾かぬうちに、自分で大工道具を持ち出し、腐りかけた床板の張り替えを始めたのである。
呆れながらも、着物の裾をからげて働く儀助の姿を見るのは嬉しかった。儀助はこんな風に長年、新太郎の屋敷の手入れをしてくれた。その合間には、裏庭で芋や葱を作り、母の愚痴を聞き、幼い新太郎の遊びの相手もしてくれた。
――じゃから、こいからは、わしが老いた儀助を援けたい。けんど……。
竹刀なら道場で何万回も振ってきたが、鋸や鉋は触ったことすらない。
――まだ、鋤や鍬のほうがましじゃわ。
大工仕事は儀助に任せ、その間、儀助の代わりに畑の手入れをすることにした。こちらのほうは

なんとか進んでいくようで、新太郎は朝早くから陽が暮れるまで一途に励んだ。

初めて蒔いた青物が芽吹いた日、喜び勇んで、さらなる種蒔きに精を出していると、突然の夕立に襲われた。

急いで家に駆け込もうとしたとき、井戸っ端で何かが動いているのが見えた。

野犬か猪かと恐る恐る近づいた暗がりで、瞳と瞳があった瞬間、新太郎はぎょっとした。

井戸の脇に蹲っていたのは、旅姿の若い娘だった。

「誰だ」

新太郎の姿を見るなり、娘は逃げ出そうとしたが、ぬかるみに足をとられ、尻餅をついた。

「案ずな、危害は与えん、ほれ」

新太郎が差し出した右手を取ることなく、娘は立ち上がると、すみませぬ、と頭を下げて立ち去ろうとした。そのとき、何か喚きながら、儀助が駆け寄ってきた。

「くめ、くめじゃろっ」

儀助は娘の両腕をわし掴んだ。

「よう戻ってきた、よう」

顔を真っ赤にした儀助に体を強く揺すられ、娘はひっ、と声をあげた。

「わ、わたしは」

「ええ、何も言わんでええが。はよ家に入んない」
儀助は娘の肩を抱き、無理矢理、家に押し込むと、
「寒かったじゃろ、さ、火にあたりね。まっと焚くかい」
いそいそと薪を取りに行った。
「儀助を知っちょると？」
たまらず問いかけた新太郎の前で、娘は怯えながら首を横に振った。
「名はくめちいうけ？」
娘はまた首を横に振った。
やはり、儀助は何か勘違いしている。
「こんげなとこで何しちょる？　見たところ旅姿のようじゃが、親は？　親はどんげした？」
矢継ぎ早に問いかけると、大きな瞳のふちに涙がにじんだ。
「親はおりません。二人とも死にました」
「いや、でも、まさか一人で旅をしちょるわけじゃねえが」
「わたし、わたし……」
娘はわっと泣き崩れた。
「落ち着け、大丈夫じゃ」
娘は泣きながら、声を絞り出した。

「騙されて、人買いに売られて、でも、どうしても嫌で……、川を渡るとき、逃げました」
「逃げた？　どこん川で？」
「わかりません、見張りの隙を見て、走りました。いっぱい走って、走って……」
「というこつは……、追われちょるんけ？」
娘は泣きながら頷いた。
「何人、追手は何人だ」
「二人……」
「えらいこっちゃ」
今、ここに二人で乗り込まれても、丸腰の身では相手にならない。
薪を抱えて戻ってきた儀助に、思わず事の次第を打ち明けると、
「なんと」
大粒の涙がぽろぽろと頬を伝い流れた。
「苦労したんじゃな。じゃがもう、大丈夫じゃ。おとっさんがついちょる」
「おとっさんて……、儀助、何を言うちょる」
「おめえがおらんなったとき、神隠しに遭うた、と言われたが、わしは信じんかった。やはり、人さらいにさらわれたんか」
人買いに人さらい、おとっさんだの神隠しだの、わけがわからない。

「あんなあ、儀助、こん娘はくめちゅう名ではねえ。そいに今、追われちょる身ぞ」
正気に返って欲しい、と念じながら話してみたが、儀助は聞く耳を持たない。
「こうして家に戻ったんじゃ、何も心配要らん。おめえを誰にも渡さん。そいに、こん新太郎さまは剣の達人じゃかい、追手の二人や三人、あっちゅう間に蹴散らしてくるるわい」
「お、おい」
刀はもう持っていないのに何を言う、と思ったが、今、この娘を外へ放り出すわけにもいかない。
結局、その夜は娘を家に泊め、新太郎は納屋から引っ張り出してきた古い斧を抱え、まんじりともせずに朝を迎えた。

こうして、何故か奇妙な三人の暮らしが始まった。
儀助は毎朝、娘に、家から一歩も出るこっちゃならん、と言い聞かせる。娘は素直に儀助の言いつけを守り、夕方までに家の中を掃き清め、洗濯をし、飯を炊く。
「美味い、まこち美味いぞ、くめ」
喜んで飯を食べる儀助は、娘を人さらいに遭って生き別れた自分の娘と信じて疑っていない。
——なしてそんげな話を思いつくんじゃ。
娘はどう見ても十四か五、儀助の子というより孫といったほうがいい年頃だ。
「いっぺ食え、くめ」

儀助に促され、申し訳なさそうに箸をつける娘も娘だ。何故、私はくめではない、と言わないのだろう。全くわからない、儀助のことも娘のことも。

考えあぐねているうちに、頭に浮かんだのは、神門神社にいた神官の顔だ。何か知っているかもしれない、そう思うとたまらず、新太郎は神社に向かった。

「そんげなこつあったとね」

新太郎の話を聞いた神官は、ふっと吐息をついた。

「どっから話を始めたらええか……、儀助はのう、こん辺りの分限者の裔じゃった」

「御師さま、そいはその、百済の王族の末裔とか」

「流石にそこまで昔んこつはわからんけんど、郷士の血を引いちょるんでねえかな」

同じことは亡き母も言っていた。儀助には底知れんところがある、先祖は侍かもしれん、と。それに、新太郎が生まれたときも、新太郎さまという名の良かこつ、と、尋常ならざる喜び様だったという。

だから、母は安心して嫡男の養育を任せた。実際、儀助は新太郎も感心するほど、武家の言葉や作法に通じていた。

「儀助は若い時分に嫁を貰て、子も男と女、二人おった。くめちいうんは、そん女子の名じゃが。けんど、そん二人の子がある日突然、おらんごつなったが。村の衆も探したが、見つからんかった

かい、神隠しに遭うたと言われちょった」
「儀助にはまこち、くめっちゅう娘がおったんじゃな」
「儀助の嫁は悲しみのあまり死んでしもた。儀助が村を出たんは、そんすぐ後じゃった」
父に仕える前の儀助にそれほどまでに辛い過去があったと知って、新太郎は愕然とした。
「何年か経って、裏山ん穴、落とし穴んような穴から二人の骨が出てきたんじゃ。儀助も人伝に聞いちょると思うが、未だ受け容れちょらんか……」
ふいに家に飛び込んできた娘を、神隠しに遭った娘と思いたい儀助の気持ちはわかった。しかし、くめと呼ばれている娘のほうが何を考えているのかわからない。未だ親や生まれ故郷の話もしなければ、本当の名すら明かさないのだ。そのことを口にすると、
「そん娘は今、追われちょるかい、何も言えんとよ。そいに、もしかしたら、そん娘、生き直したいんじゃねえけ」
意外な言葉が返ってきた。
「生き直す?」
「人買いに売られるような身なら、さぞ辛いもんを背負っちょるわ」
「じゃけんど、御師さま、こんげな嘘がいつまでもとおるとは思えんとね。村の衆とてすぐ気付くじゃろ」
「なあに、今もう、そんげ大昔のこつ覚えちょるんは、わしと川っ端の婆さんくらいじゃ。そいに

儀助も耄碌しちょるかどうか、わからんちゃ。昔から、あいは相当の狸じゃき」
御師さまはかっかっと笑った。
「そんじゃ、実の娘じゃねえと知った上で、家に置いちょると?」
「わからんね。そいから、また余計なこつ言うと……」
御師さまは少し考えてから、口を開いた。
「儀助ん子の、男んほうは新太っちゅうた。じゃかい、わしはお前さまが初めて来なったとき、ちっとたまげたんじゃわ」
予期せぬ言葉に、新太郎は脳天を打たれた。
動揺を気取られないように辞したが、御師さまの言葉は頭の中を駆けめぐって離れない。
――じゃかい、儀助は、わしをあれほどまでに慈しみ育てた。喪った子の生まれ変わりと思ったのかもしれん。そして、わしも……。
儀助の元にやって来たのは、ただ単に餞別を渡したかったからではない。
――会いたかったんじゃ、どうしても。会って話がしたかった、父とも思っちょるかい……。
胸底に押し込んでいた本心にいきあたって、新太郎は泣いた。
涙をぬぐい、家に戻ると、儀助にくめと呼ばれる娘が、井戸っ端で栗を洗っていた。
「家から出てはいかんが」
声をかけると、娘はごめんなさい、と下を向いた。

「じゃけんど、もうええか」
すでに十日ほど経っている。人買いのほうもそろそろ諦める頃だろう。万一、乗り込まれても、儀助の娘、くめと言い張れるし、いざというときは、御師さまにも力を貸してもらおう。
「もう栗も終わりじゃね」
「はい」
栗の実を見つめた横顔は寂しげだった。
「名は、まことの名は何ちゅうと？」
思わず問いかけると、娘は俯いたまま、梅乃と申します、と言った。
「松竹梅の梅け？」
「はい」
「梅ね。あ、梅といえば、あそこに梅の木が何本かあっとよ。ここは栗も梅もいっぺ獲れるらしい」
「くり、うめ、くめ……」
「なんじゃ、そいは」
思わず吹きだしてしまった。他人の言葉に笑ったのは久しぶりだった。
二人でひとしきり笑ったあと、
「わしはお前さんをどう呼べばいい、梅乃かくめか」
問いかけると、娘は少し首を傾げてから、くめで、と答えた。

「今までの名に、未練はないんけ？」
「ございませぬ」
自らに言い聞かせるような答え方だった。
やはり、御師さまの言うとおり、生き直したいのかもしれない。
二人の笑い声を聞いたのか、家から儀助が出てきた。栗を洗うくめを見て、おめえは昔から栗拾いが上手かったのう、と嬉しそうに目を細める。
――儀助のほうは御師さまの見立てとは違う。くめを自分の娘と信じて疑っちょらん。
でももう、二人がそれでいいのなら、いいのかもしれない。微笑み合っている二人を見ていたら、そんな気がしてきた。

それからというもの、新太郎はくめと共に、山菜やきのこを採りに出歩くようになった。
くめは儀助も舌を巻くほど家事が巧く、朝から晩までくるくるとよく働く。口数は少ないが、体を動かすことが苦にならない性質なのだろう。掃除や飯炊きの合間には、まめに外へ出て、食い物を拾い集めてくる。
新太郎が褒めると、また同じところに行けるかどうか……、と不安げなそぶりを見せたから、じゃったら、こいに描きね、と神門村に来たときの地図を手渡した。
くめは喜んで、道を表す何本かの線と小さなきのこの絵を描き入れた。

「そんげにすぐ忘れねえじゃろ」
「いえ、わたしが使うのではなく」
「えっ、くめが使うんじゃねえとすっと……」
儀助け、と言おうとして、新太郎は口を閉ざした。くめは儀助のことを決して「おとっさん」とは呼ばないが、常に気遣っている。と同時に、儀助が自分のことを娘ではない、と気づいたときのことも考えている。そのときは、おそらく出て行くつもりなのだろう。
儀助はそんげな薄情者じゃねえ、と言いたいが、そうなったときの儀助の気持ちは正直、わからない。
――先んこつは何でんわからんち。
己自身とて、これからの身の振り方について、はっきりとした答えを出していない。儀助の家の修繕が進んでいないのをいいことに居続けてはいるが、城下に戻る日のこと、戻ってから始める商いのことも考えなければならない。
「ここには桜の木が何本もありました。それから、ここには美しい滝があって、その横には変わった形の岩が」
くめは食い物以外の絵も描いている。どれも新太郎が見ていたようで、実は見ていなかったものばかりだ。
――わしの心は今、ここにおらんかい、物事がよう見えんのじゃ。ここには豊かなもんがいっぺある、そいは感じちょるのに……。

くめが楽しそうに描き込んでいる地図を見て、新太郎は暗鬱な気持ちになった。

野を焼く炎が暗闇に浮かび上がる。

「こいが見たかったんじゃろ」

辺りにもうもうと漂う煙にむせながら新太郎が問うと、くめは小さく頷いた。

この地に古くから伝わる「師走祭り」という神事。神門神社の祭神となった百済の禎嘉王と、その息子で比木神社の祭神となった福智王の御霊は一年に一度、師走の時期に再会する。

村人は、二十三里ほども離れた比木の地から運ばれる福智王のご神体を迎え入れるために、盛大に火を焚き上げる。

「福智王さまはこの明かりを見て、御父上の許に着いたと思われるのですね」

くめが独り言のように呟く。

「他に目印になりそうなもんはねえき」

新太郎の脳裏にふと、儀助の後を追って、この地に辿り着いた日、ようやく小さな家の明かりを見つけたときの記憶が蘇った。

あれからもう二月近く経つ。

くめは日々表情が明るくなり、新太郎と話すことも多くなった。つい最近、神門神社に行きたい、と言うから、連れて行ったら、御師さまから師走祭りの話を聞き、どうしても迎え火を焚くところ

が見たい、と言い出した。
くめは幼くして亡くなった儀助の息子、新太のことを知らない。父と息子の御霊が会う神事について、儀助は複雑な思いを抱いているのではないか、そもそも、辛く悲しい出来事があったこの地にどうして帰ろうなどと思ったのか、新太郎は未だにわからない。
案の定、儀助は一緒に行くのをしぶったが、くめがせがむと、黙ってついてきた。
「こりゃ、儀助さん、久しぶりじゃのう」
御師さまに声をかけられ、儀助は少し困ったような表情を浮かべた。
「おささんも来ちょる。あそこに」
御師さまがおーい、と声をかけると、腰の曲がった老婆が近づいてきた。
「おささん、この間、話した儀助さんじゃ」
「こりゃ、たまげた。儀助さんが帰ったげなとは聞いちょったが、まこちの話じゃったね」
皺だらけの頬にまた皺を増やして、老婆は笑った。
ああ、この人が、御師さまの言っていた川っ端の婆さんか、と思っていると、婆さんはくめと新太郎のほうへ顔を向けた。
「おくめちゃんも無事に戻って良かったが。そいに、こんげ立派な婿どんも連れてきて」
いや、それがしはそのような……、と言うのも聞かず、婆さんはくめの手をとって、ちっと腰をかけるところはねえけ、と、場を離れていった。

ったく、と舌打ちすると、儀助が耳元に口を寄せて言った。
「くめをどんげ思われっと？」
「どんげ？」
「嫁として、いかがかと」
「はあ？」
開いた口が塞がらない。儀助まで、何おかしなことを言うのだ。
「あんなあ、儀助、くめはまだ子どもじゃぞ。そいに今のわしは嫁取りどころではねえ」
「くめは幼く見えても、おそらく十六か十七。そいから、どう見ても侍の娘ですわ」
「えっ」
「小さい時分の躾は体に染みついちょるかい」
いや、今までさんざん自分の娘だと言っていたではないか。
「今頃、何を言う」
「いや、くめを初めて見たときは、一瞬、死んだ娘が帰ってきたち思うたが」
後ろ頭に手を当てて、儀助ははっはっと笑った。
「おい」
くめの生い立ちまで見抜いた上で、芝居を打っていたというのか。やはり、御師さまの言うとおり、儀助は狸だ。

が、新太郎もくめに関しては、思い当たるふしがあった。言葉遣いや居住まい、特に、朝晩の挨拶のとき、その座って両手をつく仕草がどことなく亡き母を思わせるのだ。

侍の娘がなして……と言いかけて、新太郎は口をつぐんだ。侍である己も、御一新の後は家も禄も失い、こうして神門村で鍬を振っている。くめとて親と死別し、人買いに売られるまでには思い出すのも辛い風雪があったのだろう。やはり本人が話すまでは、無理にあれこれ聞き出すようなことはすまい、そう思ったとき、後ろから声をかけられた。

「娘と婿どんと一緒で、まこち儀助さんは幸せなこっちゃ」

知らぬ間に、おさき婆さんは戻っていた。

婆さんも本当はすべてわかった上で言っているのだろう。儀助が狸なら、婆さんは狐だ。

「うんにゃ、おさきさん、そうじゃねえ、まだ」

まだ、とはどういう意味だ。儀助を睨むと、

「新太郎さまは、考えてばかりで、なかなか決むるこつはできんお人じゃ」

さらりと言ってくれた。

悔しいが、当たっている。未だこの先の暮らしについて、何ひとつ決めてはいないのだ。

「じゃけんど、新太郎さまは最後に必ず望む道を選ばれるとよ」

――望む道……。

そんなことは考えてもいなかった。今までは、城下に帰って商いでもせねば、と思い込んでいた。

でも、それは心から望むことではない。だから、考えることからも逃げていたのだ。
「先んこつはようわからんち」
思わず弱音を吐くと、
「わからんかい、今と、今望むこつを大事にせんと。くめにもそんげな話をしましたわ」
遠くを見つめたまま、儀助は言った。
「今と、今望むこつちいうんは」
問いかけたつもりだったが、儀助は答えなかった。
折からの強風で、炎が一段と高く舞い上がり、人々の間から、おう、というどよめきが起こった。
炎の向こうで、くめの姿が揺らめいている。
くめの言うように、福智王の御霊はこの明かりに気付いただろうか、一年ぶりの父との再会を喜んでいるだろうか。ちょうど、己が儀助の家を見つけたときのように。
「わしが今望んどるんは……」
この地で始まった、まさに今の暮らしだ。これからも儀助とともに畑を耕し、もっと芋や葱を作りたい。山に囲まれたこの地で、儀助と、土とともに生きていきたい。ようやく声をあげた本心を話そうとしたが、口をついて出た言葉は、
「わしはここにおってもええんけ？」
という、間の抜けたものだった。

「くめにも同じこつ聞かれたかい、言いましたがのう」
満面に笑みを浮かべて、儀助は答えた。
「好きなだけ、えかったら、ずっとおってくだい」
――ああ、この人はやはり……、父なのだ。
己のことを誰よりもよくわかっている。
大して世間を知らない上に、商才のかけらもなければ、商いなどできるわけがない。無理に踏み出したとしても、間違いなく失敗する。有り金すべてを失い、路頭に迷うかもしれない。いや、踏み出す勇気すらなく、ずっと迷い続けている恐れすらある。まだ野良仕事のほうが性に合っていそうか。それなら、一度試してみるのもいい。諸々見越した儀助は、神門村に帰り、主のために逃げ場を作っておかねば、そう考えた。
だから、あんな子どもの落書きのような地図を残して、屋敷を出て行ったのだ。
その地図は今、くめの手でかなりあれこれ描き込まれている。

佳作

「星読みの国」

帯刀古禄

夜の色は黒いと申すか。

はは、こわいのであろう。闇が。

ならば一度、目を閉じてみるとよい。
そう、しばらくぎゅっと、固く瞑って……。

よいか。
上を向いて、ゆっくり、ゆっくりと目を開けてみよ。

はは、はは。
そうだ。

宙はこんなにも明るいのだよ。
あの星々が、いつも夜を照らしておるのだから。

そして、すべての運命を星は知っているのだよ。

どれ、ごらん。

あれは、角宿のすぼし。

あれは、亢宿のあみぼし。

あれは、氐宿の……。

一

「もう一度初めから。コサメは兄(え)と弟(と)の違いによく気を付けるのだよ」

爺様の教えに従って、十干の暗唱を最初から繰り返してみる。

きのえ・きのと・ひのえ・ひのと・つちのえ・つちのと・かのえ・かのと・みずのえ・みずのと。

覚えてしまえばかんたん。

木・火・土・金・水の五行を、それぞれ陽である兄(え)と陰である弟(と)に分けただけのことだ。

でも、コサメはなかなかこれが覚えられない。

ね・うし・とら……と歌うように続く十二支なら、すぐ諳んじたのだけど。

「きのえ、ひのえ…ひのえ？　つち、つひ…のと？」

「はは、〈え〉と〈え〉が続くことはないのだよ。〈え〉の次は必ず〈と〉。交互にくるから〈えと〉というのだ」

爺様はコサメの頭をやさしく撫でて諭し、おれにも目を細めた。

「キジトはもう十干まで覚えたのだね。では、次は十二直の配当を教えよう」

ジュウニチョク。

なんだかかっこいい響きだ。

思わず笑みをこぼしたおれを見て、爺様はもっともっと目を細めた。

おれたちに教えながら爺様がつくっているのは、来年の「暦」だ。

お月さまが満ちはじめては欠けきるまでがひと月、これが二十九日か三十日の間。

一年は十二か月だけれど、お日さまが高くなったり低くなったりしながら動いていく四季は、あとほんの少し長い。

だから月と日の動きをうまく組み合わせると、一年分の暦がわかるのだった。

どうして来年の分までつくれるのかというと、爺様いわく一年という周期はある決まりごとのもとに繰り返しているからで、それを読むのが暦づくりの技なのだという。

「朔」の日の置き方とか「二十四節気」の配当とか、あるいは「閏年」がどう入るのかとか、むずかしいことばかりだ。

でもおれは、コサメといっしょにこうして爺様から暦づくりを習うのが好きだった。
本当をいうと暦は、ヤマトの〈れきはかせ〉と呼ばれるお役人だけがつくることを許されたものらしい。
〈れきはかせ〉がつくった暦を書き写したものが国々に配られ、そうして配られた暦をまたそれぞれの郡や郷ごとに書き写していく。
暦には作物の種をまく時期や大風が吹くころ、霜がおりはじめる時など季節のうつろいが記されているので、田畑の仕事にはなくてはならないものだった。
それにものごとを起こすのにいい日やそうでない日まで書かれていて、郷の人たちも毎日それを確かめてから仕事に出るのがならわしとなっている。
そんな大事な暦を、爺様はつくれるのだ。

「お前たちはな、百済の末裔なのだよ」

濁り酒なんかでほろ酔いの上機嫌になると、爺様はことあるごとにおれとコサメにそういった。
百年も前になくなった、海の向こうの国。
かつて戦を逃れて、百済という国から王たちがこの土地へと流れついた。
その子孫がおれたちなのだという。

この郷の人はみんなその血を引いているそうで、爺様みたいなお年寄り方は「くだら」ではなく「クタラ」というのが常だった。
その百済が、最初にこの国へと暦をもたらしたのだ。
爺様は酔うといつもいつも、誇らしげにおれとコサメにこの話をする。

だからこそ、わしらには暦を組む資格があるのだ。
この技を、伝えておくれ。クタラの子らよ。

捨て子だったおれたちを育てて、必ずそういってくれる爺様のことが、おれもコサメも大好きだった。

暦には季節を知るという大きな役割があったけど、そのためには星の動きをいつもよく見ておくことが大切だと爺様はいった。
そして、星には人や国の運命を知らせる力があり、正しくその兆しを読み取る技が暦づくりには含まれているのだとも。
そしてヤマトには、そんな星の知らせを読む〈おんみょうじ〉というお役人がいるのだそうだ。
星は季節によってその見え方が違う。
でも、いくつかの並びはいつも一緒で、やはりそれが一年を通じてぐるぐると循環していること

を爺様は教えてくれた。
ひときわ明るく大きな星には特に注意が必要で、これが他の星に近づいたり流れ星が通り過ぎたりすると、よくないことが起きるといわれていた。
コサメは暦の仕組みについてはあんまり覚えがよくなかったけど、星の動きから吉凶を読み取ることに関しては、天性としかいいようのない力を備えていた。
どの星とどの星との位置関係がといった理屈の話ではなく、直感的に星々からの啓示を受け取れるのだろう。

「爺様、雨が降って川があふれるね」

コサメがそういえば、どんなに晴れの日が続いていても必ずほどなく大雨が降ったし、

「もうすぐ赤ちゃんがくるよ！」

といえば、半月も先だと思われていた近所のお産が急に始まるといったことがしばしば起こった。
コサメには、そんな星読みの力が宿っていたのだ。
おれはうらやましいような少しくやしいような、まぶしい思いを隠すように暦づくりの仕組みを

覚えることに打ち込んでいった。
本当のことをいうと、星が運命を教えてくれるということが何だか薄気味わるく、それに夜の暗さがいつまでもちょっと怖かったのもある。
コサメには、ずっとないしょにしたままだけど。

二

おれとコサメは十二になった。
もっともおれたちがここに来たのはすごく小さい時だったから、本当の年齢なんかはわからない。
でも爺様は、十二支がひと巡りした記念の年だといって、お祝いをしてくれた。
そして恭しく一巻の書を取り出し、おれたちの前に広げた。
木簡を丁寧に綴り合せた巻本で、それは次の年の暦だった。
ただし、見慣れたものとは少し雰囲気が異なっている。
「これは、クタラの暦だ。わしの師も、そのまた師も、代々これを組み続けてきた」
おれとコサメは、どちらともなく顔を見合わせた。

爺様たちは、百年も前に滅びた国の暦をつくり続けてきたというのか。
なんと……、なんということだろう。
「暦があり続ける限り、その時は止まらぬ。クタラは、ここにこそある」

厳かに言い放つその様子は、おれにはいつも見慣れた爺様とは違う人のように見えた。
それはコサメも、同じことだったのではないだろうか。
かつてこの国に暦法をもたらしたという、暦博士と呼ばれた偉大な賢者。
百済の暦を、時を、脈々と紡ぎ続ける爺様は、まさしくそんな威風をまとっていた。
おれとコサメは、木簡に触れないよう細心の注意を払いながら、そっと暦の内容を目で追っていった。
六十干支の循環は変わらないようだが、初めて見るような吉凶日がある。
「天李」に「絶紀」、これまで習ってきた暦には記されていないものだ。
二十四節気の奇数番にあたる節気とその前日で、同じ十二直が連続するのもいまの配当法と同じだ。

建（たつ）・除（のぞく）・満（みつ）・平（たいら）・定（さだむ）・執（とる）・破（やぶる）・危（あやぶ）・成（なる）・納（おさむ）・開（ひらく）・閉（とづ）。

毎日のように、郷の人たちも気にしている吉凶の割り振りだ。
屋建てや倉入れなどには、特にこの十二直の良し悪しが注意されている。

百年以上前の百済でもこれが使われていたことに、不思議と胸の奥が熱くなるような思いが込み上げてきた。

「爺様。でも、ここ……」

おれとコサメが同時に指し示したところに、爺様は大きくうなずいた。違和感があったのは、月の初めを表す「朔」の日取りだ。

おれたちがいつもつくっている暦は、来年の分はすでに出来あがっている。

それに記したはずの朔の予想日とは、明らかに異なる部分があるのだ。これでは、「ついたち」が実際の新月の日とはずれてくるのではないか。

「コサメもキジトも、よく気が付いた。そう。このクタラの暦は、いまわしらが使っている〈儀鳳暦〉とは違う方法で編まれているのだ。二人のいう通り、朔の置き方が異なるので新月とは必ずしも一致しない。これを、〈元嘉暦〉という」

――げんかれき。

おれは心の中で、何度も何度も繰り返した。
げんかれき。げんかれき。げんかれき。

かつて唐国でつくられ、七十年とは使われなかった暦法。
百済を通してこの国へともたらされた、最初の暦。

爺様はそういった。
それは、もうこの世でこれをつくれるのは、爺様ただ一人だということを意味している。

「キジトとコサメ。おまえたち二人が、この暦を受け継ぐのだ。これがある限り百済は滅びぬ。時を、つないでおくれ。クタラの子らよ」

そして爺様はおれとコサメに真新しい衣を着せ、郷でいちばんの祠へとおもむいた。
ここにはいつの頃からか、この郷に流れ着いた百済の王が祀られているのだと小さい頃から聞かされている。
爺様は祠の前にひざまずき、何度も頭を垂れてそれはそれは丁寧な礼拝を行った。
神や仏に手を合わせるのはいつものことだったけど、ここまで礼を尽くした作法をおれたちに見

せるのは、初めてのことだった。
そして爺様は祠の扉を開け、その下にしまってあった箱のなかに百済の暦を大切に捧げた。
途中から祈りの口上は聞き取れないものとなり、後になって、ああ、あれはクタラの言葉だったんだと思い至った。
おれも、コサメも、震えるような感動と使命感のようなものに満たされていたのだと思う。
ふと視線をやると、祈る爺様の姿を身じろぎもせず見つめるコサメの横顔が目に入った。
小さい頃は十干を覚えられず、爺様を手こずらせてはおれを呆れさせていたコサメ。
おれが言うのもおかしなことかもしれないけど、コサメは、すごく大人になっていた。

三

爺様は暦のつくり方だけではなく、いろんな昔ばなしもおれたちに教えてくれた。
百済の古い出来事ももちろんだけど、唐国の古い物語には星にまつわるものが多く、とってもおもしろい。おれもコサメも、何度もねだって聞かせてもらったものだった。
特におれたちのお気に入りは、「北斗の星と南斗の星」と呼んでいたお話だ。
そのあらましはこうだ。

あるとき高名な占術師が、少年の顔相からその寿命がとても短いことを宣告する。驚いて助けを求める少年の父親に、占術師はこのように知恵を授けた。

――刈り入れの終わった麦畑をまっすぐ南にゆくと、そこに大きな桑の木がある。樹下で二人の男が碁を打っているので、酒と干し肉を黙ってすすめるのだ。何を聞かれても、決してしゃべってはいけない。そうするうちに、その二人の男が坊やの寿命をなんとかしてくれるであろう――。

占術師の言いつけどおりに酒と干し肉を持って南へ向かった少年は、はたして大きな桑の木のもとへ至った。

その下では確かに二人の男が夢中で碁を打っており、少年は用意した酒と干し肉を捧げ続ける。男たちは注がれた酒を飲み、出された肉を口にし、碁の勝負がついたところで初めて少年の存在に気が付いた。

「そなたは何だ！　なぜこのようなところにいるのだ」

北側に座っている強面の男がそう怒鳴るのを、南側の優しげな男がなだめてこう言った。

「この子は私たちに、寿命を延ばしてもらおうとして来たのでしょうよ。どれ、帳面を見せてくださいますか」

北側の男はどこからか一巻の帳面を取り出し、南側の男はそれをあらためると顔を曇らせた。

「この子、とても短命ですね」

それを一瞥した北側の男も、眉間にしわを寄せる。

「十九、か。しかしな……。捧げられた酒も肉も、口にしてしまったのではな」

「そうですね。では、このように」

南側の男は帳面にさっと筆を走らせると、〈十九〉を〈九十〉と書き換えた。

この二人は実は死を司る北斗星と、生を操る南斗星の神々だったのだ。

こうして延命の願いを聞き届けられた少年は、九十年の天寿を全うしたのだという――。

「星神にはな、こうして人の生き死にを支配する力があるのだよ」

爺様は話の最後にはいつもこう締めくくり、おれもコサメもなんだか神妙な気持ちになるのだった。

永劫の時を廻ってきたであろう星々の輝き。人知を超えた神秘の法則を解き明かしていくことが、〈星読み〉の務めなのだと爺様はいう。

暦を組むということは、その動きを目に見える形にする試みにほかならない。

爺様と、おれと、コサメは、いつも並んで夜空を見上げていた。

四

爺様が死んだのは、おれとコサメが十三になったばかりの時だった。

来年のクタラの暦を奉納し終えた翌朝のことで、実に穏やかな顔で召されていた。

思えば、爺様は自らの天命を正確に予知していたのだろう。そういえば昨夜は普段めったに飲まない澄酒を一献だけ、ゆっくりゆっくり傾けていた。

暦づくりの技はすべておれとコサメに伝えたこと、クタラの暦を代々守ってほしいことを何度も

言い置き、床に就いたのだった。
そして爺様の遺骸は、あらかじめ真新しい白衣をまとっていた。
昨夜のあの時が、お別れの儀式だったのだ。
爺様との突然の別れが、悲しくて悲しくて取り乱したおれとは対照的に、その時のコサメはとても冷静に見えた。
郷長や寺にこのことを伝えに行ってくれたのもコサメだったし、今年の暦と照らし合わせて弔いに避けるべき日時を確かめたのもコサメだった。
おれは何もできないまま、何もしないまま、郷の人たちとコサメが爺様の葬儀の段取りを整えてくれるのをただ茫然と眺めていた。
コサメも、しばらく前から爺様の寿命には気付いていたのだと、後になって思い至った。
いつものように夜空の星を眺めているうちに、あっ、と小さく叫んでうずくまってしまったことがあったのだ。
どうしたのかと聞いても、首を横に振るばかりで応えはなかった。
コサメはあの時、星からの知らせを読み取ったのだ。
何もわからなかったおれは、事態を受け入れられずに今こうして呆けているだけだ。
やがて郷の人たちが、次々にこの家を訪れるようになった。
見る間に祭壇が整えられ、酒や干し肉などの供物が集まった。

郷の人たちは代わる代わる声をかけてくれたはずだけど、ただ眠っているだけのような爺様の傍らのおれには、何も届かなかった。

気が付くと、いつの間にか夕の陽が射し込んでいた。
ふと見やると、コサメが何かを一括りにして包んでいる。
目で追うと、土師器の酒瓶と干し肉の束が見えた。
それらを丹念に包んで背に負ったコサメは、決然と立ち上がるとそのまま勢いよく家を飛び出していった。
ぼんやりとそれを見送った直後、おれは急速に正気に戻った。

こんな日が沈む時に、どこへ？
いや、違う！　違う！

おれは数舜遅れて、猛然とコサメの後を追いかけた。

あの細い身体のどこにこんな力があったのかと思うほど、コサメの足は止まらなかった。
何度も何度も後ろから呼び止めたけれども一度も振り返ることはなく、しゃくり上げる声だけが

風に吹き流されていく。
泣きながらひたすらに走り続けるコサメを、おれもいつの間にか泣きながら追い続けた。
おれたち二人は、一緒になってまっすぐ南を目指していた。

どれくらい走り続けたのだろう。
とっぷりと日は暮れ、足元はもう道ですらない。
もうろうとする意識のまま枯れた藪をかき分けているうち、ふいに目の前の視界が開けた。
谷のような暗く深い切れ込みを隔てて、小高い丘がそびえている。
その頂には一本の大きな樹が根を下ろしており、樹下にはうっすらと二つの灯がともっている。

「星神さま！」

コサメが叫んだ。

「北斗さま、南斗さま！　お願い、爺様を――」

そう叫んで一歩踏み出したコサメが、ぐらりと上体を傾けた。

足元の礫が砂のように崩れて、谷底へと飲み込まれようとしている。
おれは必死でコサメに取りすがったが、そのまま一緒に深い深い奈落へと放り出された。
落ちていく視界の端に、あの大きな樹の根元で二つの光が瞬いたように見えた。

おれが目を覚ましたのは、いつものあの家だった。
傍らにはコサメも横たわっており、ほどなく気が付いて不思議そうな顔をしていた。
夕刻に飛び出していったおれたちを、郷の誰かが心配して追ってきてくれていたのだ。
おれたち二人は、ここから南の方の川岸で倒れていたそうで、郷の人がここまで背負って連れ帰ってくれたという。
けれどそこには、おれたちが話したような丘も、大きな樹もなかったそうだ。
あの時見たものが何だったのか、本当のところは誰にもわからない。
でも、おれとコサメは星神さまに会うことはできなかった。
それだけは確かなことで、天寿をまっとうした爺様に、おれたちはようやくお別れを告げたのだった。

五

それからおれとコサメは、二人で暦をつくりはじめた。
爺様がそうしていたように、麦を蒔くのにちょうどいい頃や、大風に注意すべき時季などを郷の人たちに示した。
コサメはますます星読みの力が冴え、いつしか巫女のように頼りにされるようになっていた。
こんな暮らしが当たり前のように続くのだと思っているうち、おれたちは十五になった。
そして、唐突にコサメの縁談がまとまったのだった。

唐突、と思っていたのはもしかするとおれだけだったのかもしれない。
コサメの噂は近隣の里にもよく聞こえ、いつしか彼女を妻に望む者が訪れるようになっていたのだ。
おれたちの郷では、この土地に流れ着いたという百済王を祀っているが、その王子を祀る郷もあった。
ここから歩きで三日も四日もかかるような遠方にあり、年に一度、師走の頃にそこの人たちがやってきて共に祭りを行う習わしがあった。
爺様は、祭りの折に王子にも奉納するために百済の暦をもう一巻つくり、その郷の人たちに託していたのだった。
おれたちももちろんその風習を受け継いでいたので、そんな時に誰かがコサメを見初めたのだろう。
彼女を妻に望んだのは、そんな百済王子を祀る郷の若者だったという。

彼女はあまりにも落ち着き払っていて、まるでこの縁談があらかじめ決まっていたことだったかのようですらある。

コサメは、自分が違う郷に嫁ぐことすらも、星からの知らせでわかっていたというのだろうか。

おれは、何一つわかってはいなかった。おれには、星は何も教えてはくれなかった。

それが当然のことのように婚儀の準備は進み、瞬く間にコサメが嫁ぐ日がやってきた。

百済王子の郷までの輿入れに、おれは家族としてコサメの傍らに付き添った。

おれもコサメも何もしゃべらなかったけど、これまで「おめでとう」の一言すらかけていないことにようやく思い至っていた。

時おりコサメにちらりと目を向けては言い淀み、また黙ってしまうということを繰り返す。

何度目か何十度目かわからないけど、ふいにコサメと目が合った。

彼女はふっと目を細めると、子どもの頃と同じような屈託のない笑顔をおれに向けた。

「コサメ」

声をかけたおれに、ん？　と目だけで続きを問いかける。

「おめでとう」

遅すぎる祝福にはにかんで俯くコサメは、本当にきれいだった。

六

一人になったおれは、暦をつくりながら今まで思い至りもしなかったことを考えるようになった。
コサメが嫁いでいった遠い郷。でも、おれたちの祖先が暮らしたという百済はもっともっと遠く、ここから北の海をこえた外つ国だという。
この郷を治める大元であるヤマトも、やはり海をこえてずうっと東の内陸にあるそうだ。
自分が今いる場所を誰かに伝えるとして、おれは正しくそれを教えられるだろうか。
そもそも、おれにとってこの世の出来事はほとんどこの郷のことで、爺様とコサメと共に暮らした時間でのことだ。
おれは、おれのいるここを自分自身に説明できないでいることが、たまらなくもどかしかった。
百済でもヤマトでも、そしてコサメの郷でも、見上げる空と星々が同じであろうこととは大違いだ。
おれは一人で夜空を見上げては、星の知らせに耳を澄まし続けた。
師走の祭りの時季がやってきた。

コサメが嫁いでから初めての祭りで、彼女も百済王子の郷の一団に加わって帰ってきたのだ。
嫁ぎ先でも、コサメは自身で暦をつくっていた。
自分が育った家に戻ってきた彼女は、さっそくおれのつくった暦と突き合わせて、それぞれに間違いがないかを確かめた。
おれたちがつくった暦は、どちらも寸分たがわぬ仕上がりだった。
百済の暦については、おれが主に組んだものをコサメが最後に目を通し、疑問点や不明な点をその場で指摘して完成させるという方法をとることにした。
二人の暦がぴったり合って、百済の暦にもお墨付きが出て、おれたちはようやく顔を見合わせて笑った。
ひさしぶりの再会だったのに何を話していいのやらわからず、暦のことだけがおれたちをつないでいた。
おれは、年に一度のコサメの郷帰りを、心待ちにするようになった。

いつから始まったことかはわからないけれど、祭りが終わって二つの郷の者が別れるとき、おもしろい風習があった。
お互いの顔に、墨を塗りたくるのだ。
悲しい顔を見せず、笑って再会を約するという願いが込められたものだという。

子どもの頃はそんな意味はどうでもよく、ただおもしろがって誰かれ構わずに顔に墨を塗っては笑い転げたものだった。

もちろん、同じ郷どころか同じ家に住んでいたおれとコサメも、必要もないのに互いに墨を塗ってはいつまでも笑っていた。

人の妻となり、違う郷の人間になったコサメは、かつてのように遠慮なくおれに墨を塗ることはなくなった。

でも、ほんの少しだけ墨を指先にとり、申し訳程度に髭のようなものをおれに描いて、ようやくあの日のような笑顔をみせるのだった。

おれはなぜかなかなかコサメの顔に触れられず、通りかかった誰かがかわりに墨を塗ってしまった。

安心したような、少し残念なような気持ちでおれも笑って、来年も会おうと約束するのだった。

そうして二年、三年と月日が経っていった。

一年に一度だけ会えるコサメは、あまり幸せそうではなかった。

年々やせていくようで、いつの間にかおれの記憶の中にある彼女の姿とは、随分と変わっていってしまったようだった。

おれたちが十八になった師走の祭りのとき、コサメは自分の育った家で倒れた。

例年のようにお互いの組んだ暦を照合していたときのことで、この年は初めてそれぞれの割り出

した百済の吉凶日が異なっていた。
祭りの間、コサメは臥せっていた。
百済王子の郷の人たちが帰る段になっても彼女の容態はよくならず、回復次第おれが送り届けることを約してそのまま床に就かせることにした。
祭りの最後の儀式を済ませ、帰っていく人たちを見送ったおれは、わき目もふらずコサメの元に駆け戻った。もう、間もなく陽も沈むころだ。
家に戻ると彼女は、うつ伏せになったまま筆を走らせ、木簡に何やら書きつけていた。

「コサメ、寝ていないと」
「だいじょうぶよ…。とても気分がいいの」

すっかり頬がこけて青白くなった顔で、コサメはほのかに笑った。
何の病なのか、明らかに重篤な状態だ。
そんな苦しい病床の中、彼女が書いていたのは暦の吉凶日に関することのようだった。

「これで、正しい暦注になったと思うわ。二人とも……、閏年の差を、見落としていたのね」
「閏……。そうか、おれたちもとんだ未熟者だ」

おれたちは笑って、コサメが正した暦の木簡を一緒に眺めた。

「ねえ、キジト」

おれを見上げて名を呼んだコサメの顔が、ふいに子どもの頃の彼女に見えた。

「爺様が亡くなったとき、一緒に星神さまのところに行ったのを覚えてる…？」

ああ。心の奥底にしまった思い出だけど、片時も忘れたことはない。

「わたしね。あの時に、願いが届かなかったときに……。ああ、クタラは滅びたんだって思ったの」

なんだか変なこと言ってるね。

そう言って笑った彼女の目からは、一筋の涙が流れていた。

「星も暦も、いろんなことを教えてくれるけど、それがすべてではないわ。変えられない運命もあ

るけど、自分で自分のこれからを選ぶことだってできる……。クタラの暦も大切かもしれないけど……キジトには、キジトのこれからを、生きてほしい……。過去に……とらわれずに……」

ふっ、とコサメの身体が力を失った。
おれがとっさに抱きとめた彼女は、驚くほど軽かった。
うっすらと開かれた目が、枕元に視線をさまよわせる。
細い細い手を伸ばし、その指先に墨を含ませた。
震えながら、すべての力を振り絞るようにして、おれの上唇に指をすべらせる。

「笑って」

ほのかに口元をほころばせてそう言うと、コサメはゆっくりと目を閉じ、そして動かなくなった。
何度も何度もその名を呼んだけど、もうあの笑顔で応じてくれることはなかった。
おれは彼女の身体を床に静かに横たえ、枕元の木簡を手にした。
コサメが書き直した暦注の数々が、墨痕も鮮やかに記されている。
おれはそれを固く握りしめると、勢いよく立ち上がって厨へと駆け込んだ。
酒の瓶を引き出した。

干し肉の束を掴んだ。
おれはそのまま、全速力で真南へと走り出した。

七

郷のはずれを過ぎ、谷を過ぎ、あの日おれとコサメが倒れていたという川を過ぎてさらに走った。
とめどなく溢れる涙も、喉の奥から漏れ続ける叫びもすべて風に流しながら、ひたすらに走り続けた。
やがて師走の早い夜に帳が下りた。脚が回らなくなり、息が継げずに意識が朦朧とし始めた時、
目の前に小高い丘が現れた。

その頂には一本の大きな樹が。そしてその樹下には、あの日のような光が。

ぼやけた視界にそれらを捉え、おれは丘を登っていった。
星神には、決して声をかけてはいけないのだった。
それに、何を尋ねられても応えてはいけない。
爺様の昔語りを思い出す。
今度こそ。今度こそは。

おれは、頂上への最後の一歩を、慎重に踏み出した。

おれが見た光は、小さくなった焚き火の灯りだった。
旅人がここで夜を明かそうとしたものか、最前まで誰かがいた気配を残している。
おれはその場に膝からくずれ落ち、そのまま冷たい地面に横たわった。
こんな時刻に、眼下の闇から何かが叫びながら走り寄ってくるのだ。
この火の主とてさぞや驚き、急いでここを後にしたのだろう。
荒い息をつきながら、おれは目を閉じた。何も、もう考えられない。
顔のあたりに感じる火熱と地面の冷たさだけが、なにやら心地よいものかのように感じられた。

どれくらいそうしていたのか。
泣きながら寝ていたものか、まぶたが重く腫れ、目を開いたつもりが視界は暗いままだ。
おれは仰向けに身体を反転し、闇の中でもう一度ぎゅっと固く目を瞑り、そしてゆっくりと開いていった。
なぜか、靄のような明るさを感じた。
瞬きを幾度も繰り返し、再び大きく目を見開いた時、明かりの洪水が眼前に飛び込んできた。

そこには、夥しい星々の光が広がっていた。
幼いころ、あれだけ怖かった黒の夜ではなく、濃い群青を背景とした紫や深緑にも見える宙が、星々に彩られていた。

ああ、クタラは滅びたんだ。

おれは、なぜか不意にそう理解した。
そして、コサメはもういないという事も。

冷え切った身体をのろのろと起こすと、懐に固いものを感じた。手に取ってみると、コサメが最後に書いた百済の暦の木簡だった。
おれは、熾きになって残っている焚き火のあとに、それを一枚静かに横たえた。
しばし昏くなった熾火だったが、やがてよく乾いた木簡は熱をはらみ、その縁から炎を吹き出し赫々と燃えていった。
その温もりは凍えたおれの手を、やさしくやさしくとかしていった。

――夜のこの丘に登るのも、もう幾たびになるか。

おれは老いた脚を引きずるように、一歩、また一歩と急坂をゆく。
子どもらは元気なもので、ずっと先を走っては爺様、爺様とおれを呼んでいる。

だが一人、ぎゅっとおれの袖を掴んだまま、そばを離れない子がいる。

そうか。夜が、闇がこわいのか。
はは、爺様も子どもの頃はそうだったのだよ。

ならば一度、目を閉じてみるとよい。
そう、しばらくぎゅっと、固く瞑って……。

よいか。
上を向いて、ゆっくり、ゆっくりと目を開けてみよ。

はは、はは。

そうだ。

宙はこんなにも明るいのだよ。
あの星々が、いつも夜を照らしておるのだから。

そして、すべての運命を星は知っているのだよ。

どれ。そんな星読みが得意だった娘の話をしようか。
それと、星の名前を教えてあげよう。

まずはごらん。

あれは、角宿のすばし。

あれは、亢宿のあみぼし。

あれは、氐宿の……。

佳作

「夕暮れノオト」

繁田優菜

炎の海が昇っていく。高く、高く。
黒い森の中で十メートル近くあがる炎はまるで海のようだ。天まで届きそうな迎え火の数と大きさには誰もが圧倒される。

この町で、師走祭りが今年も始まった。

目を閉じる。燃え盛る櫓にさらに近づく。櫓に組まれた杉や竹の豊かな香りが漂ってくる。
本来は〝百済王伝説〟に登場する父親の禎嘉王と息子の福智王、二人の王のゆかりの地、日本と韓国に想いをはせるべきなのかもしれない。
「莉央、そんなに近づいたら燃えるよ」
隣にいる真澄の声が、遥か遠くに聞こえた。
クリスマスツリーみたい。
それは炎が広がり過ぎ無いように葉を下向きに組まれた櫓の形のことだ。
でもやっぱり違う。
それはそびえる炎の海が風に乗って、全身に伝わってくる匂いのことだ。
莉央の心は遥か遠くの国、ほんの少し前まで暮らしていた街に戻っていた。黒い森、ぶどうの木を燃やした匂い、クリスマスマーケットの明かり、そして、あの寂しげな瞳の中の海。

人口五千人程の小さな町。美郷町。
この町で莉央は、物心ついた時から祭りや神楽と共に育った。神楽の舞人である父によって、地元の神門神社はもちろんのこと、近くで奉納があるたび練習について行った。
よく言えばおっとり、悪く言えば単にぼーっとしている彼女は、同じ境遇の子どもたちが練習場の周囲で走り回ったり、カードゲームをしたり、お菓子を食べたりして時間を潰している中、退屈せず畳に座り、舞と音楽の中で自分の時間を過ごしていた。

そんな莉央は小学二年生のある日、素敵な贈り物を授かった。

贈り物の主、松尾さんは地域の笛の名手だ。莉央と同じく子どもの頃から神楽に親しみ、役場に就職してからは、その中心人物となって伝統を守っている。
「莉央ちゃん、この笛吹いてみらんね」
それは松尾さんお手製の篠笛だった。自宅の裏山で若い竹を収穫して作るらしい。切り取り、天日乾燥させ、火であぶり、油抜きをし、音程に合わせ穴を開ける。
その料理の様な工程を毎年の恒例にしていた松尾さんの腕前は既に、三つ星シェフ級だった。

新しいレシピの開発に余念がなく、通常の笛に加え、子どもでも簡単に吹けるリコーダー式の篠笛も発明していた。

松尾さんの笛を手にした時から、莉央の音楽は始まった。

初めて息を吹き込んだ時のことは今でも忘れられない。

自分の息吹が笛に伝わり、共鳴して温かい音が生まれる。既に音楽の授業でタンギングを習っていたので、簡単に音を出すことができた。

初めて聴いた自分の音色は、大人たちが奏でる突き抜けるようなものではなく、ホーホーと鳴くフクロウの泣き声のような素朴さだった。

のちに、息を吹き込む角度やスピードで異なる高さの音を出すということを知った。三つ星シェフ松尾さんのリコーダー式篠笛は、それらの吹き分けも可能だった。

笛を吹いていると、自分が楽器の一部になったような、楽器が自分の一部となったような不思議な感覚になった。

そして笛と一体になり生まれた音は、美郷の豊かな自然に溶け込んでいく。

魔法のようだった。

ずっと笛を吹いていたい。

いつの日からか、そう考える様になっていた莉央がフルートを吹き始めたのは、リコーダー式篠笛を卒業して通常の篠笛が吹けるようになった小学五年生の時だった。芸術鑑賞で管弦楽団の女性奏者が吹くフルートの音色に魅せられた。

特に印象に残ったのはモーツァルトの魔笛だ。笛の音色が猛獣や乱暴者を楽しく踊らせる様は、莉央の笛と同じく魔法の笛だった。

「誰か吹いてみたい人はいるかな」

楽器演奏を児童が体験するというコーナーで、恥ずかしがり屋の莉央はもちろん自ら手をあげることはできなかった。

しかし周囲の「莉央ちゃんやりなよ」の言葉と、挙手を促してくれた先生のおかげでステージに上がることができた。

体験用の楽器を受け取ると、想像よりずっと重く両手がずしんと下がった。

右隣でフルート奏者が楽器の端を持ちサポートする形で、体育座りの仲間たちに向かって音を出した。

いつもの要領でまずはゆっくりと。

息を、ある一点の場所に集中して当てる。聴き慣れたフクロウの音色だ。その後一気にスピードを速く、細くして高音を出せるか試してみた。

日頃の成果から、一オクターブ高い音も出すことができた。在校生徒の数に対してやたら広い体育館で、莉央の音色だけが天井まで轟いた。

「すごい、初めてでこんなに音が出せる人はいないよ。挑戦してくれた莉央さんに大きな拍手を」

その拍手は先ほど天井まで届いた音色が、小さく弾けて降ってきたようだった。

恵みの雨を浴びた莉央は、ああ、これしかないと思った。

「私、フルートを習いたい」

家に帰った莉央は両親に初めて自分から何かをしたいという意思を告げた。莉央と違って行動派の母はその週末には隣町にある個人のフルート教室を見つけてくれた。

高校からは宮崎市内の音楽コースのある高校に入学し、寮で暮らした。

相部屋の真澄とはすぐに仲良くなった。国際コース専攻の彼女は、日南市出身だった。中学生の頃、英語のスピーチ大会で賞を取ってから海外に興味を持ったらしい。

「実際は声と身振りが大きかっただけ。手もおしゃべりなの、私」

そう語る真澄の声はゴム毬のように弾けていて、消灯時間を過ぎたおしゃべりでも、彼女だけが

注意された。

高校卒業後、真澄は東京の外語大に、莉央はなんとドイツの南部都市ミュンヘンに旅立った。

宮崎からならば東京の大学に行くより学費が安く、十代のうちからクラシックの本場で勉強ができる。途中で留学するくらいならいっそ最初から行った方が良い。

同じくドイツの大学を卒業した先生が、莉央の両親を説得してくれた。

突然の休講が多く不親切なドイツの大学に振り回されながらも、無事卒業した莉央の在独は十年目を迎えていた。

八年目には永住権を得て、隣町アウグスブルクのオーケストラで契約団員となった。契約は一年ごとだったが、日本人の中でも特に調和を好む性格の彼女は、個性豊かな団員たちとも良い関係を築いた。マエストロの要求に細部まで応えるための練習も欠かさなかった。

いつか、正団員になれたら。まさにこれから。

そんな時、ある出来事をきっかけに全てが狂ってしまった。

日中もマイナス近い厳しい冬が続くミュンヘンで、突然六年付き合った恋人の裏切りを知り、そしてオーケストラを首になった。

莉央の恋人、アダムと出会ったのはまだ彼女が学生の頃だった。ルームシェアをしていた日本人美容師、幸ちゃんが働くサロンの店長がアダムだった。

父親がポーランド人、母親がドイツ人のアダムはドイツ生まれドイツ育ちだったがその瞳は、ウクライナ出身の同級生や、バイエルンミュンヘン所属のポーランド人選手と同じだった。出会った日からその水晶の中に海を閉じ込めたような瞳から目が離せなかった。東欧の人が持つ寂しげな美しい瞳。

しかし実際のアダムは、口数は多くなかったが、基本的に機嫌が良く、彼自身から寂しさを感じることはなかった。

昼はサロンで、パーマの仕上がりを待つ間はケープを巻いたお客さんと店の外でコーヒーを飲みながら楽しく働いていた。その傍ら、夜はクラブDJとして昼よりもっと楽しんでいた。

互いが音楽好きという事もあり、いつしか二人で会うようになっていった。

アダムは偉大なポーランドの作曲家ショパンについてもほとんど知らなかった。

彼とポーランドを繋ぐものは少なく、その瞳と、クリスマスまでの数日間バスタブで鯉を飼って、クリスマス当日に食べる（！）という文化くらいだった。

衝撃を受けた莉央は、日本ではクリスマスにケンタッキーを食べるという話をした。それを聞いたアダムは莉央と同じくらい驚いていた。もう一つ、子どもの頃に莉央が鯉を釣ったことにも驚いていた。想像できないと大笑いした。

莉央は石峠レイクランドでの鯉釣り、アダムは幼少期のクリスマスディナーの懐かしさからか、話は盛り上がり、ついにはアダムが家のバスタブで鯉を飼おうと言い出した。

ポーランドではクリスマスが近づくとマーケットで生きた鯉が売られるらしい。

しかし近くに海がなく、普段スーパーで買える魚はスモークサーモンくらいであるミュンヘンのどこで鯉を仕入れるのか。

まず二人はマリエン広場のクリスマスマーケットに出かけてみたが、鯉は売られていなかった。

その日は一緒にホットワインを飲んで、スタンプカードに星のスタンプを二つ増やして終わった。十個スタンプが貯まると一杯無料になるが、一度も星を集められたことはなかった。

「ねえ、莉央。エングリッシャーガルテンの日本庭園に行こう。あそこの池に鯉がいたはずだよ」

翌日の夜、アダムは言った。確かにあの池には鯉がいたはずだ。

莉央は夏に開催される、近年は単なるコスプレ大会になりつつある日本祭で篠笛を披露するため、年に一度日本庭園を訪れていた。池には色鮮やかな鯉が泳いでいた気がする。

早速次の日出かけると二人の記憶は正しく、池にはお目当ての鯉が大量に泳いでいた。
しかしその日は下見のつもりだったというのは建前で、大して綺麗でない池の鯉を罪を犯して獲り、クリスマスまでの期間バスタブを潰してまで飼いたいか。
話し合うまでもなく答えはお互いNein（いいえ）だった。
結局その日も庭園の小さなオープンカフェで焚火にあたり、時おり馬車が通るのを見ながらお茶をしただけだった。

「鯉はともかく、ぶどうは食べても美味しいし、燃やすと良い匂いだよね」
エスプレッソを飲みながらアダムがそう言った時、莉央は最初何のことかわからなかった。不思議そうな顔をしていると、アダムはカフェの焚火に使われているのがぶどうの木だということを教えてくれた。
師走祭りをはじめとして、故郷で燃やされていた木は竹や杉、神事で使った榊だった。記憶の中の香りは目の前のものと違うのがわかった。
寒さから、これ以上無いくらい寄り添い、二人で一つになりながら、互いの記憶を分け合った。

「アダムが家から他の女の人と出てきたのを見た」
鯉捕獲作戦のちょうど一年後の冬の日、莉央がキッチンで実家から送られてきた椎茸のお吸い物を味わっていると幸ちゃんが、こう告げた。
その一言を聞いた後の記憶はほとんど無いが、郷土の名品で温まっていた手足があっという間に冷たくなっていったのだけは鮮明に覚えている。
一体何の話なのか思考が追いつかず、グルグル回ったまま、次に何をすべきなのか一瞬で忘れてしまった。

ともかく立たないといけないんだ。外出前に小腹を満たしていることを思い出した。

やっとの思いでオケの稽古に出向いた莉央は、自分では平常を保てているつもりだった。しかしその生気の抜けた姿は明らかに異常で、年の近い団員たちは休憩時間におそるおそる心配の声をかけてきた。
ついには泣き出してしまった莉央を見て、音楽家たちは彼女の代わりに真実を確かめようと、街の情報網とSNSを駆使した探偵に転職した。
敏腕探偵たちの調査によると、彼の家に出入りしている女性は一人ではなく、しかも一度や二度ではない。

ドイツの第三都市とはいえ、別名〝百五十万人の村〟、そう呼ばれるミュンヘン。大きいけれど狭いこの街だからか、アダムの脇が甘いからか、数名の探偵が同じ結論にたどり着いた。

現実を受け入れられず眠れぬ夜を過ごしていた莉央は、日本の真澄にも連絡をした。

「まだ合鍵持ってるんでしょ？　家の中の排水溝に乾燥ワカメを詰めてやれ」

事情を聞いた真澄は、怒り心頭にこう告げた。

真澄には昔付き合っていた彼氏の浮気が発覚した際、業務用スーパーで大量の乾燥ワカメを買い込み、バスタブ、洗面台、トイレ、キッチン、ベランダ、ありとあらゆる排水溝に詰めるという完全犯罪を遂行して別れた過去があった。行いの善悪はともかく、彼女の勇気と行動力を少しで良いから分けて欲しいと思った。

莉央にはワカメを詰めるどころか、幸ちゃんの一報から彼の家に行くことすらできずにいた。

さらに恐ろしい事にこの十日間、彼からの連絡は一度もなかった。

一年前の冬、鯉を飼おうとはしゃいだあのバスタブの中で、代わりにお湯の中で本来の姿を取り戻したワカメがゆらゆら漂う。

莉央にできるのは彼の家のバスルームを想像することだけだった。

そして、さらなる悲劇が莉央を待ち受けていた。

年に一度の契約団員オーディションに落ち、二年所属したオーケストラを年内で去らなければいけなくなった。
彼女の所属するオケの契約団員は、正団員による投票で決まる。現職有利と言われるこのオーディションで敏腕探偵たちは、莉央に投票しなかった。
表向きは心配しながらも、悲壮感を漂わせる莉央に迷惑していたのかもしれないし、演奏の質が落ちていたのかもしれない。

過去が頭から離れないまま演奏し、今に集中できず心と音が離れてしまう。
音に集中しよう、今はアダムのことは忘れよう。強い気持ちで合わせようとするほど、それは離れて不自然になる。あの日の演奏はまさにそんな感じだったのだろう。
恋人と仕事を失った後のミュンヘンはうっすら灰色のベールに包まれているようだった。
そんな街にいる意味を見出せず、逃げるように帰国した。

「うちらが高二の時以来だよね、師走祭りに来るの」
真澄の一言で、はっと記憶の中のぶどうの焚火の前から戻ってきた莉央はこう答えた。
「そうそう、真澄が体操服燃やした時だよね」

櫓から飛んでくる火の粉で穴が空いても平気なボロの服を着て来てね。前もって警告された真澄は高校の体操服を着て祭りに挑んだ。

確かに、ボロかもしれない。でも穴空いて大丈夫なのかな。

莉央は心配したが、真澄は気にするどころか、初めて見る三十組近い櫓の炎に興奮し、わざと肩で火の粉を受けていた。翌週は、穴の空いた体操服で元気に跳び箱を飛んでいた。

大学を卒業し、東京の翻訳会社に勤めている現在の真澄はその頃からちっとも変わっていない。

「お腹すいたね、屋台見に行ってみようよ」

真澄がそう言うと二人は屋台の方角に視線を向けた。話し合いの末、莉央が炊き出しの鳥汁と芋焼酎を、真澄が同僚へのお土産を探しながらつまみを調達する事になった。

「あら莉央ちゃん、帰っちょっと?」

公民館前の鳥汁の列に並んでいると、後ろから聞き覚えのある声の主たちに次々と話しかけられた。

「お久しぶりです」

「そうなの、休みが長く取れてさ。航空券高いし滞在期間短いともったいないよね」

「え、いつ結婚したん?」

小さな町のお祭りは知り合いばかりだ。一度話し始めるとやめ時がわからず、鳥汁も焼酎のお湯

割りも冷めてしまいそうだった。
公民館には莉央の初めての笛を作ってくれた三つ星シェフの松尾さんもいた。
「莉央ちゃん、久しぶり。お父さんに帰ってきてるって聞いちょったよ。もうすぐ神楽も始まるけん、観にこんといけんよ」
そう告げると、すぐに松尾さんは莉央との会話を切り上げ、近くにいる男性側に体を向けた。
「おお、お帰りー。確か去年は来てなかったから、一年ぶりの参加かね」
男性との会話に耳を傾けていると、どうやら毎年師走祭りを撮影しに来る写真愛好家たちのようだった。
全国的にも珍しい祭りには県外からも多くの見物客が来る。松尾さんをはじめ、この町の人たちは、そんな人たちを家族の様にもてなし、お帰りと声をかける。

うちの神様は海の向こうの人やかいね。

そのことが関係しているからか、この町は小さいけれど決して狭くない。
莉央の両親が、生まれて一度も宮崎から出たことのない娘の突然のドイツ行きに反対せず、むしろ応援してくれたのもそういった風土が影響しているのかもしれない。
どこでもすぐに誰かにみつかるのが嫌になることもあるけれど、莉央は改めてこの町が好きだと思った。

屋台の喧騒から抜け出し、右手に地鶏の炭火焼、左手にお土産用の栗きんとんをぶら下げた真澄と再び合流した。

二人だけの女子会ならぬ少し早めの直会の始まりだ。田舎育ちの二人は地べたに座ることに、何の抵抗もない。

稲刈り後の株からは所々稲孫が生えている。

見るからに生命力を失った収穫後の田んぼには、実際はまだ養分が沢山残っており、主茎が弱るほど青々とした稲孫が生えるらしい。

日が落ち、美郷を囲んだ森はさらに黒くなった。

「真澄、忙しい中東京からわざわざ帰ってきてくれて本当にありがとう。地鶏いくらだった？　私に払わせて」

莉央は心からの感謝を真澄に伝えた。

「そのくらい良いよ。それに莉央、ユーロばっかりで円持ってないんじゃない。てかほんと大丈夫？　なんか一気に大変なことになったね。まあ莉央のドイツ生活はいつも大変そうだけど」

この十年間、異国で音楽の世界に身を投じた莉央は、ことあるごとにその苦難を真澄に報告していた。演奏予定の会場の鍵が開いてない、伴奏者のピアノがなかったので急遽クレーンで運んだ、明日演奏する曲が完成せず、作曲家が泣いている…沢山事件があった。

「アダムのことだけど、私だったら絶対に本人と話さないと納得できない。その上でどうするか決める」

真澄はそう言った。

「結果はもうわかってるし。みんなが調べてくれたから。それ以上に彼の口から気持ちを聞くのが怖すぎる。今は少し落ち着いたけど本当に辛かったの。電話でも話したけど、血の気が引いていくっていうのがどういうことかわかったもん。頭が真実を受け入れられなくて、体がどんどん緊張して、手足が冷たくなって、心が苦しくなった。会ってまともに話せる自信がない」

俯きながら、ゆっくりと話す莉央の話を聞いた真澄は少し考えた後、同じくらいゆっくり話し始めた。

「莉央にとってアダムは初めての恋人で、大切な存在っていうのはすごくわかる。だからこそ中途半端に終わるとずっと後悔すると思う。何年も一緒にいたのに、突然お互い何の連絡も取らなくなるなんて、そんなのおかしいでしょ」

莉央を余計に傷つけたのは幸ちゃんから聞く、アダムの近況だ。

サロンでの会話だけでは彼の本心まではわからないが、特に落ち込んだ様子もなく、いつも通り楽しく働き、それ以上に楽しくパーティーシーズンを過ごしているらしい。

「それにさ」
真澄は続けた。今度は先ほどのゆっくりとした口調ではなく、いつものゴム毬のような勢いで。
「彼を信じた莉央は何も悪くない。人として弱かったのは信じた莉央じゃなくて裏切ったアダムなんだから。これだけは絶対。自分を信じて」
その力強い言葉を聞いて、莉央の目からは涙が溢れた。
「莉央、ごめんね。大丈夫?」
真澄が、心配して顔を覗き込んだ。
「大丈夫。そう言ってもらえるのが嬉しくて。ずっとくよくよしている自分が情けなくて。でもなんかほっとした」
短い沈黙の後、莉央はそう答えた。

何がいけなかったのか。幸ちゃんに髪を切ってもらいながら、隣で他の客のカットをするアダムの痔の話を堂々と日本語でしていたのがバレたのかもしれないし、ドイツ語が下手で一緒にいることに疲れたのかもしれない。本当は南米女性が好みだったのかもしれない。
自分の演奏のどこが良かったのか、どうすればもっと自分の理想に近づけるか。
長年の考え方のクセからか、自分の過ちにばかり目を向けていた莉央の心は真澄の言葉に救われた。
「莉央は優しいし、無理に自分の意見を主張しないじゃん。いつも人の意見を受け入れてくれる。

私はそんな莉央が大好き。でも今回のこともだけど、自分の本当の気持ちを相手にきちんと伝える方がいいと思う。その時できる限りの本音を。望み通りの結果になるとは限らないけど。私は莉央の立場だったら突っ走っちゃうからさ。ワカメ詰めたり、出てこない彼に業を煮やして、彼の家の大家さんに玄関開けてくださいって直談判したり」

「それ初めて聞いたし」

真澄の余罪を聞いた莉央に笑い声が戻ったその時、見覚えのある背中が通りかかった。

「大輔？」

莉央が、見覚えのある背中の主に声をかける。

「おお、莉央やん。帰ってきちょったと？」

数年間会わなくても、生まれた頃から毎日一緒に過ごした背中を見間違えることはなかった。

背中の主、大輔は莉央の同級生で、お互いの家が隣同士だった。隣といっても二人の家の間には四つの田んぼがあり、その距離は五百メートル近くあった。

小さい頃から大輔の三つ上の姉と共に毎日遊んだ。大輔は女の子二人の遊びによく付き合った。彼のウルトラマン人形はしばしばリカちゃん人形の服を着せられていたが、怒らず工夫して遊んだ。

二人の直会は、大輔を加えて三人になった。真澄は大輔の話を莉央からよく聞いていたし、実際に会ったこともあったので宴は自然に続いた。

莉央と真澄は大輔に、なぜこの時期に莉央が日本に帰ってきて、真澄が東京からわざわざ駆けつけているのか簡単に説明した。

彼は黙って頷きながら全てを聞き終わった後こう告げた。

「そんなやつ莉央にはもったいないよ。もっといい人がいるよ。ずっと一緒に育ったんだから。俺が保証する」

大輔は、中学校を卒業後、町外の工業高校に通ったのち、消防士になった。一年前の彼の結婚式で莉央はフルートを演奏し、最近勤務地である隣町に家を建てたということも母親から聞いていた。春には子どもが生まれるらしい。

この地に根をおろし、人びとの安全と自分の大切な人を守っている。立派に成長した幼なじみを誇らしく思った。

神楽の練習についてきてる時は片時もじっとせず走り回ってるだけだったし、いつもグミばかり食べてたのに。

「ねえ、みんなー。ちゃんと並んで歩こうよ」

小学生の頃、社会の授業の一環で、百済の館で行ったスタンプラリーの時のことを思い出した。

「韓国の名工を招いて施された装色の名前は（　　）」
「奈良東大寺と同一品であると言われている百済王族の遺品は唐花（　）花鏡」
館内を周りながら百済王伝説にまつわる問題が書かれたプリントを解き、正しい答えを確認してスタンプをもらう。よくある調べ学習だ。

静かに、前に見ている人の後ろにきちんと並ぶこと。

そんな先生の言いつけを守って皆に声をかけていた大輔の姿を思い出した。莉央がフルートと出会った芸術鑑賞会でも、手を挙げなよと気にかけてくれていた。昔から正しいと思うことをきちんと言える人だった。
「私、大輔と結婚すればよかったかも」
莉央は呼吸をするように自然と大輔にこう告げた。それを聞いた真澄は、間髪入れずに
「不倫の車輪は廻すな」
そうピシャリと跳ね除け、大輔は再び
「莉央にはもっといい人がいるよ」
笑いながらそう言った。

今さら関係を崩そうとしているわけではなかった。世界には素敵な人がたくさんいる。そう疑わず兄弟のようにしか思っていなかった、でも本当は他の誰にも代えがたい魅力を持った幼なじみに、今この瞬間の本音を伝えた。

真澄は弱かったのはアダムだ、莉央は悪くないと言ってくれた。

でも心の奥底で本当はわかっていた。彼を責めないのは自分にメリットがあるからだということを。みんなが慰めてくれる、もしかしたら何もなかったかのように元に戻れるのではと。

そんな甘い考えでいつまでも傷ついたままでいる自分と決別したい。

「これができる限り本音を伝えるってことかな」

莉央は真澄に言った。

「うーん。どうだろう。私が思ってたのと違ったけど」

真澄は腑に落ちていない様子だったが、それでも莉央は真澄からもらった、大切な言葉を実践できた気がした。

ドンドン、シャララン、ドンシャララン。

どうやら神楽が始まったようだ。

二泊三日の祭りのうち、夜神楽のメインは十八番の演目が奉納される二日目だ。しかし一日目の今日も迎え火の後、短い神楽が奉納される。

「そしたら俺はそろそろ行かないと。青年団の櫓を建てに帰ってきてたんよ。これから打ち上げ。莉央はしばらく日本におるんやろ。またね。真澄ちゃん気をつけて帰ってね」

そう言うと、大輔は音の鳴る方角へ消えて行った。

神楽の神庭に入ることができるのは男性だけ。それも長男しか舞人になれないなど厳しい決まりのある神楽も多い。

しかし師走祭りの神楽は女性や子どもの舞もある。その年によって、奉納される演目も違う。

ここでもまた、この町の風通しの良い雰囲気を感じることができる。

大輔に遅れて神庭に到着した莉央と真澄は、神門神社の御神灯がある左から鑑賞することにした。

上演されていた演目は二番目の、花の手舞だ。

音程もリズムも自由で曖昧に演奏されていると思ったら、突如舞いとぴったり揃う。

実態の掴みにくい音楽。漂ってくる香りや呪文を諳んじるような唱教。全てが一体となって異空間を作り出す。

MUSIC＝MAGIC

ニューオリンズの巨匠、ドクター・ジョンの言葉がアダムのレコード部屋と共に不意に頭をよぎる。

神楽囃子と芋焼酎の効果で、莉央は再びミュンヘンでの生活に想いを巡らせていた。心の奥では、風に乗って響いてくる香りも音も違うと気づきながら。

「私、このまま外国人としてここで死ぬのかな」

ミヒャエル・エンデが眠る墓地での散歩、オリンピアパークの桜の下でのお花見、そしてアダムの先祖の話。

それらに触れた時、漠然とした寂しさが浮かんでは消えた。

アダムの祖父母は東欧侵攻の際にポーランドから亡命し、そのまま異国で暮らすことになったそうだ。大好きなアダムの瞳の海は、先祖が焦がれたポーランドの海なのかもしれない。

何度聞いても、その難解極まりない動乱の歴史を理解することはできなかった莉央は、その代わり、郷土の伝説を話した。

私の地元の神様も戦火を逃れて韓国から海を渡ってきたんだよ。父と子が別々の町に祀られていて、そのうち父親が私の町の神様なの、同じだねと。

戦争で多くの仲間を失い、肉親と離れ異国の地に眠る二人の王の悲しみや孤独も計り知れないが、ドイツで暮らすようになり、以前よりその気持ちに寄り添い、その魂に自分を重ねるようになった。彼らは絶望の中から希望を見つけ、懸命に生きた。里人の悩みを聞き、この地を治めるようになり、死後も後世に感謝され、両国を繋ぐ橋となった。

王様たちのように、私もこの闇の中から再び異国で希望を見つけられるだろうか。

「久しぶりに観るんやない？」

出番の合間に客席に降りていた松尾さんが莉央に声をかけ、こう続けた。

「神楽では、神庭を清め、神様を呼んだ後は何をするか覚えてる？

神様たちと遊ぶんよ。神楽は昔、神遊とも呼ばれてた。神様は崇めたり、お願いしたりするだけ。ダメなのかもね。一緒に遊ばないと」

神庭の汚れを払う演目である花の手舞が終わったのち、練り舞が始まった。ふんどし一丁で押しくらまんじゅうの動きをするユーモラスな演目だ。

先ほどまでの厳かな神事といった雰囲気がパッと緩み、踊りと囃子のテンポが上がる。
方々から観客の笑い声やはやし立てる声が聞こえてきた。

初めて松尾さんの笛を手にして以来、幼いながらに音楽には神様が宿っていることを知っていたはずだ。

さーかな、さーかな。てんからおちてみずをのめ。

幼なじみたちが水遊びをする傍ら、足だけを川に浸け、古くから伝わるわらべ歌のメロディーを奏でる。天からは強い光が差し込み、近くに遮る建物のない川辺を、真夏の野外劇場のようにキラキラと照らした。この街の豊かな自然に包まれながら、春夏秋冬いつも笛を吹いた。
その至福の感覚を、少し思い出すことができた。
アダムとの件以来、自分の音で涙を拭うような感覚が消えなかったが、もう一度音楽を通じて神様と遊びたい。

カーニバル休暇前には帰る予定だよ。
メールの宛先はアダムではない。さっき真澄と二人でいる時、数日ぶりに開いたメール。溜め込

んだメールを一人では開けずにいた。本当に弱虫な自分。

「イタリアでチーズの冒険っていう子どもミュージカルをやるんだけど、スケジュール空いてたら出ない？」

それはオーケストラの元同僚であるオーボエ奏者からのメッセージだった。何でも、マスカルポーネ、チェダー、カマンベールなどのチーズたちが珍道中で事件を解決するストーリーらしい。

何だその世界観はと、身構えていた二人は拍子抜けしたが、今の莉央にはぴったりかもしれない。

この期に及んで、アダムと直接会って話をする勇気はまだない。

それでも、もう一度ミュンヘンに戻ろう。

異国の街で生きていく。故郷に帰って人生を歩む。パートナーに本音を告げる。新たな仕事に挑戦して運命を切り拓く。

弱り、傷ついた心から、沢山の可能性に満ちた希望の芽を育てる。

莉央は再び瞳を閉じた。

「オサラバー、オサラバー」

再会を果たした一行が、神門神社から比木神社へ帰って行く。

三日目の下りましでは各々が台所から持ってきたお玉やざるを大きく掲げ、「オサラバー」と笑顔で声を轟かせる。そこで奏られる別れを表現した笛の物悲しい旋律がとても好きだ。

実際にはまだ祭りは始まったばかりだったが、両親、真澄や大輔、この町に暮らす人たちと共に、笑顔で下りましの一行を見送る。歓声を上げながら互いに灰黒を塗りあい、真っ黒な笑顔を浮かべている大切な人たち。その掛け声は声援のように、莉央の背中を強く押す。

まぶたの裏に浮かんだ風景は、未来のものに変わっていた。

佳作

「Lovely Place」

松田紙弥

「デートすることになった」と私が言った時、貴裕は先々週のジャンプを読んでいた。
ずっと好きだったマンガが、次週いよいよ最終回となり、ありったけのバックナンバーをひっぱりだして読み返している途中だったと思う。
貴裕のおじいさんの家だった。貴裕と、貴裕のおかあさんの家でもある。二人で買ったジャンプは、全部ここに置かせてもらっていた。
ちゃぶ台のむこう側、ホットカーペットに腹ばいになって、貴裕がページをめくる。
コマを追う目が、すこしだけ逸れたのは、私の記憶違いかもしれない。
「ふーん……いつ？」
「今度の日曜」
「……誰と？」
「右田さん」
「は？」
貴裕が顔を上げた。
「右田さんて、右田先輩？　空手の特待で進学した、あの？　なんで早苗とつながってんの？」
矢継ぎ早に質問されて私は、ああ、と思い出した。そういえば、そんなリア充もうちの中学にはいたのだ。接点なさすぎで忘れてたけど。
私は首をふって、答えた。

「ちがう。同じクラスの、右田さん」
「……女じゃん！」
そう。だから貴裕に聞いてもらおうと思ってきたんだよ。

ことのはじまりは、その日の昼休み。
「あのね。わたし、早苗ちゃんのこと、好きかもしんない」
――ぺきっ
閉じそこねたマルの上、シャーペンの芯が転がった。
私は顔を上げて、女子力学年ナンバーワンの右田さんを、見た。教室には誰もいない。日直当番の私と右田さんの、ふたりきり。
私たちは机をはさんで、日誌を書いていた。
「……うん？」
「だから、早苗ちゃんのこと、好きかもって」
くりかえし言われても、なかなか頭が追いつかない。全身フリーズしたまま、やっと一言、
「……ありが、とう？」
言いながら内心、頭をひねる。ありがとうって、なんよ？
右田さんが頬を染めて、ほうっと息をついた。ふたつに結んだ、ふわふわの長い髪が風にゆれる。

「よかったー。はあ、緊張した。そしたらさ、お願いがあるんだけど、いい？」
「え、なに」
「あのね、好きかもしれないとは思うんだけど、ほら、女の子同士ってわたしもはじめてだから……慎重を期すと言うかなんというか」
ごにょごにょ話す右田さんを見ているうちに、私の頭にもようやく意味が染みてきた。
「……えっ」
「ためしにさ、デートしてみようよ」
「え――――――っ!?」

「……で、日曜にデートすることになったと」
ちゃぶ台に片肘をついて、ことのあらましを聞き終えた貴裕は、呆れ顔だった。
「お前、物陰と夜道には気をつけろよ」
「なんでっ!?」
「ここだけの話だけどな。右田さんのことが好きなやつが、何人かいるんだよ。今はおたがい、腹の探りあいの膠着状態だから平和なもんだけど」
ぼそっと貴裕が言った。
「早苗は女だから、知らないと思うけど……」

「ふーん。『女もすなる恋バナといふものを、男もしてみむとてするなり』ってやつだね」
「土佐日記だろ、それは」
ふふっと笑う顔を見て、私も笑う。
「でもさ、そんなに気にせんでいいと思うよ。女の子同士だもん。好きとかデートとか言っても、遊びみたいなもんじゃないかな」
「そうかなあ」
「そうだよ。女子って、普段から抱きついたりしてるし。じゃれあい？　みたいな」
貴裕はまだ首をかしげている。そんなこともあるのかなぁ、といった顔だ。
まじめなやつである。
ひとしきり考えこんだあとで、貴裕が言った。
「まあいいや。それで、早苗はなんで俺に話したんだ？」
「そりゃ相談したいからだよ！」
「お前、困ってないだろ」
「困っとるよ！　だってデートだよ!?　やったことないもん。ねえ、どうしたらいい？」
「俺だってしたことねえよ！　つーか、遊びって言ったのはお前だろ。遊びに行けよ」
「そうやけど……遊びとデートは、違う気がする……」
「……」

気まずい沈黙だった、と思う。
古い鳩時計の秒針の音を、なぜか覚えている。
「……じゃあ、デートプラン、考えるしかねえな」
途切れ途切れの、やけっぱちの声。
そっぽをむいた貴裕の横顔を見て、私が言った。
「え、デートプランって男が考えるんじゃないの？」
「どっちも女なんだからしょうがないだろ！」
ふりむいた顔は、真っ赤だった。

デート当日の日曜日。待ち合わせは、中学校の前にした。
「学校に集合って、なんだか遠足みたいだね」
お父さんの車から下りた右田さんは、すごく大人っぽかった。マキシ丈のワンピースに白いTシャツをあわせて、背中にはちっちゃなリュックを下げている。
一方、貴裕から「せめてデートらしい格好で行ってやれ」と言われた私は、タンスの中で一番気に入っていたチャンピオンのシャツとハーフパンツを着ていて、すでに問題の着眼点を大幅にまちがえた気がしていた。
「なんか、ごめんね」

「ん？　なにが？」
こくり、と首をかしげる仕草が満点でかわいい。うっすら色づいているのはメイクだろうか。
「ねえ、早苗ちゃん。『歩きやすい格好で』って言われたけど、どこに行くの？　日向？」
「あー、えっとね、とりあえず移動しよっか」
右田さんには「デートプランはお楽しみで」と伝えてあった。
「うわー。ドキドキするー。ねえねえ、バスは乗る？　電車は？」
「どーかなー。はい、こっちこっち」
校門前の坂を下りていく。右手には、稲穂がゆれる神様の田んぼと、鳥居。
秋晴れの、いい天気だった。

西郷中から徒歩二十分。
私たちは大きな三角屋根の前にいた。
「え、ここ……？」
「うん、そう。森の科学館。来たことある？」
「あるよ……遠足で一緒に来たよ……」
「あっ、そっか。忘れてた。あははは」
内心、冷や汗をかきながら、中に入った。

小さなホールの左側には、飴色の木工作品がびっしりと並んでいる。奥の事務所に声をかけると、顔見知りのお姉さんが出てきてくれた。いつものように受付の用紙を記入する。
「奥に行ったら、緒方さんいるから。いつもの？」
「ううん。今日は違うやつ」
右田さんとふたり、建物の奥へと進んだ。森の科学館は、林業協会が運営する学習施設だ。時間が早いせいか、展示室にもお客さんがいるようすはない。
工作室に入ると、作業着姿のおじさんがいた。緒方さんだ。
「あら、今日は見たことないお嬢さんやが。貴裕はどうしたと？」
「べつに。たまには他の子と来たっていいでしょ。右田さん、どれがいい？」
棚にはたくさんの木のおもちゃや、本立て、スリッパ立てなんかが並んでいる。
「予約しないで来たから、今日はおもちゃしかできないんだけど。どれがほしい？　一緒に作ろう」
「え、これ、作るの？」
「うん。あ、でも小学生からだから簡単だよ！　材料も全部切ってあるし」
右田さんの目が、おもちゃの間と、私の顔をさまよった。しばらくして、
「……これにする」
「ダックスフントだね」
白い指が差したのは、犬の形をしたおもちゃだった。おなかの部分がパズルのように、五つのピー

スでできている。
緒方さんが工作キットを取りに行って、私は右田さんと、いつもの森が見える席に腰を下ろした。工作室には大きな作業机が四台。壁二面はガラスばりになっていて、残り一面が収納棚、一面が黒板になっている。窓の下には、大型の木工作品が並んでいる。
「早苗ちゃんは、ここ、よく来るの？」
「ときどきね。ダックスフントも作ったことあるよ。なつかしいなあ。目を打ちこむのがちょっと難しいんだよね」
「なーにが、ときどきか」
机の上に、裁断された木のパーツが並べられていく。緒方さんが言った。
「坊主とふたりで、しょっちゅう来ちゃあ、好き勝手しとるくせに」
「ヌシの言うことは聞いとるやろ。それに休みの日にしか来てないし」
「よう言うわ。お嬢ちゃん、そこのコンロ見てん」
そう言って緒方さんが指さしたのは、高さ一メートルほどはある、おもちゃのキッチンだった。
「それが見本品。ここの工作体験で作れる一番の大物よ。で、あっちが早苗と貴裕が作ってるやつ」
「……なんか、全然違いますね」
「こいつら、勝手に部品増やすわ、ワックス塗るわ。あれ一台で何年居座る気かしらん」
「そんな人を迷惑客みたいに！　あ、右田さん、未完成だからあんまり見ないでっ」

あわてる私の姿を見て、工作室のヌシはようやく気が済んだらしい。
緒方さんは先生らしく両手を打つと、小さな木箱を机の上に置いた。
「はいはい。じゃあ最初はこの紙やすりでね、部品の角を削ってください。はい、がんばって」
「削るだけ、ですか？」
「まずはね。切りっぱなしやと、手触りがよくないかいね」
パーツは全部で十一個。おなかの部分はけっこう複雑な形をしているけれど、丁寧にやれば、けっして難しい作業ではない。なれてくれば、手元を見ずにできるようにもなる。
私たちは、いろんなことをおしゃべりしながら、角をとっていった。
「早苗ちゃんと貴裕くんて、いっつも一緒にいるよね」
「う、うーん、そう？」
「……つきあってるの？」
「ぶっ……！　まっさかあ。あいつはほら、私のシャテーみたいなもんだから」
ブフォッ、と背中で音がした。
「なに緒方さん、汚いなあ」
「あー……すまんすまん」
やすりをかける手は止めず、右田さんがさらに聞いてきた。
「でも、しょっちゅう二人で遊んでるんでしょ？」

「それはまあ、友だちだから……」
私はどう話したものか悩んで、最初から話すことにした。
「右田さんは、貴裕が転校してきたこと、覚えてる？」
西郷中の生徒のほとんどは、田代小から持ち上がりで入学してくる。右田さんと私と貴裕も、小学校のころから同じ教室に机を並べてきた。
「もちろん。たしか二年生の時だったよね。校庭の木にすごくびっくりしてて」
「そうそう！　ずーっと『なんで？　なんでふしぎに思わないの？　なんで？』とか言ってて」
田代小の校庭――つまり、トラックを備えたグラウンドの真ん中には、大きな木が一本生えている。今なら貴裕が言うことも、もっともだと思うのだけれど、
「こっちだって、なんで生えてるかなんて知らないし、あんまりしつこいからさ。『あれ登れないと卒業できないんだよ』って言ったら、あいつ本気にしちゃって」
「えっ?!」
「放課後、校庭でひとりで遊んでたら、声がするんだよ。寄ってって見たら、上に貴裕がいてさ」
夏休みが終わってすぐ、まだ一日が長いころだった。
青葉の間で泣いている貴裕の顔と、「いたたまれない」という言葉も知らなかった、あの時の自分を思い出す。
「ひとりで登ったら、卒業できると思ったんだって。中学生になったら、妹に会いに行けるって

……そういう意味じゃないし、だいたい、ウソだし……」
いつのまにか、右田さんの手が止まっていた。
私はやすりを動かし続けた。
「だからね。今までここで作ったおもちゃは全部、貴裕の妹ちゃんに送ってるんだ。六月の誕生日と、クリスマスと。ダックスフントも作ったよ。私はその手伝い」
一緒にいて楽しいのも本当だし、友だちと思ってるのも本当だった。けど、
「悪いこと、したからさ」
つぶやく。そして、ハッと顔を上げた。
「じゃった！　これ貴裕から誰にも言うなって言われちょったっちゃ！」
後日、廊下で念押ししてきた貴裕の顔を思い出す。
「右田さん、誰にも言わんで！　できれば忘れて！」
「なんだかなぁ」
言って目を細める、右田さんの顔はやさしかった。

ダックスフントができあがったのは、十時半を過ぎたころだった。
金槌で足をつけるところは、前と後ろで分担して作業した。目と耳も、ふたりで半分ずつ。
四本足で立つ姿を見て、右田さんの目が輝いた。

「できたー三」
「うん。綺麗にできとるね。どら、写真撮ろうか」
緒方さんがデジカメをかまえた。木工体験では、最後に完成した作品と参加者の写真を、施設の活動記録として残すことになっている。
右田さんも、自分のスマホで写真を撮りはじめた。楽しんでくれたようだ。
「そろそろ行こっか。ちょっと早いけど、お昼ごはん食べに行こう」
私たちは丘を下りて、バスに乗った。乗客は、入口近くに座るおばあちゃんがひとり。私たちは手をつないで、一番うしろの席に座った。
バスは西郷のまちを抜けて、耳川沿いを走っていく。窓いっぱいにそびえる発電所を、ふたりで見上げた。川面の青さがきれいだった。
組崎停留所は、耳川を少しはなれた、民家がぽつぽつと並ぶ田園地帯にある。
青白赤のバス停の横で、二体のお地蔵さんが小さなお堂に座っていた。
「見えてきたよ。ほら、あそこ！」
道と、田んぼの先に、赤い旗が見えた。右田さんの顔がほころんだ。足が軽い。
古民家を改装して作られたピッツア屋さんは、宮崎市内からもお客さんがやってくる人気のお店だ。町のパンフレットにも載っていて、もちろん私と右田さんも前から知っていた。
正直、中学生だけで来るには、けっこう敷居が高い。でも「こういうところだぞ」と、デート・

プランナー貴裕は言った。「だってデートだから」
「なんか、ドキドキするね」
そう笑いながら、右田さんが土間から一段高い板の間に上がる。靴は履いたまま。四卓あるテーブル席のひとつに案内されて席につくと、磨きあげられたガラス戸ごしに、いつもより眩しい西郷の景色があった。
「なににする？」
ふりかえれば、襖サイズの大きな黒板にメニューが並んでいる。
ふたりで悩んでいると、お姉さんがお水を持ってきてくれた。
「ピッツアもジェラートも、シェアして大丈夫だからね」
「ありがとうございます」
私たちは相談して、マルゲリータを一枚、注文した。
「早苗ちゃん、見て見て」
カウンターの奥に、赤いピザ窯があった。燃える炎の中に、薪が見える。
「すごいねぇ。知ってる？　ピザとピッツアって、違うんだって。ピザーラとかはピザで、石窯で焼くのが本当のピッツアなんだって」
「うちから電話してん届かんけどね」
「ほんと。でも、こっちの方がずっとすごいもんね！」

モジャモジャ頭のおじさんが、私たちを見てにこっと笑った。
はじめて食べたピッツアは、しゃべる時間ももったいないほどおいしかった。もぐもぐしながら目を輝かせる右田さんに、私ももぐもぐしながらうなずいた。弾力のある生地とチーズが口の中で混じりあい、鼻からはトマトとバジルの香りが抜けていく。
ジェラートは、栗とチョコレートのダブルをふたりでシェアした。どっちも、やっぱりふたりでジタバタしながら食べた。見た目はちょっと溶けたアイスクリームみたいなのに、栗とチョコの香りが口いっぱいにあふれてくるのがふしぎだった。
「おいしいね」「おいしいねえ」と笑いあいながら、幸せな時間はあっという間に過ぎた。
残り少ないジェラートを譲りあっていると、右田さんが言った。
「このあとはどこに行くの？」
本当なら、バスが来るまで時間をつぶして、図書館に行くつもりだった。
「わたし、デートっぽいところに行きたいな」
「デートっぽいところ？」
「うん。早苗ちゃんは、恋人の丘って行ったことある？」
むかい側に座る右田さんの顔が、ぐいと近づく。
恋人の丘は、そう呼ばれているとおり美郷町の鉄板デートスポットだ。小高い丘の上に、韓国の百花亭を再現したという小さな東屋が建っている。とはいえ、

「……恋人の丘って神門でしょ。暗くなっちゃうよ」
神門のある南郷は同じ町内にある。
けれどバスで行くには、いったん隣市の東郷まで出なければならない。
「大丈夫だよ。帰りは迎えに来てもらえば」
「うーん……」
「ねえ、早苗ちゃん。おねがい」
私たちは、神門に行くことにした。

バスを下りた時、あたりはすでに暗くなりはじめていた。
「どうする？　まだ歩いて三十分かかるって」
運転手の言葉を信じるなら、ここで引き返したほうがいい。
あたりを見まわしていた右田さんが、急に走り出した。
「ちょっと待ってて！」
道路端に、観光客らしいミニバンが停まっていた。母親らしい女性が、小さな男の子の手を引いている。
右田さんがその女性となにか話したあと、こちらに手招きした。
「乗せてってくれるってー！」

聞けば、美郷観光の最後、ちょうど恋人の丘へ向かおうとしていたところらしい。
車は、覆いかぶさるように繁る木々の間を登っていく。
急にひらけた場所に出た。駐車場のむこう、東洋風の建物がたたずんでいる。
私たちは乗せてくれた家族に先をゆずって、ベンチに座った。
星の灯りはじめた空に、家族の鳴らす鐘の音が響く。
「本当に送っていかなくて大丈夫？　私たちなら、ここで待ってるから……」
ご夫婦は最後まで、私たちを心配しながら帰って行った。
「ありがとうございます。でも、お父さんにも『何時ごろ迎えに来て』ってメールしちゃったので」
「そお？　女の子なんだから、本当に気をつけてね？」
「はい」
車の音が遠ざかるのにあわせて、山の音が近くなった。虫の声が大きくなる。
「そろそろ、行く？」
私たちは手をつないで、百花亭につづく道を歩いた。
極彩色に塗られているはずの梁や模様は、当然だけど暗くて見えない。かわりに、空いっぱいの星と神門のまちの明かりが、東屋と私たちを包みこんだ。
見上げれば、六角形の屋根の真ん中から鐘がぶら下がっている。

「早苗ちゃん、いっしょに鳴らそ？」
息をあわせ、まっすぐ下に紐を引いた。ドキッとするほど大きな鐘の音が、夜の山に響いていく。
ふしぎと、ふたりともなにも言わなかった。
鐘の音がすこしずつ小さくなっていく。終わりは、あっけなかった。
「……明るいところで待っとこうか」
右田さんのお父さんが迎えに来るまで、もう少し時間があった。
足元に目を凝らしながら、階段を下りる。小路の途中で、右田さんが立ち止まった。
「わたしたちも買ってくればよかったね」
小路のわきに、ハート型のモニュメントが立っていた。恋人たちの名前の書かれた南京錠が、ところせましと架けられている。錠の数だけ願いがある。
「そうだね。来られるってわかってたら、マジックも鍵も用意しといたんだけど」
「ふうん。なんて書くの？」
「それは早苗と、……」
開いた口が、むなしく空を食んだ。
右田さんの目が、私を射ぬく。
「また美紗ちゃんって呼んでよ」
つないでいた右手が、きゅっと握られる。

「小学校の時は、そうやって呼んでたじゃん」
「うん……」
言われるまま、うなずく。私は思い出のように呼ぼうとして、また口を閉じた。
記憶の中の幼い私は、右田さんの言うように「美紗ちゃん」と呼んでいた。小学校入学から今まで、ひとに言わせれば私たちは、兄弟姉妹のように育ってきた。なのに、言葉が出ない。
いつからだろう。女の子の名前を呼べなくなったのは。
右田さんが言った。
「ねえ、キスしてみようよ」
「え」
「大丈夫だよ、誰も見てないし。わたしたち、デートしてるんでしょう?」
「そうだけど……」
「じゃ、はい」
顔をすこし上むけて、右田さんが目を閉じた。形のいいくちびるが、無造作にさし出されている。きれいだった。まぶたを縁どる長いまつげも、やわらかに弧を描く髪も。赤みのさした頬も。
私は、彼女の両肩に手をかけた。
後悔は、いつだって誰かを傷つけたあとにやってくる。

木々のむこうに、光が走った。エンジン音が近づいてくる。
となりのベンチでスマホを見ていた右田さんが、急に立ち上がった。
見覚えのあるバンが、ヘッドライトの光量を落とし、駐車場に停車する。
「お父さん、遅い！」
助手席にかけよった右田さんが、ドアを開けた。室内灯が車内をオレンジ色に照らし出す。
「美紗、あの子は乗せてあげんでいいとね？」
右田さんが、ちらりとこちらを見た。
「大丈夫……親が迎えに来るって」
ステップに足をかけ、助手席へと乗りこむ。バタンと閉まるドアの音。
「待って、」
私は急いで、助手席の窓をたたいた。右田さんの顔が一瞬こわばり、むこうを向いた。おじさんがふしぎそうに窓を開けてくれた。
「これ……まだ渡してなかったから」
開ききった窓から、私は持っていた紙袋を差し入れた。東郷での乗り換えの間、こっそりラッピングしたものだ。中には昼間作ったダックスフントと、昨日、何度も練習して書いたメッセージカードが入っている。

「ちょっと早いけど、もうすぐ誕生日でしょ。お誕生日おめでとう」
「……ありがとう」
車は、窓を開けたまま走り出した。
私は手をふって、光が消えるのを見ていた。
静かだった。草むらから虫の声が聞こえはじめた。私は街灯の下のベンチから、置きざりにしていたリュックを手に取った。背負い、丘をくだる道にむかって歩き出す。
腕が、足が、重かった。
親が迎えに来るというのは、ウソだ。スマホも公衆電話もない。私がこんなところにいるなんて、きっと思いもしないだろう。
神門のまちに下りるまで、三十分ほどかかった。
バスはもう終わっていた。通りに人気はなく、店の明かりすらない。
「……帰ろう」
また、歩き出した。
それは、神門神社前を過ぎたあたりだった。
濃い影が、私の前に伸びた。
「早苗っ！」
ふりかえると、ヘッドライトの光の中に、貴裕がいた。

「なんで……」
「恋人の丘に行ったんだろ。ラインで見た」
「けど」
「お前、スマホ持ってないだろ。ちょうど母さんも帰ってきたから、念のためだよ」
貴裕の手が、私の手を握った。
「ほら、帰るぞ」

夜の景色が、頭のうしろから前へ、流れていく。
荷台に私と貴裕を乗せて、軽トラはゆるやかに走っていた。
「ふたりなら、ひとり落ちてももうひとりが教えられるでしょ」と言ったのは貴裕のお母さんだが、今思えば、あれはおばさんなりの冗談だったのかもしれない。
私たちは同じ毛布にくるまって、壁にもたれて座っていた。
「私ひとりでもよかったのに」
「いいんだよ。母さんも言ってただろ」
「……あのさ、貴裕」
「うん？」
「私、フラれちゃった」

軽く、言ったつもりだった。
「……そっか。ま、気にすんなよ」
その時、私は、貴裕はどんな顔をしていたのか。
「右田さんも、ちょっとした遊びのつもりだったんだろ？　お前も最初からわかって」
そう、そのとおり。なのに、
「ちがう」
声が、ふるえた。
「……私、女の子が好きやったと」
涙が、あふれた。
しばらくふたりとも、なにも言わなかった。
キスをして、抱きしめようとした私を突きとばす右田さんの泣きそうな顔が、頭を埋めつくす。
私は、小さくなっていく景色に目をこらした。
「――私、卒業したら出てく」
「出てくって、家を？　無理だろ」
「じゃあ寮のある高校に行く。高校出たら県外に行って、もう帰ってこない」
「なんで……」
「だって普通じゃないよ！　こんなの！　女なのに女が本気で好きなんて、きっとみんなバカにす

る。気持ち悪いよ。お父さんたちだって」
小さなまちだ。噂はすぐに広まるだろう。両親の耳にも、すぐに入るに違いない。
「……もう、私はここにおったらいかんとよ」
「そんなバカな話あるかっ！」
飛沫と怒鳴り声が、私の頬を打った。
「なんで、なんで早苗が女が好きやからって、出て行かんといかんとか。他人と違うからって、後ろ指さされんといかんとか」
びっくりして見た貴裕の顔は、真っ赤だった。
「……でも、でも、そうなんだよ。私だって……みんな、自分と同じが当たり前だと思ってる。普通と違うやつは、いじったっていいと思ってる。……攻撃したっていいと思ってる」
だからウソをついた。だから、怖かった。私は知っていたから。
「おもしろいんだよ。笑えるんだよ。そしたらすぐ、みんな知っちゃう。私が女の子が好きだって。普通じゃないって」
自分が正しくても、相手が間違っていても、誰かの言葉をさえぎることはできない。考え方を変えることはできない。
私たちは無力だ。貴裕もわかっていたはずだ。
「それでも」

貴裕は言った。
「それでも、ここは早苗のふるさとだろ」
一枚の毛布、稲穂の匂いが私たちを包みこむ。
「帰ってこいよ。俺はじいちゃんの山継いで、ずっとここにいるから。何年経ったって、なにがあったって、俺はお前が帰ってくるの、待ってるから」
私たちは空を見た。縦にのびる夜空に、敷きつめられた星が輝いている。
私のほっぺたが乾いたころ、貴裕がつぶやいた。
「でも——そっか、はあ……」
「……なに？」
「やー、うん。女が好きなら、しょうがないよな」
そんなことを言って、へらっと笑う。
「……私だって、好きで好きになったわけじゃないよ」
「はは、なんだそりゃ」
本当に。恋というのは、ままならない。

＊　＊　＊

祭りを楽しむ人の歓声が、遠く聞こえる。
空は高く、晴れていて、すこしひやりとした風が心地いい。
御田祭のころとは違って、たっぷりと肥った二頭の馬が、会場へと引かれていく。
「なんしよっと？」
ふりかえると、作業着姿の貴裕がいた。
私は、ゆらしていた足をたたんで、石積みの上に立った。近づいてきた貴裕が足元をのぞきこむ。
「うーん、川、見てた」
私たちは、三十二歳になった。
「家には顔出したとか？」
「うん」
「ひとりで？」
「……うん」
「そうか」
数年ぶりの帰郷だった。行きがけこそ「今度こそは」と思っていた。なのに、「いい人はおらんとか」「孫の顔が見たい」と一片の疑いもない目で見られると、言えない。
私はウソがうまくなった。
「変わってないね」

「そうかあ？」
「さっき田代小、見てきたよ。あの木、まだあるんだね」
川むこうの、山に隠れた学校に目をむけた。
「なつかしいな。校庭で遊んでたら、貴裕が泣いててさ」
「泣いてない。助けを呼んどっただけや」
仏頂面で、じとりと睨みつけてくる。
「その話、誰にも言っとらんやろうな？」
「もう時効でしょう」
笑って、そっと息をつく。右田さんは約束を守ってくれたらしい。
貴裕が丘の上の校舎を指さした。
「義務教育学校って、わかるか？　今はな、小学校から中学校まで、みんなあそこで勉強すっとよ。うちん娘も、今年からあそこに通っちょる」
「へえー。まあ私たちの時も、ほとんど持ち上がりだったしね」
「早苗」
「うん？」
「あんころとは、ちがう。変わっとっとよ」
貴裕は私の横に立つと、川の先に目をやった。色とりどりのテントが、神社に続く道に並んでいる。

「この間、右田さんにあったが」
大人になって、貴裕は訛りが強くなった。
「まあ、もう『右田さん』やないっちゃけど」
「……へー、元気だった？」
私は、すました標準語で答える。
「ダックスフントのおもちゃ、子どもが遊んじょると」
ふいうち。その一言が、耳でこだました。
私は唇を噛んで、足元を見た。ぽつぽつと、岩の上に染みができる。
――――よかった。
こぼれた声は、貴裕の耳にきこえただろうか。
ふたり突っ立ったまま、風を受けていると連れが戻ってきた。
「パパー」
「早苗さーん」
大人と子ども、ふたつの声が近づいてくる。
あわてて顔をふいていると、黒縁メガネが私の顔をのぞきこんだ。泉だ。
「あ、あの、どうしたんですか？」
「あー、パパ、さなえちゃん泣かしてるー」

「ちゃうが、これは」
無精髭の山男が「パパ」とは、ちょっと笑える。
私は大丈夫、と泉の手を握り、父をこづく少女のそばにしゃがみこんだ。
「そうだよねー。女の子泣かしちゃダメだよね」
冗談めかして笑いかける。だが、
「……どうしたの？」
「さなえちゃん、ちがうよ」
「え？」
「おとこの子とか、おんなの子とか、かんけいないよ。おともだちは泣かせちゃダメだよ」
そう言って、またわざとらしく貴裕の方を見上げてみせる。
「ねー、パパ」
「はーいー。ごめんなさーいー」
「もうっ！」
ポカポカとしかる娘を、貴裕は軽々と肩に乗せる。
「泉さん、いい写真は撮れたね？」
「はい。あかりちゃんにもお祭りのこととか教えてもらって」
「神門の……恋人の丘には、昨日行ったっちゃろ？」

「はい！　ちょうど雲が出ててすごく幻想的で……さっそく待ち受けにしちゃいました。ほら」
「もう、なん言いようとね。いい仲のふたりがあそこに行ったら、ほかにやることがあるやろ」
「あ……はあ」
黒縁メガネの奥で、泉の顔が赤く染まった。
美郷町の話をして、泉が「行ってみたい」と言ったのが旅のはじまりだった。近所の本屋で買ったガイドブックに丸をつけ、私とここに行きたいと言ってくれた。
ふたりで鳴らせば絆が深くなるというあの鐘を「じゃあ、いっぱい鳴らさなきゃ」「まだ、まだ」といつまでも一緒に鳴らしてくれた。
そのあと、ふもとで寄った売店のおばさんに「今朝のカップルは、昼まで鳴らすかと思ったわー」と言われたのは笑い話だけど。
「泉さん。早苗のこつ、よろしくね」
泉がふしぎそうに首をかしげた。視線でたずねられても、私も首を横にふるしかない。
そんな私たちを気にせず、貴裕は話し続ける。
「ずっと一緒におってとは、俺からは言えん。でん、あんたがこいつのこと大事に思うんやったら、なにがあってん手ぇ離さんでやって」
いつのまにか、私の友だちは親になった。家族をつくった。
「大事なやつの手は離したらいかん」

私は、どうだろう？
貴裕の目が、私を見た。
「早苗、お前もやぞ」
この日本で、同性カップルが別れる確率は、異性カップルより高いと言われている。それは籍を移さなかったり世間に公表しないことで、別れるハードルが低いからかもしれない。
たくましくなった肩の上で、よく似た子どもがきゃあと叫ぶ。
「あきらめんなよ」
風が吹いた。嘶きと、人の歓声が聞こえてくる。
「腹から笑える日が、必ず来るかい。俺はここで、ずっと待っとるからな」
今はただ、うなずくだけでいい。
「また、ふたりで帰ってこいよ」

一次審査通過作品

「青いトンネル」花逗成
「青葉中学歴史部の奮闘」白木あさ
「王家の谷」真邑籌
「丘ボーイ」伊古兄ロタ
「おさらば」津曲桃々子
「おせりに求めよ」壱五六
「乙女の邂逅」大野夏櫻
「鏡の中の金魚」芥生杜南
「川の街」河野玄翔
「貴殿の正体」樋口健司
「草煎りのユンジェ」杉尾周美
「百済王記南海行軍異聞」北原岳
「百済の王女」秋乃佳月
「国破れて人情あり」宮藤宙太郎
「子らは炎に導かれ」寺西輝将
「先行きの地図」南理維
「時空を超えて」平田卓司
「千年後の僕へ」常田麻宇
「先輩と異界」青井園
「たから」大矢佳苗
「竹之丞漂流記」戸高豊文
「民として生きた百済王　〜もう一つの禎嘉王物語〜」田中竜也
「父よ、あなたは…」春野洋治郎
「daisy」白石慧
「時を越えた縁」藤田れもん
「火男」夏沢渓太
「ふるさとの灯」宮地佳那子
「星読みの国」帯刀古禄
「まほろばに星の降る夜」樋口京美
「道照らすものたち」涼木みどり
「無音にしたい呟き」富崎真彦
「夕暮れノオト」繁田優菜
「Lovely Place」松田紙弥

【お知らせ】

第4回「西の正倉院 みさと文学賞」開催決定!!

好評につき「西の正倉院 みさと文学賞」は第４回も開催が決定いたしました。賞の詳細は下記のURLをご覧ください。たくさんのご応募をお待ちしております。

https://www.misatobungaku.com

第2回「西の正倉院 みさと文学賞」受賞作品がラジオドラマ化!!

令和３年１月17日（日）、MRTラジオにて、第２回「西の正倉院 みさと文学賞」優秀賞受賞作品のラジオドラマが放送されました。

「百済の料理人」（MRT宮崎放送賞）
原作：みよし麻　脚色：中澤香織

下記の特設サイトより視聴可能です。ぜひご視聴ください。

http://mrt.jp/radio/special/misato/

第3回「西の正倉院 みさと文学賞」作品集

2021年　3月 31日　初版発行

編　　者　「西の正倉院 みさと文学賞」実行委員会
（宮崎県美郷町、TBSスパークル）

装　　幀　山﨑里美

協　　力　MRT宮崎放送、一般社団法人日本放送作家協会

企業版ふるさと納税協力企業　株式会社イワハラ、株式会社花菱塗装技研工業、有限会社花菱精板工業、三桜電設株式会社、大正測量設計株式会社宮崎支店、株式会社バディ、株式会社アブニール、株式会社大興不動産、株式会社南日本環境センター、株式会社創建、西部電気工業株式会社宮崎支店、株式会社長田建築企画設計事務所、株式会社アップス、株式会社丸誠電器

販売部　五十嵐健司、清水寿朗

編集人　鈴木収春

発行人　石山健三

発行所　クラーケンラボ
〒101-0064 東京都千代田区神田猿楽町2-1-14 A&Xビル4F
TEL　03-5259-5376
URL　https://krakenbooks.net
E-MAIL　info@krakenbooks.net

印刷・製本　中央精版印刷株式会社

©Misato Bungakushou, 2021, Printed in Japan.
ISBN 978-4-910315-05-8
乱丁・落丁本はお取り替えいたします。